アルシャードガイア　奇跡の日々

美山吹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルシャードガイア　奇跡の日々

【Ｎコード】
Ｎ８９１７Ｌ

【作者名】
美山吹

【あらすじ】
高校生、伝宝勇生は下校の途中、謎の怪物に襲撃される。
すんでの所で勇生を救ったのは魔術師の少女、小練マーシュ・マロウ（マシュマロ）だった。
マシュマロは、勇生に告げる。「世界は危機に瀕している」
そして、「あなたは危機に立ち向かう力を持っている」と。
世界を巡る戦いに身を投じる少年少女を主役とした、学園ファン

タジーアクション。

【６／１５追記】『ａｒｃａｄｉａ』様（ｈｔｔｐ：／／ｍａｉ－ｎｅｔ．ｎｅｔ）、『ｐｉｘｉｖ』（ｈｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｐｉｘｉｖ．ｎｅｔ／）様にも投稿させていただいています。

第1話「白い仮面の少女」ーその1

○シーン1

夕暮れ時の街はどこか寂しい。伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）はバスの窓から見える景色にそんなことを感じていた。大事なものをどこかに忘れてきたような、それなのに何を忘れたのか思い出せないような、言いようのない気持ちが勇生の胸の中に広がっている。

短い黒髪。えんじ色のジャケットに包まれた少し小柄な細身の体は、少年から青年へ変わろうとしている真っ最中だ。茶色がかった瞳は、夕日の色に照らされて赤みを増している。

勇生はこの春で高校二年生になったばかりだ。しかし、その程度で生活が大きく変わるわけではない。いつもと同じような授業を受けて、いつもと同じように下校する。毎日見慣れている、退屈な景色のはずだ。

「昨日は、こんな風に思ったかな？」

自分でも気づかないうちに小さく呟いていた。

停留所。勇生はバスから夕暮れの景色へと降りていく。

「まあ、いいか。早く戻らないと試合、見逃しちゃうよ」

通学鞄を背負いなおし、家へ駆け出そうとする。

そのとき、異様なものが目に映った。

人の形をした影が地面から離れて、人間の代わりに立っているような姿だ。全体的な印象は、小柄な少女のように見える。

はじめは、夕日を背にしているせいだと思った。だが違う。細い指先から髪の後ろに結ばれたリボンまで、そのすべてが暗い。まるで、光がそこにだけ当たることを拒んでいるかのようだ。ただ一つ色を持っているのは、影の顔を隠す仮面。白い毛に覆われた仮面が、その目元に着けられている。仮面に刻まれた赤い瞳が、勇生をじっと見据えていた。

「……え？」
日常の中に不意に見えた異様なもの。勇生は思わず立ち止まる。
『一緒に来て……』
ささやく声が聞こえた気がした。瞬間、影の少女が腕を振り上げた。その腕が長く、細く伸びていく。鞭のようだ、と勇生が思った瞬間、彼はその鞭に打たれていた。
「あぐッ！？」
衝撃で勇生の体が壁に激突する。自分の頭と壁がぶつかり合う鐘のような音が聞こえた。
視界がぐらぐらと揺れる。全身の感覚が痛みと痺れに支配され、指一本動かせない。
周囲の景色が、徐々に色あせていく。少女の影と同じ、色味のない闇に包まれるように。
その闇の中から、新たな影が次々に現れる。いくつもの絵の具を混ぜ合わせて作ったような黒い肌をした何か。人の形に近いが、両手はだらりと地面まで垂れて、巨大なかぎ爪が生えている。そんな怪物がいくつも。
――何が起きているんだろう？
体じゅうの感覚が麻痺して、考えることすらできない。分かるのは、自分にはとうてい理解できないだろうということだけだ。
制服に何かが染み出しているのを感じる。自分の体から？　赤いものが、徐々に広がり、自分の体温と一緒になって冷え込んでいく。
――このまま死ぬのかな。
心のどこか深い部分でそう感じていた。目の前に、かぎ爪の怪物が迫ってくる。そして、ゆっくりと腕を振り上げた。
悲鳴をあげたい。しかし、声が出なかった。肺が言うことをきかない。勇生は口をぱくぱく動かして、体をわずかにのけぞらせた。
怪物が腕を振り下ろす。大きく広げられたかぎ爪が、ざっくりと肩から体を引き裂いていく。皮を破り、肉を裂き、骨を砕く。
「あアアア――ッ！」

行き場を失った悲鳴が、のどの奥から肺に響く。
血が噴き上がって視界を真っ赤に染めるのだろう。そう思っていた。しかし、勇生が次に見た景色は予想に反していた。
青。
自分の体から放たれている。暗い景色に放たれた光に驚いた怪物たちが後ずさる。
「光……？」
同時、体の奥がかっと燃えるように熱くなる。ドクン、ドクン、と自分の体の中を流れるものが感じられた。それは体中に行き渡り、指先に至るまで力強い光で満たしていく。
「っ……！」
手を伸ばす。手のひらに、何かが触れた。いっそう強い青い光。宝石のようなものが、いつの間にか目の前に浮かんでいた。縦に細長い八面体。夏の空のように青い光を放っている。
気づけば、引き裂かれたはずの肩の傷がふさがっていた。
次々に訳の分からないことが起きている。勇生は混乱しながら祈っていた。
「危ない、下がって！」
不意に声が聞こえた。先ほどの心にささやくような声とは違う、はっきりとした肉声だ。
勇生の視界に別の人影が飛び込んできた。その人影は、怪物から勇生を守るように、間に立ちはだかる。
女の子だ。髪は栗毛がかっていて、腰までの長さが後ろで二つにまとめられている。なんとなく幼さを感じさせる太めの眉。大きな青い瞳が、一瞬だけ勇生に向けられた。
何より目を引くのは、彼女が手に持った棒状のもの。先端には水晶のようなものが取り付けられ、中程には弾帯が巻かれている。その先端の水晶が、赤く輝いた。
「炎よ！　力ある矢と化し、敵を貫け！」
叫ぶと共に、水晶から火線が閃く。それは怪物たちの中心に突き

刺さった。
「ショット！」
ガシュン、と杖が弾帯を巻き上げる。炎が半球の形に広がり、怪物たちを包み込む。
「我がシャードよ！　死者の女神の加護を与えよ！」
少女の胸から赤い光がほとばしった。瞬間、炎が数倍にふくれあがり、巨大な火柱となった。耳の奥を焦がすような轟音が晴れた時には、怪物たちが居た場所には何も残っていない。
まるで魔法のような風景。
「特撮？　何かのドッキリ？　でも、なんで僕が殴られて……いや、そもそもこんなところでそんなことしているわけがないし……」
勇生は痛みも忘れて、なんとか自分の常識の中で理解しようとしていた。
「あぶなかったね。大丈夫？」
少女が振り返る。勇生を安心させようとするように、笑みが浮かんでいる。
「きみは？」
あっけにとられた勇生は、それだけ言うのがやっとだった。
「わたしは……」
瞬間、勇生は見た。白い仮面を着けた影が、鞭と化した腕を振りかぶっている。
「あぶない！」
考えるより早く、体が動いていた。地面を蹴り、少女に飛びつく。
「きゃっ！」
少女の体を抱いたまま、勇生は地面を転がった。その頭上を、空気を切り裂く音を立てて鞭が過ぎ去っていく。
「何なんだ、一体！　こんな、こんなむちゃくちゃな……！」
憤りが口をついて出そうになるが、うまく言葉にならない。白い仮面がじっと自分を見つめていることに気づいて、思わず体がすくむ。

ふと影の少女がきびすを返した。建物の間にできた深い影の間へ、歩いて行く。
「待ちなさい！　氷の弾丸よッ！」
少女が勇生の腕から飛び出し、杖を振るった。今度は氷が飛び出し、吼えるような甲高い音と共に建物の間に飛び込んでいく。
しかし、それは目標に命中することはなく、壁にぶつかってカツンと高い音を鳴らしただけだった。影の少女の後ろ姿は闇に溶け込み、消えている。
「い、いったい、何がどうなってるの？」
勇生は必死に答えを探していた。何が起きているのか。影の少女や怪物たちは何なのか。なぜ炎や氷が飛び出したのか。目の前にいる少女は何者なのか。分からないことだらけだ。
「ああ、そっか。今、覚醒したんだ。それじゃあ、分からないことばかりよね」
少女は困ったように太めの眉根を寄せる。
「すぐに分かると思う。わたしは小練（こねり）マーシュ・マロウ。それだけ、覚えておいて」
少女はそう言って、さっと駆けだしていった。
「ま、待って！」
しかし、少女は振り返りもせずに去った。
気づけば、いつの間にかあたりの風景は見慣れた色を取り戻している。
「こねり……ま、マシュマロ……？」
混乱した頭で、それだけ言うのがやっとだった。

○シーン2

それは見たこともないのに、なぜか懐かしい光景だった。
見上げるほどの巨大な樹。無数の輝く枝葉。

しかし、それだけではなかった。トゲのついた真っ黒なツタ。ツタは大樹の根から幹に巻き付いている。
勇生の見ている前で黒いツタは枝の一つに伸び、その枝に絡みついていく。根元をぎりぎりと締め付けられるうちに、枝はじわじわと黒く染まっていき、ついに腐り落ちた。
「これって……」
黒いツタ。何かに似ていると思った瞬間、頭をよぎるものがあった。夕方に見た影の少女。彼女が振り上げた鞭にそっくりなのだ。
そのとき、頭の中に響き渡るような声が聞こえた。
『ユグドラシル』
「ユグドラシル？　この樹の名前？」
答えはない。代わりに、いくつもの声が響いてくる。
『このままでは……飲み込まれてしまう……奈落……』
『ガイアを……奪わせてはならない……』
『至れ……アスガルドへ……』
頭の中に反響するように、声は響き合い、互いに競い合うように大きくなってゆく。
それはやがて、混じり合って一つの大きな叫びとなった。
『助けて！』
樹に巻き付いたツタは、新たな枝に向かっている。勇生は思わず、そのツタを止めようと手を伸ばしていた。
「やめろぉッ！」
そして、自分の叫び声で目を覚ました。

目覚まし時計が床で、けたたましくベルを鳴らしていた。
しばしの後。勇生は坂道を必死に駆け上がっていた。
靴が軽い音を立てて地面を蹴るたびに、短い髪が春の日差しに照らされて弾む。
道の左右に植えられたサクラから、ひらひらと花びらが舞い落ち

てくる。汗ばんだ額に花びらが張り付くのにも構わず、勇生は走る。
「変な夢を見たせいで遅刻しそうになるなんて！」
いらだちを紛らわせるように声が漏れる。
目覚ましが役に立たないほど深く眠っていたのか、起きたときにはいつものバスが出る時間を過ぎていたのだ。とにかく制服に着替えて、そのまま飛び出した。
「だいたい、どこからどこまでが夢だったんだよ！」
昨日、バスを降りてからの光景はめちゃくちゃだった。今考えてみれば、すべてが夢だったのかもしれない。そう思えるようになっていた。
人間というのは案外しぶといもので、帰り道であんなことがあったというのに、勇生は家に帰った後、努めていつもと同じように過ごした。夕食の準備をして、格闘技の中継をテレビで見た。試合が終わった後、見るともなしにチャンネルを変えていたら、すっかり寝るのが遅くなったのだ。
坂道の先に、私立瑞珠（ずいしゅ）学院の校門が見えてきた。自分でも信じられないような加速。勇生は体の中に残された力を振り絞って、校門へ飛び込んだ。
「ま……間に合った！」
春らしい陽気の中を走ってきたせいで、全身が汗だくだ。シャツが体に張り付いてくるのを感じながら、呼吸をあえがせる。しかし、勇生はさわやかな達成感を覚えていた。
その尻を、バシッと景気のいい音を立てて竹刀が打った。
「いいっ！？　」
思わずよろめいて、たたらを踏む。尻を押さえながら、文句を言おうと振り返った。
「こらー！　もう予鈴は鳴っとるぞ！」
いかつい顔がアップで迫ってくる。思わず勇生は後ずさった。赤いジャージに身を包んだ須賀川太一（すかがわ・たいち）だ。保健体育の教師だが風紀も担当している。遅刻してくる生徒を取り締まっていたようだ。

「す、スカ先……」
思わず、生徒達の間で密かに須賀川につけられているあだ名を漏らしてしまった。
「誰がスカセンだ！」
「い、いえ！　須賀川先生、おはようございます！」
ビシッと背を伸ばして挨拶する。機嫌を損ねて遅刻にされたらたまったものではない。
「よし。……にしても伝宝、お前が遅れてくるとは珍しいな。いつもの女生徒はどうした？　バスで一緒になるとかいう……」
「はい？　なんの話です？」
勇生はきょとんと瞬いた。いつもの女生徒。身に覚えがないし、だいいち今日はバスには乗っていないのである。
「ん？　いや、俺の気のせいか？」
須賀川もおかしなことを言ってしまったことを自覚してか、妙な顔つきで首をかしげる。勇生はええっと、と言葉を探してから、
「いつもなら、バスに乗り遅れるなんてことはないんですけど」
「ほう、伝宝、まさか走ってきたのか？」
瑞珠学園はN市の東にある丘陵地に建てられている。おかげで首都近郊とは思えないほど豊かな緑に囲まれているが、いかんせん交通の便が悪い。登校時間に運行しているバスを逃すと、もはや遅刻は決まったようなものだ。しかし、勇生は長い坂を駆け上がってきたのである。
「一応、皆勤ですから。遅刻しないようにと思って走ってきたんです」
「普通はバスに乗り遅れれば諦めるがな。なかなかいい根性をしとるじゃないか！」
須賀川は機嫌よさそうに勇生の尻を竹刀で叩く。力が入っていないとはいえ、頼りがいがあるとはいえない体つきの勇生は、思わずよろけてしまう。
「い、いたた……。なんで叩くんですか」

「お前は諦めが悪いくせに体力がないからな。もっと鍛えなければいかんぞ」
須賀川はそう言って、にやーりと笑ってみせる。スカ先の猛烈なシゴキといえば、校内では有名だ。おかげで彼が顧問を務めるサッカー部は強豪として知られているのだが……いかんせん、勇生には耐えられそうにない。
「は、はは……。遠慮しておきます」
「そうか？　まあいい、早く教室へ行け」
須賀川はさらに後からやってくる遅刻生徒を取り締まるために校門に向き直る。
「あ、そうだった！　須賀川先生、ありがとうございます！」
勇生は再び、背筋を伸ばして頭を下げる。そして痛む尻を押さえながら校舎に走っていった。

第1話「白い仮面の少女」ーその2

○シーン3

2年B組の教室はざわついていた。

勇生が到着したのはいつもよりもかなり遅かったが、幸いなことにホームルームはまだ始まっていなかった。

勇生は背中に汗で張り付くシャを感じながら、机に座って呼吸を整えている。

「どうした、一人きりかい？」

かけられた声に顔を上げる。そこにいたのは、クラスメイトの総田洋太（うだ・ようた）だ。人なつっこい女顔の少年。くるくるとよく動く目が、今は勇生に向けられている。

「一人って？」

聞き返す。全力疾走の後で声を出すのも煩わしいが、洋太にはその疲労感を忘れさせるような不思議な魅力がある。

「いつもは真っ先に教室に来てるでしょ？　今日は珍しく一人だし、何かあったのかと思ったのさ」

洋太が答える。勇生は少し疲れた頭で、その言葉の意味を探ってみた。

「一人って？」

考えを巡らせた結果、結局同じことを聞くことになってしまった。

「え？　いつもは違うじゃないか。一番早く来て、二人で話してて……あれ？」

洋太がこめかみを押さえる。何かを思い出そうとしているようだ。

「君って、壁と喋るタイプの人だっけ」

洋太がシリアスな顔で言った。がくっ、と勇生の肩から力が抜ける。

「変な分類しないでよ。壁と喋りなんかしないって」

「そうだよね。誰かと喋ってた気がするんだけど」
「誰かって、きみじゃなくて？」
勇生が問う。洋太は首をかしげて、
「誰かと喋ってたでしょ？　確か……」
洋太は眉間にしわを寄せて、ウーンとうなっている。思い出そうとしているようだ。
勇生は何かとても大事なことについて話している気がしていた。心の中で、危険を感じる役割を持った部分が必死に警鐘を鳴らしているのかもしれない。
ふいに昨日のことを思い出す。バスに乗っているときもこんな感覚を味わわなかっただろうか……？
ふと洋太の顔から力が抜けた。
「ま、そんなことはどうでもいいか」
「そんなことって……」
「そ・ん・な・こ・と・よ・り、聞いた？」
洋太が顔を近づけて聞いてくる。
「き、聞いたって、何を？」
謎の迫力に気圧されて、勇生も問い返す。心の中の危機感は音も立てずに消え去った。
「今日、転校生が来るらしいよ」
「転校生？」
引っかかるものがあった。新学期が始まったばかりのこんな時期に転校生なんて珍しいから？　それもあるが、その転校生とやらに運命的な何かを感じていた。
「女の子だったらいいよね」
洋太がにっと笑う。その背後で、教室の戸が開かれた。
教室の中に広がっていたざわめきがぴたっと収まる。入ってきたのは、勇生たち2年B組の他人教師だ。
「あー、今日はホームルームの前に、転校生が居ます」
どこか無気力そうに担任教師が言う。

「入ってきてくれ」
担任の声に応えて、少女が教室の戸をくぐる。
栗毛がかった髪は腰の長さほどに伸ばされ、二つに分けて結わえられている。朝の日差しを反射して、一本一本がきらきらと光を放っていた。
瑞珠学院の女子制服。えんじ色に桃色のラインが入ったスカート。胸元のリボンの隣に、ハート型の宝石が着けられたブローチ。宝石の色は桃色がかった赤だ。
勇生はその宝石を見て、怪物に襲われた時のことを思い出した。自分の手の中に現れた青い宝石。それと同じ何かを感じたのだ。
同時、あのときの光景が目の前に迫るように浮かんだ。何体もの怪物が迫ってきて、かぎ爪を振りかざして……
「っ！」
思わず勇生はぎゅっと目をつぶった。しかし、記憶はまぶたの裏にまざまざと浮かび上がってくる。少女の形をした影が、白い仮面と共に自分に迫ってくる。恐怖に身を縮まらせた時、別の影が飛び込んできた。不思議な杖をもった少女。勇生はわき上がる恐怖を打ち払うような安堵感を覚えた。
「自己紹介をしてくれ」
落ち着いてきた聴覚に、担任の声が聞こえる。勇生は呼吸を整えて、ゆっくり目を開いた。そして、ハッとした。教卓の前にいる転校生こそが、まさにその少女だったのだ。
「初めまして。わたしの名前は、小練……」
「マシュマロ！」
勇生は思わず叫んでいた。
教室は再びざわついている。転校生の少女がこほんと咳払い。
「……小練、マーシュ・マロウです」
改めて名前を聞き、教室のざわめきはひとつボリュームを上げた。
「なるほど、マシュマロ……」

「マシュマロか……」
生徒たちがぼそぼそとささやきあう。後ろにいる洋太が、勇生の脇をつついた。
「ねぇねぇ、知り合いなの？」
陽太の目が輝いている。噂好き、ゴシップ好きの本領発揮だ。
「え、い、いや……」
思わず答えに詰まる。まさか、怪物に襲われている時に助けられたんだ、なんて言えない。
「昨日、街中で会ったの。そのときに少し。ね？」
転校生、小練マーシュ・マロウが言った。青い瞳が勇生を見ている。思わず、勇生は頷いた。
「マジ？　ねえマシュマロさん、一体何があったの？」
「だから、マーシュ・マロウ！」
転校生は両手を握って反論する。
「マシュマロさん、血液型は？」
「マシュマロさん、彼氏は居るの？」
調子に乗った男子が洋太の質問に便乗して、質問を浴びせかける。
「だから……も、もう！」
マシュマロが勇生をきっとにらみつけた。思わず、勇生は顔を背ける。
「あー、そろそろホームルームを始めるぞ」
担任が言う。生徒たちは渋々口を閉じた。
「小練くんの席は……伝宝の隣が空いているな。そこに座ってくれ」
勇生はつられて隣の席に目を向けた。そこは確かに空席だった。勇生の席は窓際の中ほどである。
「あれ？　なんでこんなところに席が空いてるんです？」
「なんでも何も、空いているんだから空いているだろう」
「でも……あ、あれぇ？」
昨日も空席だっただろうか？　思い出そうとしてもうまくいかない。まったくピントが合わないカメラのように、すぐにほかのこと

に気を取られてしまうのだ。
そうこう考えている間にマシュマロが席に座った。
「よろしく。伝宝くん」
「よ、よろしく。ま……小練さん」
「マシュマロでいいわよ、もう」
マシュマロが諦め気味に言う。やれやれと肩をすくめる仕草。その仕草に、急にピントが合わさった。別の女の子の姿が、マシュマロに重なって見える。妙に見慣れているように感じた。思わず、その名前を呼ぼうと口を開く。
「ちっ……！」
が、すぐに再び意識が乱れる。自分が何を言おうとしたのか、全く思い出せない。
「……ち？」
マシュマロの青い瞳が勇生を見つめている。恥ずかしさが意識を覆い隠して、勇生は何も言えなくなった。
「な、なんでもない」
「そう？　ねえ、それより、今日の放課後は空いてる？」
「空いてるけど……」
「お、デートのお誘い！？」
洋太がはやし立てる。マシュマロは手を振って否定した。
「ち、違うってば！　時間があるなら、放課後にこの学校のこと、案内して欲しいの」
「ああ、そっか。いいよ、それぐらいなら。どうせ放課後にすることもないし」
「おおっ、勇生がデートの誘いを受けた！」
洋太がさらにくちばしを突っ込んでくる。
「だ、だから違うってば！」
マシュマロがばんばんと机を叩いて反論する。
「おーい、ホームルームを始めるぞー」
担任が寂しげに呟いた。

○シーン４

授業はいつもと同じように、淡々と過ぎていった。

今朝全力で坂を駆け上った疲れもあり、ついうとうとしてしまう。それでも、勇生はなんとか眠気と戦いつづけ、ようやく放課後。

「はぁ……」

情けなくてため息が出る。

昨日のことは何だったのか？　あのときに会ったマシュマロが転校してきたのは偶然なのか？　それとも、必然なのか？　だとしたら、一体なぜ？

聞きたいことが山ほどあった。

普段から言いたいことがあっても飲み込んでしまうような部分はあったが、それだけではない。

怖いのだ。

聞いてしまったら、昨日と同じことがまた起きるかもしれない。こうやって平和に学校生活を送っているのに、それが壊れてしまうかもしれない。あんな景色を二度と見たいなんて、普通の男子高校生が思うだろうか。

情けないと思うが、聞く勇気が出ないのだ。

だが、それでも。勇生の予感が告げていた。いつかは聞かなければならないということを。そして、そのときはすぐ目前に近づいている、ということを。

「伝宝くん？」

気づけば、マシュマロが顔をのぞき込んできていた。

「うわっ！　な、何！？」

思わず身をのけぞらせる。改めて周りを見回せば、本校舎の階段だ。

「ぼーっとしてたから、どうしたのかなと思って」

放課後になって、約束通り勇生はマシュマロに学校の中を案内していた。
一般の教室や学習施設が並んでいる本校舎と、メディア設備などを整えてある新校舎を案内した後だ。ちなみに、学院にはもうひとつ、ほぼ廃墟同然になっている旧校舎というのもあるのだが、そちらは立ち入り禁止である。
「あ、ああ、ごめん。ちょっと気が抜けてた」
ごまかすように言って、戸に手をかける。
開いた戸から夕日が急角度で差し込んできて、二人の姿を照らした。マシュマロがまぶしさに目を細める。校舎の中を案内するうちに、すっかり日が傾いていたようだ。
「ここが屋上。結構、いい眺めでしょ？」
勇生はマシュマロを振り返った。屋上の床には、二人の長い影だけが映されている。
運動場や野球場、周囲に広がる木々やN市の町並みも一望することが出来る。運動部の生徒たちの声や、吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。青春の風景である。
ちょうど西に沈もうとしている太陽が、空を見事な夕焼けに染めているところだった。学校の周りの丘では木々の葉がさらさらと揺れて、夕日を照り返している。
「そうだね、最初は街から遠くて大変かと思ったけど、この眺めのためなら我慢できるかも」
マシュマロがにっこりと笑顔を浮かべる。勇生は朝のことで怒っているかと思っていたのだが、そうでもないらしい。
しばしの沈黙が降りる。
「わたしに聞きたいことがあるんじゃないの？」
不意にマシュマロが言う。
「せっかく二人で話せるように案内してもらったのに。昨日のこと、忘れたわけじゃないよね」
息が詰まる。とうとう、そのときがやってきたのだ。青い瞳に見

つめられて、ドクドクと自分の心臓が激しく収縮する音が聞こえてきた。恐怖が再びわき上がってくる。好奇心なんてかけらもない。聞かなければならない、何かが耳元でささやいているようだ。
「きみは……きみは一体、何者なの？」
うわずった声。昨日の光景が浮かぶ。かぎ爪が肩に食い込む感覚が。
「わたしは戦闘魔術師（バトルメイジ）。魔法使い、って言った方がわかりやすいかな」
現実離れした回答。勇生はじっとマシュマロを見た。笑おうかと思ったが、マシュマロの瞳は真剣そのものだ。だいいち、自分の頬が凍り付いたように笑いの形を作ろうとしない。
「魔法使いって……じゃあ、昨日のは」
「もちろん、夢でも何でもないわ。あなたは『やつら』に襲われて、それをわたしが助けたの。本当にあったことよ」
「そんな、まさか。あんなこと、今まで一度も……」
「みんなが知らないだけよ。普通の人たちの知らないところで戦っているから」
「なんで？　あんな……わけがわからないよ。どうして僕に？」
わき上がってくる恐怖を無理矢理に抑えこむ。マシュマロは考え込むように口を閉じてから、
「たぶん、あなたのシャードを狙ったんだと思う」
「シャード？」
聞き慣れない言葉だ。
「分からない？」
マシュマロの青い瞳が向けられる。その瞳の色を見るうち、思い当たるものがあった。
制服のジャケットを探る。胸ポケットに固い感触。それを掴んで取り出してみる。
宝石。夕日に照らされてなお、きらきらと青い光を放っている。
「そう、それがあなたのシャード。わたしと同じ」

そう言って、マシュマロが胸元に手を伸ばす。ブローチに着けられたハート型の赤い宝石。マシュマロは言い聞かせるような調子で言葉を続ける。

「『やつら』はこれを狙っているの。シャードだけが、『やつら』に対抗する唯一の力だから」

どくどくと胸が鳴る。額をぬらす汗をぬぐって、勇生は聞いた。

「それって、また僕が襲われるかもしれないってこと？」

嘘だと言って欲しい。冗談であって欲しい。しかし、マシュマロはゆっくりと頷いた。

「だから、わたしが来たの。あなたが『やつら』と戦えるように、導くために」

「ち、ちょっと待ってよ。いきなり言われたって、そんなこと。信じられないって！」

足下がおぼつかない。体を支えていないと倒れてしまいそうだ。勇生は屋上の入り口に近寄り、壁に手をつこうとした。

そのとき、勢いよく戸が開かれた。ぎょっとして見上げる勇生の顔に、大きな影が落ちた。

第1話「白い仮面の少女」ーその3

○シーン5

「こらー！　まだ練習は終わっとらんぞ！　グラウンド１０周だ！」
運動場で瑞珠学園の本校舎を背に、須賀川が声を張り上げる。しかし、彼の前に並んでいるサッカー部員は皆へたり込んでいる。
「もー無理、絶対無理。動けねえっす」
「先生、もう日も沈みますよー。終わりにしましょうよ」
「む……」
西を見れば、すっかり日は傾いて空が赤く染まっている。須賀川はやれやれと筋肉の盛り上がった肩をすくめた。
「仕方ない、今日はここまでだ。帰っていいぞ」
生徒たちが歓声を上げて、ばらばらと運動場を去っていく。須賀川はふんと鼻を鳴らして校舎へ歩き始める。
「まったく、最近の学生は根性がない。俺が現役の頃は夜になっても走り込んだもんだ」
ぶつぶつとこぼしながら、須賀川は校舎へつながる戸を開いた。
その瞬間、背筋に寒気が走った。
「あいつらにもそのうちちゃんと分からせてやらないと……」
異様な雰囲気。まるで知らない場所にいきなり踏み込んでしまったような……。
『根性のない生徒が嫌い？』
「誰だ！？」
声が聞こえてきた方を見る。動物の毛に覆われた白い仮面が見えた。少女の形をした黒い影。仮面の赤い瞳が、じっと須賀川を見つめていた。
『彼らが情けない？　叩き直したい？』
何かがおかしい。異常だ。そう分かっては居ても、体が動かない。

足が動くことを忘れてしまったかのように。
「あ……ああ……」
ゆっくりと頷く。自分でも気づかないうちに、それを認めていた。
『なら、力を貸してあげる。先生の思い通りにする力』
少女の黒い手がずぶずぶと須賀川の胸に埋まっていく。
「な……！」
声にならない叫び。がくりと崩れ落ちる。次の瞬間、胸の中で『何か』が弾けた。
心の中にあるわずかな感情。生徒へのいらだちを養分に、『何か』が成長していく。
「ぐああ！」
叫び声。須賀川が両腕を振り回してもがく。だが、成長していく『何か』は須賀川の心を食い破り、体じゅうに広がっていく。
やがて、須賀川がゆっくりと立ち上がる。手には竹刀。
「だらしない生徒は俺が鍛えてやる……俺が……」
須賀川はゆっくりと歩き出した。その後ろ姿に、少女の形をした影は口元に手を当てた。
まるで、笑うかのように。

○シーン6

屋上の戸を開いて、やってきたのは須賀川だった。
「す、須賀川先生。どうしたんですか？　もしかして見回り？　あの、彼女、小練さんが転校生で、案内していたんですよ。すぐ帰りますから……」
須賀川はゆっくりと周りを見回している。勇気は思わず口を閉じた。見知っている須賀川の姿が、何か異様なものに思えた。目にはぎらついた光が宿り、口から蒸気が漂っている。
「伝宝くん！　下がって！」

マシュマロが叫ぶ。同時、須賀川が竹刀を振り上げた。
「っ！？」
ビュウ、と風を切って竹刀が振り下ろされる。勇生は思わず後ろに転びそうになりながら後ずさった。
「こんな時間まで学校に残って、どういうつもりだ！　あまつさえ不純異性交遊か！」
「だっ、誰が！」
マシュマロが顔を赤くして叫ぶ。
「す、須賀川先生？　どうしたんですか？　お怒りは分かりますけど、いくらなんでもやりすぎじゃあ。それに、そのジャージ……」
勇生の指が須賀川の着ているジャージを示す。朝に見た赤いそれとは違う。黒く染まっているのだ。
「その腐った根性を叩き直してやる！」
須賀川が竹刀を大きく振りかぶった。風が巻き上がり、頭上で渦を描く。少年と少女、二人の生徒を前に、須賀川の大きな体はますます巨大さと威圧感を増していく。
「伝宝くん！」
マシュマロが駆け寄って、ぐいと勇生の腕を引く。
「尋常じゃないよ！　この人、奈落に憑かれてる！」
「な、ならく？」
また聞き慣れない言葉だ。きょとんとする勇生に苛立ったマシュマロが、ぐいと腕を引いて屋上の端まで連れて行く。
「『やつら』のこと！　襲われたことあるんだから、分かるでしょ！」
「『やつら』って、シャードを狙っているって言う……？」
そこまで呟いて、不意に頭の中をよぎるものがあった。赤い瞳。白い毛の仮面。少女の形をした影。その異様な存在感が、確かに今の須賀川からは発せられている。
「そ、そんなこと言われたって！　どうすれば！？」
「戦うのよ」

「戦うって……あ、あのときみたいに？」
思い出す。マシュマロの叫びと共に噴き上がった火柱。耳の奥がちりちりするような景色。
「これ、持ってて！」
マシュマロが勇生の手に何かを押しつけてくる。
「これって……う、うわ、ナイフ！？」
鞘に収まった小さなナイフだ。思わず取り落としそうになる勇生の手をマシュマロが掴み、強引に握らせる。
「お守りだから！　持ってて！」
そして、須賀川に向き直る。
「罪もない一般市民にとりついて、わたしたちに対する当てつけのつもり？　だいたい、こんなところで襲ってきて！　伝宝くんを巻き込むことになっちゃったじゃない！」
怒りをぶちまけるようにマシュマロが言う。
「小練さん、僕のことを考えて……？」
「そうじゃなくて！　人に見られたくなかったのに！」
マシュマロはさっと胸元のブローチに手を添えた。
そして、投げやりに叫んだ。
「ま、マジカルチェーンジ！」

マシュマロのブローチが明るく輝き、宝石の色と同じ赤い光があふれ出た。光はマシュマロの体にまとわりつき、赤と白の二色で塗り分けたような不思議な衣装に変わっていく。セーラー服に近いようだが、細かい装飾が縫い付けられている。長手袋にブーツ、マントのように長く伸びたカラーが翻る。大きな帽子が頭に被さった。
「出でよ、チャンバースタッフ！」
アニメの中から飛び出してきた魔法少女のような服装でマシュマロが叫ぶ。ブローチの中から、杖のようなものが現れた。先端には水晶のようなものが取り付けられ、中程には弾帯が巻かれていた。勇生と初めて会ったときに持っていた、あの杖だ。

マシュマロがその杖を両手で構える。ガシュン！　と音を立てて、杖が弾丸をひとつ飲み込んだ。
「小練さん、その格好は……」
「あ、あんまり見ないで！　わたしだって恥ずかしいんだから！」
勇生に背を向けたまま、マシュマロが叫ぶ。その耳が赤くなっているように見えるのは、夕日のせいだろうか？
「と、とにかく行くわよ！　炎の矢よ、我が敵を燃やせ！」
マシュマロの構えた杖から火線が走る。須賀川の黒いジャージに火線が突き刺さり、表面を炎が包む。
「ち、ちょっと！　スカ先になんてことを！」
炎に巻かれる須賀川を見て、思わず勇生は飛び出した。杖を握るマシュマロの手を押さえて、須賀川への攻撃を止めようとする。
「邪魔しないで！　奈落に憑かれた人を助けるためには、戦って倒すしかないの！」
「そ、そんな無茶な！」
「いい？　あの人は奈落の種、アビスシードを植え付けられているの。奈落の種は全身を奈落で覆って、あの人をいいなりにしてる。魔術的には、彼の持つマナを媒介にして、自らの存在によって覆い尽くし、絶望へ向かうスパイラル状のベクトルで支配しているのだから、その絶望へ向かっていく破壊的な力を否定することで、絶望そのものを否定するの。そうすれば、奈落は支配する根拠を消失するから、彼を助けることが……」
「小練さん、危ない！」
迫ってくる須賀川から少女を守るように、勇生は前に進み出た。須賀川の竹刀が風切り音を立てて振り下ろされる！
「不良生徒め！　矯正してやる！」
重たい音を立てて竹刀が勇生の頭を打つ。普通の竹刀より遙かに重い。よくしなる鉄の棒で打たれたかのように、ずしりと重い衝撃が勇生の骨に響く。
「あっぐ！？」

頭蓋骨が揺れる。がくりと倒れそうになる頭を自分で抑えて、手にぬるりとした感触が触れた。
「あ……う、うわあっ！？」
今度こそ、視界が赤く染まっていく。額から熱いものが垂れて、ぽたりとまつげを伝う。
「伝宝くん！　……こんな学校の中で襲ってくるなんて！」
「ここは学校じゃない、戦場だ！」
須賀川が叫び、今度は両手で竹刀を振りかぶろうとする。
「そんな！　スカ先、何言って……！？」
「伝宝くん、分かったでしょ！？　奈落に意識を乗っ取られて、破壊衝動を引き出されているの。助けるには戦って倒すしかないのよ！」
満ちたマシュマロの声。須賀川の両手はがっちりと竹刀を掴んでいる。
「う……あ、あぁああ！」
勇生の体を突き動かしたのは、須賀川を助けようとする使命感ではなく、恐怖だった。
追い詰められたネズミが猫を噛むように、捨て鉢な体当たり。手の中のナイフを鞘ごとつかみ、必死につきだした。
ドッ。
両手で掴んだナイフが須賀川の腹、みぞおちの下に突き刺さる。思っていた以上に堅い感触が手のひらに伝わる。堅くなった土にスコップを差し込んだような手応えだ。
「が……っ！」
須賀川の喉がこすれるような音を立てる。思わず手を引くと、須賀川の腹からは血の代わりに黒いものがもやのように噴き出している。体勢を崩した須賀川は竹刀を床に着き、体を起こす。ぎらぎらと鈍い光に満ちた瞳が、勇生に向けられる。
「ひぅっ！？」
「ひるまないで！　効いてるわ！」

マシュマロが両足で床を踏みしめて、杖を構える。
「あの先生の体を乗っ取っている奈落が苦しんでいるの。彼の体から奈落の種を追い出すには、傷つけなきゃ行けないけど……でも、傷は治すことができる。完全に奈落に支配されたら、もう人間には戻れないのよ」
少女は杖を構えたまま、青い瞳を少年に向ける。
「わたしを信じて！　戦うしかないの！」
「教師に反抗するとは！　このバカチンが！」
体勢を立て直した須賀川が竹刀を振り下ろしてくる。勇生は反射的に飛び出し、ナイフを持った手を突き出した。
ナイフが竹刀をかすめる。軌道を逸らされた竹刀は、勢いそのまま、バチン、と大きな音を立ててたたきつけられ、中程からぽっきりと折れた。
「セキュアダガーが力を発揮した？　伝宝くんのマナに反応して……？」
マシュマロが驚きに声を上げる。勇生は手の中のナイフをしっかりと両手で握った。
「スカ先を助けられるんだね？」
「え？」
「スカ先を助けられるんなら、きみを信じる！」
歯を食いしばる。呼吸を止めて、無我夢中でナイフを突き出した。
「ぐおっ！？」
急な動きに、腕を振り上げたままの須賀川が意表を突かれる。がら空きになった脇腹に、どっとナイフが食い込んだ。
「うわあああ！」
勇生の叫びと共に、ナイフの刀身からかっと光があふれる。体内を照らす光から逃れるように、須賀川の胸から黒い塊が飛び出した。
「奈落の種！　……やあっ！」
マシュマロが飛び出した塊を杖で打つ。黒い塊は、ボロボロに砕けて散った。

須賀川の体がどうと倒れる。勇生の全身からふにゃふにゃと力が抜けて、その場にぺたんと座り込んだ。手の中のナイフが、からんと床に落ちる。
「もう大丈夫。先生は助かったわ」
しゅるしゅるとマシュマロの衣装がほつれてブローチの中に消えてゆき、元の制服姿に戻っていく。最後に、するりと杖がブローチの中に消えた。
「今のが、奈落の種？」
「うん。伝宝くんのマナと助けたいっていう思いが奈落の種を追い出したのね」
座ったままの勇生にマシュマロが答える。
「わけわかんないよ。何がどうなってるのさ？」
ぐったり座り込んだまま。なんだか力が入らなくて、気も抜けてしまっている。
「わたしの話、信じる気になった？」
「信じないわけにはいかないみたい。もっと、聞かせて欲しい」
勇生がマシュマロに視線を向ける。マシュマロはどこか安心した様子で、小さく頷いた。

第1話「白い仮面の少女」ーその4

○シーン7

マシュマロは「回復魔法」を使って、勇生と須賀川の負った傷を癒した。奈落の種を取り去られた須賀川はすぐに意識を取り戻し、いつもと同じ調子で「早く帰るように」と二人に告げ、見回りに向かった。勇生が安堵したことは言うまでもない。

二人は、屋上にほど近い空き教室へとやってきた。

「ここを、こうして……と。お待たせ、それじゃあ、始めるね。わたしじゃうまく説明できるか分からないから、師匠に話してもらうね」

マシュマロは教室の四隅に複雑な図形の書かれた布を貼り付け、勇生に向き直る。なんとなく教室の中の雰囲気が変わるのを、勇生は感じた。

「師匠って……ここにいるの？」

「話、できるようにするから」

マシュマロが例の杖を床に立てる。それは倒れることなく直立し、くるくると横に回転しはじめた。やがて、杖の先端に取り付けられた水晶のようなものが光を放ち始める。光は粒子となってばらばらに飛び回りながら、やがて一つの形を作り始めた。

老人だ。髪も、胸まで垂れた立派なひげも真っ白。顔にはいくつも深い膝が刻まれている。海のように青い瞳は、老人の知識の量を表すような深い光をたたえている。

「マーシュか」

老人は、古木を擦り合わせるような、深く低い声で言った。マシュマロが頷き、勇生と老人の幻影を順番に示す。

「師匠、この人が……あの、話をしていた、伝宝勇生くんです。伝宝くん、これが私の師匠。名前はマーリン」

勇生はマシュマロが自分を紹介するときの様子に何か妙なものを感じたが、口には出さなかった。
「伝宝です。えっと、よろしくお願いします」
マーリンと紹介された老人に向かって、軽く手を差し出す。
「この姿は幻影じゃから、握手はできんよ」
マーリンが目元のしわを深めて笑う。
「あ、そ、そうか。すみません、魔法ってなんだか、よくわからなくて」
マーリンの顔にはからかうような、どこか子供っぽい表情が浮かんでいる。不思議なおじいさんだな、と勇生は思った。
「そうじゃろうな。わしら魔術師は、魔法のことを魔術師でないものから秘匿しておるのじゃ。ずっと昔からな」
「はあ」
頷きながら、勇生は老人以上に自分のことが不思議に思えた。昨日までの自分なら、魔法だなんて存在しないと笑っていただろう。それが、今はそれほどの抵抗もなく受け入れているのだ。
マシュマロが目の前で使って見せたから？　それもあるだろうが、なんとなく感じられるのだ。魔法のことを理解したわけではないのだけど、それが「ある」ということを直感が告げているのである。
「勇生と言ったかの。わしはこれからおぬしの運命を語らなければならぬ。だが、その運命を受け入れるかどうかはおぬししだいじゃ」
「う、運命って……あの、一体、何がどうなっているんですか？」
マーリンが発する異様な雰囲気に圧され、勇生は上ずった声で聞く。
「うむ。まずこの世界のことを語らねばならぬ。遠回りに感じるかもしれぬが、必要なことじゃ。聞いてほしい」
この状況では話を聞くしかなさそうだ。勇生はゆっくりと頷いた。
「は、はあ」
「よろしい。我らはこの青き星、地球を『ブルースフィア』と呼んでいる。そして、この宇宙には無数の世界がある」

「無数の世界……ですか」
「うむ。おいそれと他の世界に行ったりすることはできぬがな。ブルースフィアにはその世界の中でも、特にマナが豊富な世界なのじゃ」
　マーリンは深々と頷く。
「マナとは、この世界を形作るエネルギー。人間が生きるためには不可欠なものじゃ。わしがマーシュに教えた魔法は、このマナを操ることでさまざまなことを行う力じゃ」
「驚いたでしょ？　でも、あんなふうに人を傷つけたりする魔法ばかりじゃないから」
　隣に並んだマシュマロが両手を勇生の肩に伸ばし、小さく何かを唱える。と、温かい光がその手から溢れ、勇生の体についた傷がふさがっていく。彼の制服も、ほつれが繋がるようにもとの形を取り戻していく。
「こうやって人の傷を癒したり、守ったりするのが白魔法。さっきみたいに敵と戦うための破壊の力のことは黒魔法って呼んでいるの」
　マシュマロはそっと笑顔を向けて、手を離す。ずきずきと感じていた痛みが嘘のようだ。
「て、敵って、僕たちを襲った怪物のことですか？　あの変な奴らは何なんです？」
「……わたし達は奈落、って呼んでいるわ」
「ならく？」
「宇宙を人間の体に喩えるならば、奈落はウィルスのような存在じゃ。宇宙を構成する世界に取り付き、奈落で覆い尽くす。ウィルスが細胞を破壊するようにな」
　マーリンが重々しい声をさらに低くして言う。勇生は背筋が凍るような冷たさを感じた。
「それって、奴らが世界を壊そうとしているってこと、ですか？」
「壊すだけなら、まだいいんだけど」
　マシュマロがぽつりとつぶやく。どういう意味かと尋ねる前に、

マーリンが口を開いた。
「奈落は世界のマナを吸い尽くし、より強大になっていく。マナを失った世界は、空気を失った風船のようにしぼみ……やがて、消滅する。すでにいくつもの世界が、奈落によって宇宙から消え去ったのじゃ」
「そして奈落は、この世界に目をつけたのよ。わたし達の、ブルースフィアに」
二人の言葉を聞き、勇生の喉がゴクリと鳴る。この世界が、自分が今まで暮らしてきたこの世界が、わけのわからない存在によって滅ぼされようとしているだなんて……。
「で、でも。さっき小練さんがやったみたいに、やつらと戦えるんですよね？」
「いや、魔法だけでは戦えん。先ほどのような弱い奈落であればなんとかなるがの、もっと強い奈落に対して、魔法があれば倒せるというわけにはいかん」
マーリンはしわだらけの顔を厳しくする。が、ふとその表情から力を抜いてほほえんだ。
「ところで、このブルースフィアを守る大いなる神がおる。その名を『ガイア』という」
ガイア。その名を聞いたとき、勇生の胸に温かいものが宿った。とても大事な肉親の名前のような、とても不思議な響きだ。
「か、神？　ですか？」
「うむ。かつてはこの世界にも多くの神が居た。その多くは消え去ってしまったがの」
まさかからかわれているのかと思った。が、マーリンの様子は真剣そのものだ。とても冗談を言っているようには見えない。
「神は消え去ったが、その力はマナとしてこの宇宙に残っておる。そして、神のかけらはこの宇宙を救うことのできる人間の元へと宿るのじゃ。『シャード』として」
マーリンはどこか遠くを見るように言ってから、じっと勇生を見

た。
「おぬしや、そのマーシュのようにな」
その瞳には、わが子を見守る親のような優しい色が宿っていた。
「この中には、神の加護が宿っているの。だから、これがあれば奈落と戦える」
マシュマロは胸につけられたブローチに手を触れる。その表面に取り付けられた赤い宝石が、彼女の持つシャードらしい。
「それじゃあ、これが僕のシャード？」
勇生は手の中の宝石を見つめる。
「ま、まさか。僕がそんな……さっきまで、何も知らなかったのに」
マーリンがどこか人の悪い笑みを作った。
「クエスター……わしらはシャードを与えられた者をこう呼んでおるがの。クエスターにとって大事なことは、今まで何を為したかではない。これから何を為すかじゃ。シャードを手に入れた時、樹のビジョンを見たであろう」
「樹……」
巨大な樹のイメージがフラッシュバックする。助けを求める声が、再び聞こえた気がした。
「見ました。あれは？」
「あれこそが世界樹ユグドラシル。奈落にさいなまれ、おぬしに救いを求めた張本人……いや、張本樹とでも言うのかの」
マーリンはほほ、と軽い調子で笑ってみせる。
「そ、そんな。世界が僕に助けを求めているなんて」
「自分を信じるのじゃ。おぬしにはそれだけの力がある」
マーリンの瞳に見据えられ、勇生は口を閉ざす。ますます信じられないことばかりだったが……。
「わ、わかる気がします。助けてっていう声、確かに聞こえました」
自分に救いを求める声。その悲痛な響き。勇生は無視することはできなかった。
「師匠、伝宝くんがわたしと一緒に居るときにクエスターに覚醒し

たということは、彼はわたし達と一緒に戦う運命にあると？」
　マシュマロが眉をきっと寄せて問いかける。
「そうかもしれぬ。そうではないかもしれぬ」
「え、えぇ？」
　はぐらかすようなマーリンの答えに、思わず肩の力が抜けてしまう。
「マーシュのシャードに共鳴して彼のシャードが目覚めたのかもしれん。あるいは、彼の力に気づいた奈落が襲いかかってきたのかもしれん」
「な、なるほど」
　マシュマロがうなるように答える。
「まあよい。どれ勇生とやら、おぬしのシャードをこの老いぼれにも見せてくれんかの。この姿は幻影であるゆえ、目の前にかざしてくれなければよく見えん」
　そう言って、マーリンは勇生の手元を覗き込んだ。勇生が両手でシャードを掲げる。
「ふむ、これは……」
　そのシャードを見たマーリンの表情に、一瞬驚きの色が浮かぶ。
「どこかで感じたマナを感じるが……いや、気のせいじゃろう」
　マーリンはひげをさすりながら、シャードを見つめる。
「ほっほ。このシャードにはガイアの加護が宿っておる。死せる神々だけでなく、母なるガイアからも助けを求められておるということじゃな」
「ガイアの加護……ですか？」
　勇生が問う。うむ、とマーリンはうなずいた。
「ガイアの加護は運命を打ち破り、切り開く力じゃ。なに、おぬしならばきっとものにするじゃろう」
　白ヒゲを撫でながら、マーリンは上機嫌に言う。
「マーシュよ、しばらく彼と一緒に居てやりなさい。彼はクエスターとして覚醒したばかりじゃ、おぬしとおったほうが安全じゃろう」

「ですが、この地に現れた奈落と戦うことがわたしの使命です。確かに、まだやつの行方もつかめていませんが……」
マシュマロは勇生のほうをちらと見てから答える。奈落と戦うためには、勇生は足手まといにしかならないのだろう。
「それなら、なおさらじゃ。おぬし一人ではわからぬこともあるかもしれん。彼はこの街の人間じゃろう？　奈落の足取りを調べる間なら、邪魔にもならんじゃろう」
「確かに、そうですけど……」
「え、ええっと」
自分の意思を無視して話が進んでいる気がして、勇生が口を挟む。
「確かに、何がなんだかわからないから、話が出来る人に居てほしいけど。別に、小練さんが嫌だって言うなら、僕は……」
マシュマロが振り返る。
「別に、嫌だなんて言ってないじゃない。いいわよ、男の子一人くらい、守れるもの」
つんと唇を突き出して、そう答えた。マーリンが笑みを作り、
「決まりじゃな」
と言った。それで話は終わりらしい。マーリンの幻影は、教室から姿を消していく。
「ま、待ってください！　僕にも、奈落と戦うことができるんですか？」
勇生が慌てて叫ぶ。マーリンは頼もしげに目を細めた。
「見たところ、おぬしにはあまり魔法の才能はなさそうじゃな」
「えぇ！？　そ、それじゃあどうすれば？」
「それはおぬしが自分で見つけねばならん。ガイアがおぬしを導くならば、やがておぬしは自分の力と向き合うことになるじゃろう。あるいは、そうはならないかもしれんが」
あいまいな言葉とともに、マーリンは消え去った。教室の中に、静寂が戻った。

第1話「白い仮面の少女」ーその5

○シーン8

「ごめんね。師匠って、肝心なところであいまいっていうか、大事なことを喋ってくれないって言うか……ああいう人だから」
マシュマロが先に口を開いた。次々に話を聞かされた勇生を気遣ったのだろう。
「う、うん。びっくりしたけど、小練さんがあの人の弟子でよかったよ。雰囲気からして、相当偉い人なんでしょ？」
「うーん。どうなんだろ。おじいさんだし、態度は大きいからたぶん偉いんだと思うけど……あんなふうにテキトーなんだもん。よくわかんないときがあるの」
ふう、と息を吐きながらマシュマロは言う。クセなのか、胸のブローチに……それにとりつけられたシャードに触れている。
「えぇ？　師匠なんでしょ？」
「そうなんだけど、小さいときに魔法の初歩を教えてもらっただけよ。そのあとは、魔術師連盟……魔法使いの組織のことなんだけど、その組織の学校で学んでるの」
どうも複雑な事情がありそうだ、と勇生は思って、別の話題を探ることにした。
「そういえば、そのブローチで変身したり杖を出したりしていたのも魔法の力なの？」
問いかける。マシュマロは答えあぐねるように指を胸の前でつつきあわせはじめた。
「ええっと、話せば長くなるんだけど、このブローチや杖は一応、魔法兵器の一種なの。魔法の威力を上げたりするためのもので、ある企業が開発しているのを連盟が取引して使わせてもらっているの」
「じゃあ、あの服も魔法の服か何か？」

瞬きしながら問いかける。マシュマロはますます顔を赤くした。
「そ、そのはずなんだけど。……アニメと同じ衣装なんだって。『魔法のクエスター・マナの冒険』って。し、知らない？」
「な、名前くらいは。……そ、そうなんだ」
その様子に、なんとなくこれ以上聞くのがいたたまれなくなってきた。そのあたりにも複雑な事情がありそうだ。考えてみれば、目の前の少女のことは何も知らない。もっといろいろと聞いてみたいのは山々だが、あまり聞いている時間はなさそうだ。
「そ、それより、奈落と戦うために来たって言ったよね。それって、ほかにもああいう怪物がいるってこと…なのかな？」
急にマシュマロの表情が引き締まる。瞳には燃えるような使命感が宿っていた。
「そう、それよ！　どこかに、奈落者（スペクター）っていうもっと強い奈落が居るはずなの」
拳をぎゅっとブローチに押し付ける。
「その存在を魔術師連盟が感知して、クエスターであるわたしが派遣されたのよ」
「そっか。それであんなによそよそしかったんだ」
「奈落を倒したら、また連盟に戻るつもりだったから……」
マシュマロが視線を伏せる。
「とにかく、奈落を見つけるまで伝宝くんの力を貸して。青き星を守るために」
勇生の手を取り、じっと見つめてくる。
「奈落はね、さっきも言ったとおりウィルスみたいなものなの。だから、力を発揮するためにはほとんどの場合、何かに取り付くのよ」
「取り付く？」
「そう。さっきのは動物の死骸か何かに憑いたものだと思う。生きている動物に憑くこともあるし、機械や古い道具にも。それから……」
マシュマロはそこまで言って、ふと口をつぐんだ。

「それから、人間にも……」
衝撃的な言葉に、勇生の息が詰まる。
「ほ、本当に？　それって、ある日いきなり誰かが奈落に取り付かれるってこと？」
「誰でもいいってわけじゃないの。奈落は人間の絶望につけ込むのよ。ほら、嫌なことがあって、こんな世界なければいいのにーって思うこと、あるでしょ？」
「そりゃ、誰でも一回や二回くらいは思うだろうけど」
「そんなときに奈落がやってきて、囁くの。この世界を滅ぼす力をあげようって」
マシュマロは視線を伏せる。
「そうしてスペクターになった人は、どんどん周りの人を傷つけていっちゃう。そうすれば、絶望する人は増えるわ。……そうやって、奈落は自分の力を増大させていくの」
「人間の弱い心につけ込んで世界を滅ぼしていくなんて……そんな、卑怯だよ」
「そうよ。そんなやつに負けるわけにはいかないわ。だから、わたしは戦っているの！」
きっと眉を寄せてマシュマロは叫ぶ。思わず声を荒げてしまったことを恥じるように、ごめんね、と呟いた。
場違いだとわかっていながらも、マシュマロの使命感の強さに勇生は感心していた。奈落との戦いに身を捧げる少女は、自分とは全く違う世界からやってきたように感じられる。単なる転校生だと思っていた相手の本当の顔。勇生は、いつの間にかマシュマロの力になりたいと思うようになっていた。
「スペクターもこの学校の中にいると思うの。何か心当たり、ない？」
問いかけられて、勇生の頭の中を、閃くように何かがよぎった。
「小練さん。さっき、奈落が世界を消滅させるって言っていたよね」
「う、うん。まるで最初からなかったみたいに消え去っちゃうの」

「それって、人間でも？　たとえば取り付かれた人が最初から居なかったみたいに、みんながその人のことを忘れてしまうとか……」
勇生の心に、再び朝から感じていた違和感がよみがえってきた。何かを忘れているのに、何を忘れているのかはわからない、あの感覚。もやもやと霧のように心にかかっていた違和感が、徐々に何かの形を作り始めている。
「そういうことも、ある……と思う」
「それなら……心当たりがあるよ」
誰かが奈落によって消え去ろうとしている。そう思うと冷たいものが背中を走る。それでも、まだ助けられるかもしれないのだ。自分に助けを求めているのは世界だけではない。自分の身近にいる誰かが、奈落に襲われて助けを求めているのだ。そう思うと、ふつふつと怒りと力がわいてくる。
「心当たりって……本当！？」
マシュマロの顔にぱっと希望が広がる。
「うん。職員室に行ってみよう。確かめたいことがあるんだ」
「職員室ね！　行きましょう！」
叫び、マシュマロが駆け出す。
「あ、小練さん！」
「え？　……きゃっ！」
ガンッ！
「……ドア、閉まったままだよって言おうとしたんだけど」
残念ながら間に合わなかった。ドアに激突したマシュマロは、崩れ落ちて額をさすっていた。
「さ、先に言ってよぉ……」
「まさかあんなに勢いよく走り出すなんて思ってなかったから……」
使命に燃えるのはいいが、熱中しすぎて周りが見えなくなっていたようだ。勇生は改めて、マシュマロの力になりたいと思った。いや、単に危なっかしくてほっとけないだけなのかもしれない。
「ううう。と、とにかく行こう！」

恥ずかしさを隠すように大声で言って、マシュマロは教室のドアを開けた。
「うん、行こ……」
不意に何かを感じて勇生が振り返る。日が沈んで、暗くなり始めた教室の景色。
「どうしたの？　早く！」
いきなり立ち止まった勇生の袖をつかんで、マシュマロが歩き始める。
「いや、誰かに見られてる気がしたんだけど。気のせいだったみたいだ」
首をかしげながらも、使命に熱中する少女に引きずられて、勇生は教室を出ていった。
教室の暗がりに潜むものに、二人が気づくことはなかった。

○シーン9

二人がマーリンと話している間にすっかり日は沈んでいた。生徒はみな下校し、教職員も当直を残して帰っていったらしい。がらんとした職員室に、二人はやってきた。
「確かこの辺に……あった！」
勇生は見つけたものを手近なデスクの上に広げる。勇生たち2年B組の出席簿だ。
「たぶん、奈落に憑かれた人は僕のクラスメイトだと思う。出席簿にはまだ名前が残っているはずだから……」
朝、マシュマロが座っていた席。あんな場所に空席があるわけがない。きっと、その席に座っていた生徒こそスペクターに違いない、と勇生は考えたのだ。心の中に落ちた影が形をはっきりさせていく。クラスメイトの誰かが、絶望につけ込まれて奈落に憑かれているの

だ。その誰かが自分に必死に助けを求めているように思えた。
「そっか！　その人が誰かわかれば、何か手がかりがわかるかも！」
マシュマロが喜びの表情を浮かべる。
早速、二人は出席簿を調べ始めた。勇生は一人ずつ同級生の名前を確かめ、その顔を思い浮かべていく。出席簿は五十音順だ。指が出席簿の上を滑っていく。
「出席番号六番が小練さん。清水……総田……」
「待って！　伝宝くん、今、一人飛ばしたよね？」
「……え？」
思わず、自分の指が触れている出席簿を見下ろす。『清水』は出席番号七番、『総田』は出席番号九番。確かに、その二人の間にはひとり分の行がある。だが、まったく気づかないうちに読み飛ばしてしまったらしい。
「出席番号八番？　清水と総田の間だから、サ行の苗字だよね」
じっとその行を見る。しかしその文字は目に映っているはずなのに文字として脳が認識しないように、意味が読み取れない。そこに大事な何かがあるとわかっているのに、それが何なのかわからない。勇生の心の中の違和感と同じだ。
「小練さん、読める？」
隣のマシュマロを見つめる。マシュマロは首を振った。
「……わかんない。他の名前ははっきりわかるのに。……やっぱり、奈落がその人の存在を消そうとしているんだと思う」
「くそっ！　たったの四文字だっていうのに！」
苛立ち紛れにデスクを叩く。マシュマロがぽかんとした顔で見上げていた。
「伝宝くん、その人の名前が四文字だってわかるの？」
「え？　あ、いや、なんとなく、そうなんじゃないかって……」
思わず口をついた言葉に、自分でも困惑したように頭を掻く。しばらく考え込んでいる様子のマシュマロが、顔を上げる。
「きっと伝宝くんはその人と仲が良かったのよ。単なる知り合いっ

てだけじゃなくて。だから、ぜんぜん知らないわたしより、その人のことを深く覚えてるんだ。……ならきっと、思い出せるよ。何かきっかけがあれば！」
　マシュマロがぐっと両手を握る。頼りにされている、と思うと、なんとなくくすぐったいような気分になって勇生は頭をかいた。
「そ、そうか。じゃあ、何かきっかけがあれば僕は思い出せる可能性が……小練さん？」
　ふと、勇生は気づいた。マシュマロは一点を見つめて、考えこむ様子だ。勇生の呼びかけにも気づいた様子はない。
「小練さん！」
「えっ？　あ、う、うん、そうだね！　そうだと思う！」
　勇生の声に驚いたように、マシュマロが振り返る。
「僕の話、聞いてた？」
　マシュマロの額を汗がつうっと落ちる。マシュマロはわたわたと周りを見回してから、
「う、うん、とにかく、これで調査が進展したわけだし、今日のところは切り上げましょ。もうすっかり、外は暗くなってるし」
　言われて、勇生はふと窓の外を見た。須賀川と戦っている時にはすでに傾いていた日はすっかり沈み、とっぷりと暗くなっている。
「でも……」
「む、無理はよくないよ！　疲れて調査がうまくいかなくなったら元も子もないし。今日の所はゆっくり休んで、また明日調べよう？」
「時間がないんじゃ……」
「わたしがいいって言ってるんだから、いいの。伝宝くんは目覚めたばかりなんだから、先輩の言うことを聞きなさい」
　マシュマロの青い瞳がじっと勇生を見つめる。
「そ……そこまで言うなら。分かった」
　迫力に圧されて、勇生が頷く。
「わたしは、後片付けして帰るから！　伝宝くんは疲れたでしょ、早く帰って、ゆっくり休んで！」

マシュマロは勇生の背中をぐいぐいと押しながら、勢い込んで言う。
「わ、わかった。小練さんも気をつけてね」
「うん、それじゃあ！」
マシュマロが勇生の体を職員室から押し出す。
勇生は首をひねりながらも、廊下を歩き出して校門へ向かっていった。

第1話「白い仮面の少女」ーその6

○シーン11

勇生は朝に全力で駆け上った坂道をゆっくりと下っていく。こんなに遅い時間に坂を下っていくのは初めてだ。

いや、それだけじゃない。今日体験したことは何もかも始めてだ。まさか自分がガイアに選ばれた戦士として覚醒したり、奈落なんていう化け物と戦ったりするだなんて。

「昨日までは考えもしなかったな……」

不謹慎だとは思いながらも、体に溢れてくる満ち足りた思いは否定できない。奈落に取り付かれた須賀川を救ったのだ。達成感と正義感が一緒になって溢れてくる。

「僕が……僕がやったんだ」

自然と笑みがこぼれてくる。

「スカ先は今日のうちにアビスシードを植え付けられたんだろうな。朝会った時は何ともなかったし」

残り火のような興奮で息が上がる。

「朝……朝か。スカ先、何か言っていたよな」

ぽつりと呟く。頭の中に影を落としていた違和感が再び湧き上がってくる。

「確か……」

記憶を探る。朝、校門で出会った須賀川の言葉。

「伝宝、いつもの女生徒はどうした？　バスで一緒になるとかいう……」

勇生の足が止まる。その場でこめかみに手を当て、頭の奥を探る。
「そうだ。僕は知ってる……知ってるはずなんだ。毎日会っていたんだから」
薄っぺらな勝利感をぬぐい去った胸の奥に、再び不安が顔をのぞかせた。

「まだ覚えているうちに彼女を助けないといけないのに。……なんでこんなところで帰らなきゃいけないんだ！」
勇生は振り向いた。止まった足を学校に向ける。ふつふつと疑問がわき上がってくる。
「小練さんが諦めたってことか？　いや……そんな性格じゃないよな。あんなに使命にこだわっていたのに。それに、僕が彼女のことを思い出せば手がかりになるかもって……」

気がつけば朝と同じように校門に向けて走り出していた。
「もしかして……」
靴底が道路を叩く音に心臓の鼓動が重なる。

「もしかして、僕がいなくてもスペクターを見つけられるようになったから、ひとりでスペクターと戦うつもりなのか！？」
虚空に問いかける。勇生にはどこからか答えが聞こえてきた気がした。運命の予感が、勇生の考えが正しいと告げている。
校門にたどりついた。校庭を横切って、マシュマロがいるはずの本校舎へと駆け出す。

「無茶だ、一人じゃ！　僕なんかがいても、変わらないかもしれないけど……っ！」
本校舎の入り口に手をかけた瞬間、勇生の目に異様な風景が飛び込んできた。
校舎の壁も、床も、天井も黒いもやのようなものが這い回り、真

っ黒に覆い尽くしている。
「これも……奈落の力？　どうなって……」
思わずたじろいだ瞬間、校舎の奥から叫び声が聞こえた。マシュマロの悲鳴だ。
「くそ、小練さん！」
迷っている暇はない。勇生は校舎の中に飛び込んだ。

○シーン１２

黒い奈落に覆い尽くされた校舎の中を、勇生は駆ける。道に迷うことはなかった。運命の予感が導いてでもくれるように、マシュマロのいる場所を感じられるのだ。
「小練さんっ！」
扉を開け放つ。彼らの教室。二年Ｂ組である。

マシュマロはいくつもの触手に手足を囚われている。ブローチの力を解放して『変身』した状態ではなく、制服姿のままだ。激しくもみ合ったのだろう、袖が破れて肩が覗き、スカートも右腿のあたりにざっくりと切れ目が入っている。
その隣に、黒い人影が浮かんでいた。瑞珠学園の女子制服のシルエット。まるで影をこねて作ったかのような暗い姿に、白い仮面だけがくっきりと形をなしている。
「伝宝くん……っ！？　なんでここに！」
マシュマロが驚きの表情を浮かべる。
「小練さんの様子がおかしかったから戻ってきたんだよ！　今助ける！」
勇生はマシュマロの元に駆け出す。しかし、影の少女が振り上げ

た腕が鞭となり、勇生に迫る。
「くっ！」
体をひねるが、間に合わない。肩から背中にかけてを打たれ、弾かれる。倒れそうになるのを、なんとかたたらを踏んでこらえた。
その間に、影の少女は両腕を振り上げる。その腕が無数の鞭に分かれ、触手と化して複雑にうごめき始める。

「きゃっ！？」
悲鳴。触手がマシュマロの体にまとわりつき、両手足を捕まえていく。魔法を使えるとは言え、少女の細い腕でそれに抗うことは、どう見ても無理だ。すぐに、マシュマロの体は操り人形のように黒い触手に捉えられた。
「小練さん！　くそ！」
勇生がマシュマロをとらえる何本もの触手に取りつく。引きはがそうとしても、一本を離す間にまた別の触手が絡みついていく。やがて、触手がマシュマロの全身を覆い始める。

「も、もうやめて！　それより、伝宝君は逃げて……師匠や、連盟の関係者が気づいて、助けが来てくれるはずだから……！」
首まで触手に絡め取られ、全身を締め上げられる痛みをこらえながらマシュマロが言う。しかし勇生は、触手を素手ではがしながら、彼女にまっすぐに視線を向けた。
「素手じゃ無理だ。ナイフは！？」
「ゆ、床に落ちているはず……だけど、どっちにしても無理よ！」
床にかすかに光る物。駆け出して手を伸ばし、ナイフを手に取る。その間にもいくつもの触手が伸び、マシュマロだけでなく勇生の動きを封じようとからみついてくる。

「くそ！　離せ！」
近寄ってくる触手をセキュアダガーで突き刺し、退かせる。が、

影の少女の腕は今や天井じゅうに触手を張り巡らせていた。まるでこの教室がすべて自分のモノだと言わんばかりに、部屋中を覆っていく。
「数が多すぎる！」
右から左から、上から下から迫ってくる触手。やがてその一本が足に絡みついてくる。
「くっ……！」
蹴飛ばして離れようとするが、その間にまた別の触手が腕を捕らえる。

苦痛か、無念か、それとも憤怒か。マシュマロの青い瞳には涙がにじんでいた。
「も、もういいから！　今ならまだ間に合うわ！　だから早く」
「だめだ！」
勇生が叫ぶ。
「奈落にやられたら、小練さんのことまで忘れるんだろ！　今日会ったばかりだけど……一緒にいられて、楽しかった！　諦めて忘れるなんて、そんなのは嫌だ！」
セキュアダガーを振り回す。しかし、奈落の触手は確実に二人を捕らえようとする。
絡みついた触手につり上げられ、マシュマロが目から大粒の涙をあふれさせて叫ぶ。
「わたしがいなくなっても、使命を果たさなきゃいけないの！　だから逃げてよ！」

「くそ……！」
ダガーを握る右手が捉えられる。すぐにいくつもの触手が巻きつき、動かせなくなった。
「わたしなんかにこだわらないで、使命を果たしてよ！　そうだ、シャードの力を使えば……シャードに、ここから逃がせって強く念

じて！」
「小練さんを見捨てるのが使命だって言うなら、そんなものは願い下げだ！」
目の前でマシュマロが触手に埋もれていく。腹が、胸が、肩が闇の色に沈んでいく。
「くそ！　おい僕のシャード！　ガイア！　おまえ、僕に力を与えてくれるんだろ！　奈落と闘わせてくれるんだろ！」
怒りに身を任せて叫ぶ。あふれる涙が抑えられない。
「だったら、僕や小練さんのことがわかるんだろ！　逃げるんじゃない、なんとかする手段を教えろよ！　こんな所で諦めていいのかよ！」
勇生のシャードが青く輝く。
「僕はまだ、諦めてないぞ！」
カッ――
青い光が、教室中を埋め尽くした。

勇生は気がつけば、巨大な宮殿にいた。壁という壁、床という床、天井にさえ、無数の武器が刺さっている。剣、槍、斧……中には銃すらあるようだ。
「ガイアからの来訪者か」
声が聞こえた。力強い男の声だ。
「だ、誰！？　ここは一体……」
勇生がどことも知れない空間に叫ぶ。声の主は姿を見せない。
「説明してやってもいいが、お前にはあまり時間がないのではないか？」

「そ、そうだ！　こんなことをしている場合じゃない、早く小練さんを助けないと！」
「よかろう」

声の主がうなずいた。姿が見えるわけではないが、勇生にはその気配がわかった。
「我は剣の王。ガイアの呼びかけに応じてお前の意識を我が城に呼び寄せた。この城にあるのはいずれも古今無双の武器だ」
「助けてくれるの！？」
首を横に振る気配。
「ガイアを助けるのはお前だ、クエスター。だが、我が武器を貸そう。この中にあるものをどれでも一つ、選ぶがいい」
声が言う。勇生は周囲を見回した。

「この中からひとつ……」
つぶやく。だが、迷っている時間はない。勇生は目に飛び込んできた剣の柄をつかんだ。
「よかろう。剣の騎士よ、武運を祈る」
その声を最後に、急速に勇生の意識は引き戻されていった。

左手にわずかな重みを感じる。ヒュッ。軽い音をたてて左手を振り下ろした。音もなく、勇生の体をとらえていた触手が切り裂かれる。まるでそばかうどんを包丁で断つような感触だ。
「っ！　で、伝宝くん、それ……！？」
顔だけをのぞかせたマシュマロが叫ぶ。勇生は思わず自分の手を見た。
いつの間にか、剣が握られていた。勇生の腕ほどもの刃渡りだが、重さは左手の短剣、セキュアダガーと変わりがなかった。それなのに……

ヒュッ。ヒュッ。

軽くふるうだけで触手が抵抗もなく断ち切られる。

「すごい！　剣の王って人が、本当に貸してくれたのかな。これなら！」

すぐに勇生の体は自由になった。マシュマロに駆け寄る。いくつもの触手が、長剣が触れる端から切り裂かれていく。まさに鋭利無双、信じられないような切れ味である。

「伝宝くんのシャードが輝いて、いきなり剣が出てきたけど、いったいどうして？」

「僕もわからないけど、どこかここじゃない別の世界に行っていたみたいな感覚だった。ガイアっていうのが少しだけ力を貸してくれたのかな」

最後のひとつを切り裂いた。同時、剣は世界の扉を介してこの世界から消え去る。勇生は魔法の存在を信じたのと同じように、直感していた。再びあの剣の名を呼べば、自分が異世界の扉を開いて剣を呼び出すことができる、と。

解放されたマシュマロがブローチの中から杖を取り出し、なんとか身を支える。

「違うよ、たぶん。伝宝くんのシャードが奇跡を起こしたんだよ。伝宝くんが……わ、わたしを助けたいと思ったから」

マシュマロはほんの少しだけ頬を染めた。

「って、そんなことはどうでもいいんだった！」

「そ、そんなことって！」

勇生はぱっと身を翻す。マシュマロは思わずつんのめりそうになったのを、なんとか杖で支える。

「それより……」
白い仮面が、音もなく勇生を見据えていた。
「……きみを助けるのも、諦めてないよ」

第1話「白い仮面の少女」ーその7

○シーン13

「マジカルチェンジ！」
マシュマロが叫ぶ。ぼろぼろの制服が、魔法少女の衣装に変わっていく。
「……」
奈落は二人を見つめたままだ。周囲の触手が奈落を守るように集まっていく。
「もしかしてもう、奈落に意識を奪われて……」

「まだ。まだ諦めちゃだめだ。小練さん、周りの触手をなんとかできる？」
「考えがあるの？」
「一応ね」
「……やってみる」
二人は視線を交わしてうなずきあう。

最初に動いたのは奈落だった。触手が一斉に二人に迫る。勢いそのまま、勇生とマシュマロを薙ぎ払おうとする。
「……っ！」
勇生はダガーで勢いをそらして身をかわす。マシュマロは魔法の壁を作りだしてその勢いを減じた。そして杖を掲げ、その触手の先端にふれさせる。
「炎よ！」
マシュマロが叫ぶと同時、杖が薬莢を吐き出す。杖からほとばしった炎が奈落の触手を導火線のように次々に燃え上がらせていく。
「伝宝くん、今！」

「……！」

物言わぬ奈落が驚愕の色を浮かべるのを感じた。

「きみの名前を思い出せなくてごめんよ。でも……！」

勇生が両手を広げる。奈落が身をかわすよりも早く、その顔に手を伸ばす。

「伝宝くん！　そうか、仮面で隠すと言うことは、まだ奈落に侵蝕されてない部分があるってことだわ。あの仮面の下の素顔が見えれば……！」

勇生のシャードが青い光を煌めかせた。

白い仮面を引きはがす。少女はどんと勇生を突き飛ばして後ろへ退いた。

「仮面の下！」

マシュマロは見た。勇生が引きはがした少女の仮面の下。

そこには、彼女の体と同じく、真っ暗な奈落だけがあった。目のくぼみに色はなく、まさに地面に落ちた影が立ち上がった格好そのままだ。

「そんな……。やっぱり、分からないの……？」

マシュマロの膝が崩れる。今度は、杖で体を支えることも忘れていた。絶望が心の奥にわき上がってくる。奈落による被害者がまた一人。完全に奈落に囚われては、もう救う手段はない。救うことができなかった……。

「いや、まだだ。まだ諦めちゃダメだ！」

勇生が仮面を放り捨てる。ぱりん、と音を立てて、仮面は砕け散った。

「こんなもの、意味なんかない。こんなものをつけたって『いつものきみ』じゃ無くなることなんてできないんだ。自分を忘れようと

したって……」
勇生はもう一方の手を掲げる。その手の中には、黒い帯状の何かが握られている。
「伝宝くん？　それは……あっ！？」
マシュマロがはたと気づく。影の少女の髪を結んでいたリボン。それがなくなったせいで、少女の髪がばさりと顔にかかっている。
「最初から、それを狙って……？」
「咄嗟に、だけど。……あんな仮面なんかじゃない。彼女が誰なのか、思い出すためには……彼女がいつも身につけているものじゃないと、って思ってさ」
勇生の言うことは、まさにモノと人とのつながりの本質だ。その人間の大事なモノには想いが宿るのである。

「でも……」
しかし、そのリボンすら奈落は真っ黒に染め上げている。『彼女』の存在に関係あるものは、すべて包み込んで消し去ろうとしているのに違いない。
「ガイアの加護が奇跡を起こしてくれるなら、今がそのときだよ。どうやればいいのかは、分からないけど……」
「自分のシャードに意識を集中して。シャードの声と力を感じるの。あとはシャードが教えてくれるから」
マシュマロが杖を握って奈落を睨みながら言う。勇生は自分の胸に手を当てる。胸ポケットの中にあるシャードが、自分の鼓動に合わせて震えているような気がする。
「シャードの声……」
言葉の意味を考えるよりも早く、それは感じられた。雑然とした意識の集まり。いくつもの声が響き合っているような声……ユグドラシルの夢で聞いたのと同じような声だ。それが、シャードから流れ込んでくる。それは、勇生の耳にはこう聞こえた。

『奈落を倒し、少女を救え』
と。

「それなら、力を貸してくれ！　彼女が誰なのか知りたい……いや、思い出したいんだ！」

叫ぶ。

その瞬間、シャードからかっと青い光がほとばしった。

光は手の中の黒いリボンを照らす。それは洗い流すようにまとわりつく闇を払い、リボンが元の形を取り戻していく。クリーム色のたっぷりとしたリボン。

勇生の頭にいくつものイメージが流れ込んで……いや、記憶の深い場所から湧き上がってきた。

教室の席は隣だった。バスには、いつも先に乗っていた。運がいい時には、二人掛けの椅子をおさえてくれている。昼食を一緒にとることもあった。一緒に帰ることもあった。

彼女の名前は……

「地歩！　寿美地歩（すみ・ちほ）！」

心の中に湧き上がってきた名を叫ぶ。なぜ思い出せなかったのかが不思議なほど、自然な言葉だった。

名前とともに、勇生の心に暗い感情が流れ込んできた。名づけるならば、それは絶望と呼ぶべきものなのだろう。なぜ生きているのかが分からなくなる困惑。何をしてもうまくいかない、苦痛。そして誰にも必要とされていないのではないかという不安。

「……そんなことない！　きみがいてくれたから……！」

黒い仮面がはがれおちる。勇生の見知った……それなのに、先ほどまで思い出せなかった……同級生の顔があらわれる。

ほっそりした顔立ち。いつもはサイドを後ろにまとめてリボンで

結んでいるセミロングの髪。瞳には驚愕と恐怖の色が浮かんでいる。
瞬間、奈落の動きが止まる。びしりと体を覆う黒い肌に亀裂が走った。
「シャードの加護……？　こんな力があるなんて……」
マシュマロがぽつりとつぶやく。
「なんで……なんで私なんかのために……！　今日だってそう！私なんていなくても、楽しそうにしていたじゃない！」
「見ていた……の？　全然、気付かなかった……」
マシュマロが小さくつぶやく。
「きみのことを忘れていたから！　でも、ずっと何かが足りない気がしていた……だから！　きみを助けに来たんだ！」
「なんで……なんで、私のことなんか！」
「理由なんてわからないけど、きみを助けたいんだ！　今、奈落の種を取り出す！」
勇生はセキュアダガーを手に持つ。思わず地歩の体がこわばる。
瞬間、
ドスッ。
音をたてて勇生の腹を何かが貫く。地歩を覆っていた奈落から触手が現われ、勇生の腹を突き破ったのがマシュマロには見えた。
「やめ……て、もう、嫌だ、私はもう……！」
地歩の体を再び暗い闇が覆う。奈落に覆い尽くされ、再び地歩は物言わぬ影へと戻った。
「奈落め、彼女が絶望から解放される前に、私たちを倒すつもりだわ！」
「だったら……っ、あとはこいつを倒せば地歩を助けられるんだ！」

シャードの輝きに包まれながら、勇生が叫ぶ。激痛をこらえ、左手を高く掲げる。
「『剣の騎士』よっ！　もう少しだけ、力を貸してくれ！」
掲げた手の中に異世界の剣が現れる。それを振り下ろし、腹を貫く触手を断ち切った。
「……もう一ラウンド！　もう一ラウンドで地歩を助ける！」
両手に剣を構え、叫ぶ。

「……」
奈落は再び沈黙を取り戻し、両手を構える。あっと思う間もなく、その体から邪悪な闇が周囲に広がっていく。
「奈落の神の加護！」
マシュマロの顔が驚愕の色に染まる。奈落の背から広がる闇が無数の針へと変わっていく。針は一瞬にして教室を包みこんだ。
「加護！？　これって！？」
勇生が思わず叫ぶ。

「シャードと同じように、奈落も神々の力を引き出すことができるの！　……けど！」
マシュマロは杖を構える。ブローチのシャードが赤く輝いた。
「……片目の神よ！　汝の加護と叡智を我に与えたまえ！」
無数の魔方陣が空中に生まれ、針の一本一本を受け止める。きいん、と音をたて、無数の針が粉々に砕けた。

「……すごい、これも魔法……？」
ぽつりと勇生がつぶやく。マシュマロはブローチに手を当て、笑みを作った。
「奈落の神の力を封じたの！　伝宝くん！」
「うん！」
両手に剣を構え、奈落に向きなおる。必殺の一撃を防がれたこと

で動揺している奈落に向け、まっすぐにセキュアダガーを突き出す。
「……！」
奈落の闇がわき上がり、勇生の全身を包んでゆく。全身から力が抜けて、手のひらからダガーをとり落としそうになる。
「そんなもので……！　屈するもんか、お前なんかに！」
叫ぶ勇生のシャードが青く輝く。あふれる光が闇を打ち払っていく。
「シャードの加護を引き出している……すごい！」
「う……ぁあああああ！」

叫びが教室に響く。ダガーをつきたて、小剣……鋭利無双の『剣の騎士』を振るう。
硬い感触とともに、奈落の外装がはがれおちていく。
ドッ……と音をたて、剣の騎士を奈落の闇につきたてる。
「小練さん！　あれに！」
「わかった！」
シャードの輝きに体を包みながら、マシュマロが突進する。思いきり杖を振り上げ、突き立った剣の騎士へ向けて振り下ろす。
「雷よ！　荒ぶるままに我が敵を倒せ！」

「きみを救う！　ガイア、力を貸してくれ……！」
マシュマロの杖から雷がほとばしる。白く輝く雷は視界を覆い尽くし、奈落に突き立った剣の騎士へと吸い込まれていく。雷を受けた剣は白く輝き、奈落の闇を切り裂く。
「……！」
勇生のシャードが青く輝く。力を失った奈落が、種子となって浮かび上がる。
「これで……終わりだ！」
叫び、剣を振り下ろす。剣の騎士が奈落の種を真っ二つに切り裂

いた。二つに別れた奈落は形を保てず、粉々に砕け散った。
奈落によって埋め尽くされた空間は消え去り、静かな学校の姿を取り戻していく。
奈落から解放された地歩はゆっくりと床に崩れ落ちる。その体を勇生が受け止めた。
「地歩！」
地歩の体は生気がなく、力が抜けている。苦しげな呼吸は今にも止まりそうなほどだ。
「奈落に生命力を奪われているみたい……」
「そんな！　なんとかならないの！？」
マシュマロのつぶやきに思わず顔をあげて叫ぶ。

「まだ大丈夫。私のシャードよ、残った力を貸して……！」
ブローチを抑えながらマシュマロが両手を掲げる。柔らかい光が地歩の体を包んでいく。
地歩の青ざめていた顔に赤みが増し、呼吸も落ち着いた柔らかなものに変わった。
「ふ、ぅ……」
マシュマロが額の汗を拭う。
「……地歩を助けられたんだ……」
ぽつりと勇生が漏らす。疲労と痛みで視界がくらくらする。思わず、床にへたり込んだ。

「この人、伝宝くんの同級生なんだ」
ふとマシュマロがつぶやく。地歩の額に手をかざして様子を確かめながら、勇生の顔を見つめている。
「うん。……一年の時から同じクラスで。友達なんだ」
「ふうん。……名前で呼ぶんだね」
どことなくとげとげしい様子でマシュマロが言う。

「まあね。自然にそう呼んでいる。地歩も『勇生くん』って呼ぶけど」

「……わたし、最初に『マシュマロでいいよ』って言ったよね。」
「そ……そうだっけ。じゃあ、僕のことも勇生でいいよ」
あまりにもいろいろなことがありすぎて、出会ってすぐのことなど忘れてしまっていた。勇生は思わず、頭をかきながら言う。
「うん。師匠にも面倒をみるように言われたし……これからよろしくね、勇生」
「う、うん……よろしく、マシュマロ」
なんとなく照れくさいものを感じながら、勇生はマシュマロの差し出した手を握った。

○シーン14

放課後のチャイムが鳴る。
勇生は本校舎に隣接している部活棟に居た。部室がいくつも並んでいる。その片端に新しく用意されたプレートを見上げる。
「魔法部……」
ぽつりとつぶやく。その隣で、マシュマロが胸を張って見せた。
「私もしばらくはこの学校にいることになるし。拠点が必要でしょ？」
もともと生徒の自主性を重んじる瑞珠学園は部活動には寛大である。マシュマロは早速学校にかけあって『魔法部』を立ち上げ、空いていた部室を手に入れたのだ。
「もし何かあったら、師匠や連盟とも連絡できるようにしておかなきゃね」
早速、マシュマロは部室に魔法陣の描かれた絨毯を敷き始める。

「……活動的な子なんだね、小練さんって」
後ろから声がかけられる。勇生が振り返った先で地歩が髪をかきあげていた。
「地歩。……もう体はいいの？」
「うん。お医者様がもう大丈夫って。……ごめんね、心配かけちゃったかな？」
地歩は事件の後、マシュマロの所属する魔術師連盟に保護された。魔術師連盟は魔法や奈落の知識が世間に公表されることを防いでいる組織だ。そのため、地歩の記憶は魔法のような力で消され、数日間の入院をさせられていたのだ。
「ううん。でも、無事でよかった」
「……入院していた間、勇生くんが夢の中で励ましてくれた気がするの」
地歩がそっと笑みを作る。

「そ、そうなんだ。……少しでも力になれたのかな」
「うん。何してもうまくいかなくて、私がいてもいなくても変わらないんじゃないかなって思っていたんだけど……」
地歩の笑みが、何となく照れたように赤くなる。
「……夢の中で勇生くんが、くじけたらダメだって教えてくれた気がするから。もうめそめそするのはやめることにしたの。……ありがと、ね」
「い、いや！　僕自身は何もしてないんだし」
「それでも、なんとなく言いたくって。私、部活のみんなにも挨拶してくるね」
そう言って、地歩は歩きだしていった。ちなみに、地歩は歴史研究部である。

絨毯を敷き終えて、マシュマロが立ち上がる。
「……記憶がなくなっても、心で感じたことは覚えているのよ。だ

から、彼女が言ったことも本心だと思う」
「うん。小練さ、じゃなかった、マシュマロのおかげだよ。ありがとう」
「お、お礼なんて。そ、それより早く中に入ってよ、副部長」
照れたように頬を染めながらマシュマロが言う。勇生はほほえんで頷いた。
「わかったよ、部長」

がらんとした部屋の中。こほん、とマシュマロが小さく咳をした。
「えー、それじゃあ、ただいまより魔法部の活動を始めます。当部活動は魔法や呪術の研究を通じて、この世界の成り立ちを……」
マシュマロが言いかけた時。不意にマシュマロの携帯電話が着信音を鳴らした。慌ててカバンの中から取り出す。

「は、はい、もしもし？　……え？　……えぇ！？　……わ、わかりました。それじゃあ、今から調査してみます……」
ひとしきり話しこんでから、マシュマロは電話を切った。いぶかしげにする勇生に向け、
「……実験動物が脱出した、奈落に憑かれている可能性がある……この街に向けて移動しているって」
「ええ！？」
驚きの声を上げる勇生を尻目に、マシュマロの眉にぐっと力がこもる。
「それじゃあ、早速今から調査を始めるわよ。青き星を奈落から守るのよ！」

シャードの声が流れ込んでくる。いや、シャードがささやくからじゃない。奈落によって傷つけられる人がいるなら。それを自分が助けられるとしたら。答えは決まっている。
「……よし、やろう！」

勇生はマシュマロの顔を見つめ返して答えた。

第1話「白い仮面の少女」ーその7（後書き）

○アペンディクス

キャラクターデータ

・伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）

年齢：１６歳　性別：男　種族：人間

身長：１６６ｃｍ　体重：５２ｋｇ

クラス（レベル）：レジェンド（１）／ファイター（１）／スカウト（１）

・小練（こねり）マーシュ・マロウ

年齢：１６歳　性別：女　種族：人間

身長：１５５ｃｍ　体重：４３ｋｇ

クラス（レベル）：アルケミスト（１）／ブラックマジシャン（１）／ホワイトメイジ（１）

番外編1「小練マーシュ・マロウ、花を見る」前編

○小練マーシュ・マロウ、誘われる

キーンコーン……

終業を告げるベルが鳴る。

小練(こねり)マーシュ・マロウ……長いので、これからはマシュマロと呼ぶことにする……は、手早く手早く帰宅の準備をはじめた。

栗毛がかった長い髪を、後ろで二つにまとめている少女だ。

太めの眉はふわりと弧を描いて、青い瞳の上に乗っかっている。

セーラー服の胸元には、いくらか子供っぽいデザインのブローチが飾られている。

セーラー服姿からは想像もつかないが、彼女は世界を侵略する根源的破壊存在……奈落と戦うクエスターにして錬金術を修めた魔術師である。

とはいえ、本日は彼女の所属する魔術師連盟からの命令もなく、奈落の侵略も報告されていない。

連盟の前線基地としてこの私立瑞珠(ずいしゅ)学院に作った魔法部の活動をする必要はない。

というわけで、用事の無くなったマシュマロは、自分の部屋に帰ろうとしていたのだが……

「マシュマロさん」

と、男子生徒の一人が彼女に声をかけた。

人なつっこい女顔の少年である。くるくるとよく動く目が、マシュマロを見つめている。

「あ。ええと……」

「まだ、名前覚えてないの？　総田だよ。総田洋太（そうだ・ようた）」
「ご、ごめんなさい。こっちの人の名前って、あんまり慣れてなくて」
「ああ。マシュマロさん、ハーフだけどイギリス生まれなんだよね」
「うん。育ちも……」
「ま、それはともかく」

洋太はプレゼントを背中に隠し持っていますよというような笑顔で、言う。
「日曜日、空いてる？」
きょとんと瞬きするマシュマロ。ぱしぱしと、長いまつげが触れあう。
「空いてるけど……どうして？」
「お花見しようと思ってさ」
洋太が告げる。
「オハナミ？」
きょとんとしたマシュマロ。
「そう。マシュマロさんの歓迎会も兼ねてさ」
「かんげ……」

「この学校、敷地はムダに広いからさ。敷地の中でできるんだよ」
「あ、えっと……」
「そういうことだから。日曜の１２時ね。それじゃ」
そう言って、洋太は別のグループに声をかけていく。
マシュマロはその背中を見つめて、聞きそびれた質問の行き所を探していた。
というのも、マシュマロが前にいた魔法学校では、分からないところは聞くより先に自分で調べてくるのが当然だったのである。
だから、マシュマロには分からないことを人に聞くという習慣があまりなかったのだ。

その様子を横目で見ていた別男子生徒がマシュマロに声をかける。
「マシュマロ、もしかしてお花見のこと、知らないの？」
いくらか小柄な、短い黒髪の少年。名前は伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）。マシュマロがこの街にとどまる原因になった、後輩クエスターだ。
「え！？　あ、え、えっと……」
マシュマロの心の中の不等号……
『お花見とは何か知りたいと言う気持ち＜勇生に無知だと思われたくない気持ち』
「し、知らないわけないでしょ。ま、魔術師にして錬金術師のわたしが、そんなことも知らないなんて、そんなことあるわけじゃないじゃない」
「そうか。よかった。僕も洋太に誘われたから。あいつ、こういうときの行動力はすごいんだよね」
やれやれと勇生が肩をすくめ、勇生が笑顔を浮かべる。

（ど、どうしよう……お花見って、何をするの！？）
マシュマロはもはや聞き出せない空気に耐えられず、足早に教室を飛び出していった。

○小練マーシュ・マロウ、知ろうとする

「ただいまー……って、誰も居ないけど」
はー、とため息を吐きながら、マシュマロは自分の部屋の戸を開けた。
ベッドタウンとしての役割を持つN市に、いくらでもある集合住宅の一室。
引っ越してきたばかりなので、あまりものがない。ベッドに衣装だな、本棚がないので段ボールの中に詰めたままになっている本の

数々……そんなところだ。

マシュマロはクエスターとは言え、連盟での立場はあまり高くはない。彼女の両親はそこそこ名の知れた研究者だし、師匠は名高き“蒼き星の”マーリンではあるが、彼女自身は連盟にとって大事な役割を担っているわけではないのだ。

連盟は権威主義な部分があり、重要な仕事や、価値のある研究をしているのでもなければ、大した援助は受けられない。マシュマロは一般家庭並みの暮らしをできるだけの額を受けているのだから、まだまだマシなほうだ。

ため息を吐きながら、制服を脱ぎ、壁にかける。

慎ましやかな胸を包む下着を指で直してから、部屋着に袖を通す。

それから、ぼふ、とベッドに倒れ込んだ。

「あー、どうしよ……」

クッションを両手で抱えて、ごろりと寝返り。

「つい『知ってる』なんて言っちゃったけど、素直に聞いた方がよかったかなあ……」

天井を見上げて独り言。太い眉がハの字にたわむ。

「ううん！　他の人の前ならともかく、勇生に『知らないから教えて』なんて言えないわよ」

クッションを抱えたままベッドの上でごろごろと転がる。

マシュマロは先輩クエスターとして、勇生を教え、導く立場にあるのだ。その彼女が、後輩である勇生に頼るなんてことはできない。

ただでさえ、以前の事件では助けて貰ったのに……。

「これ以上借りを増やすわけにはいかないわ。自分で調べなきゃ！」

ぱっとクッションを投げ出して、部屋の隅に置いたままのビニール袋に飛びつく。

ごそごそと探って取り出したのは、国語辞典だ。日本で暮らすことになったので、何はともあれ購入しておいたのである。
マシュマロの父親は日本人であり、母親も日本に留学していた。そんなわけで、家庭内で日本語が普通に使われていたし、彼女自身も日本語を普通に使えるのだから、そんなに必要なものではないのだが。
勉強熱心というか、知識に対して執着が強いというか、とにかくマシュマロはそれが必要だと思ったのである。

そしてさっそく、マシュマロは「オハナミ」を調べてみた。が、該当する言葉はなかったので、日本語の法則から類推し、「ハナミ」を引く。

『はなみ【花見】　花、特に桜の花を見て楽しむこと。春の季語。』

「桜を見て、楽しむ……？」
調べた言葉の意味を考えて、マシュマロは頭をひねる。
「桜を見るのは分かるけど、楽しむって何をするのかしら……」
もしかして、みんなで並んで、ただ桜を見て過ごすのだろうか。
「そんな……で、でも、日本人は縁側でお茶を飲んで一日を過ごすって言うし、そうやってぼんやりして楽しめるのかも……！？」
だとしたら、自分はその楽しみを共有できるだろうか？
「うう、きっと無理だわ。たぶん、すぐにつまらなくなっちゃう……そ、そりゃ、花は綺麗だけど、でもそんなにずっと見てられないと思う……」
だいたい、桜なんて教室の窓からでも見えるのに！
マシュマロは見えない影と戦うように、オハナミの内容に頭を抱えていた。
「や、やっぱり、人に聞こうかな？」

ベッドの脇に置いた、携帯電話に目を向ける。
「……。勇生には聞けないし、パパに電話するわけにはいかないし、日本にいる知り合い……」
じー、っと考える。
「あ、そうだ！」
ふと頭の中に浮かんだ顔に声を上げ、さっそくマシュマロは携帯電話を手に取った。

○ブライアン・ゴールディ、電話を受ける

電話のベルが鳴る。
金色の髪をきっちりとなでつけた、欧米系と見える初老の男、“教授”ブライアン・ゴールディは、広げていた分厚い資料の束から顔を上げた。
彼の研究室には、二つの電話が置いてある。ひとつは、もちろん大学の内線電話。
もうひとつは、なぜかどこにも配線がつながっていない黒電話だ。研究室を訪れる学生たちは、教授なりのアンティーク趣味だとうと考えているが、実は違う。
その電話は、ゴールディの裏の顔、すなわち魔術師連盟の幹部としての顔で使うための電話なのである。

「……緊急の用事か？」
ゴールディは受話器を取る。
「我が輩だ」
「教授！　よかった、すみません、助けてください！」
甲高い声が受話器から耳にぶつかる勢いで飛び出してきた。
「その声は……小練くんか？」

ゴールディは思わず受話器を耳から離しながら問う。
「はい！　あのわたし、教授にどうしても聞きたい事があるんです！」
マシュマロは、かなり切羽詰まった様子である。ゴールディは眉をひそめた。
マシュマロのような、現場にいる派遣員から奈落などの危険な存在についての情報が入ってくることは、少なくない。
特にマシュマロは、現場での身元引受人がまだ決まっていない身だ。ゴールディのような幹部に直接連絡が入ってきてもおかしくはない。

「続けたまえ」
ゴールディの言葉に、マシュマロが受話器の向こうで頷いたのがわかった。
「はい、あの、教授……」
何度経験しても、世界の危機につながるかもしれない情報に触れることは緊張する。
ゴールディは連盟の構成員として、そして幹部として、長年にわたってそれを経験してきた。世界の平和が、いかに脆く、いかにはかないものかを誰よりも知っているのだ。

「緊張せずともよい。落ち着いて、言うべきことを考えるのだ」
ゴールディは、自分の緊張を悟られまいとそう言った。
「は、はい。実は……」
ゴールディの額に汗がにじむ。
「お花見に誘われたんですけど、お花見ってなんですか！？」

がくっ。
と、ゴールディは思わずデスクにつっぷした。

番外編1「小練マーシュ・マロウ、花を見る」後編

○小練マーシュ・マロウ、人に聞く

「教授！？　どうしたんですか、教授！？」

電話の向こうで、なぜか『がくっ』という謎の音が聞こえたので、思わずマシュマロは大声で聞く。

「な、なんでもない。まさか君がそんなことを聞いてくるとは思っていなかったのだ」

「そんなこと、ですか……」

「うむ。まあ、日本独自の風習であるからして、君が知らないのも無理はない」

「風習ですか」

「うむ」

マシュマロは、念のために手元にあった辞書をめくってみた。

『ふうしゅう【風習】　その地方や国で、人々が長年にわたって伝えてきた生活や行事のならわし。しきたり。風俗習慣。』

（しきたり……。それじゃあ、日本人はみんな昔から、伝統的にやってきたことなのね）

マシュマロは大きく頷きながら、ゴールディの言葉に耳を傾ける。

「我が輩も、大学の付き合いなどで参加させられることは多いが……まあ、大人数で集まって何かをすると言うのは苦手だ」

「大人数、ですか」

マシュマロは必死にお花見をイメージしようとしていた。頭の中で風景を想像する。

桜の花を見るというのだから、頭上には桜が咲いている。
そして、その下には大勢の人。勇生や、洋太や、クラスメイトたちを想像する。

「その上、どんちゃん騒いで飲み食いするのだからな……」
教授のような、自分の研究と仕事に没頭したいタイプにとって、そういったお祭り騒ぎは辛いものなのだろう……というようにはマシュマロは考えなかった。
また知らない言葉が出てきたのだ。マシュマロは辞書を慌ててめくる。

『どん‐ちゃん　鉦（かね）・太鼓・三味線などの鳴り物入りで騒ぐこと。』

「楽器を鳴らすんですか！？」
「うむ、まあ、そういうこともあった」
ゴールディが言っているのは、宴会芸の一種として、教授のひとりが歌った程度のことだ。
が、マシュマロはそれを別に解釈した……つまり、クラスメイトたちが笙（しょう）や琵琶（びわ）を持って盛大に雅楽を奏している光景である。
神妙な面持ちで篳篥（ひちりき）を鳴らす勇生の姿はあまりに似合わなくて笑ってしまいそうになったが、それをぐっと抑える。

「まえは、場所取りをさせられたこともあったな」
「場所取り？」
「敷物を敷いてな、何時間もその上で待たされるのだ」
「はあ……」
どうやら、お花見では何かを敷くらしい……というところで、マシュマロの頭に電光が閃いた。

日本で行われる神事では、床にゴザを敷くのだ、ということを、以前に書物で読んだことがある。なんでも、神が降りてきた時に、そこに座るのだと信じられていたらしい。

（そういえば……！）

マシュマロは再び閃いた。

日本の神事では、ものを食べたりお酒を飲んだりするのが一般的だ。

（確か、神様と同じものを食べたり、飲んだりすることで、神様に近づくって……）

マシュマロは魔術師連盟の設立した学校で、魔法学を学んでいる。

もちろん、各地の信仰やアニミズムについてもその中で勉強しており、日本の信仰形態についても、知識を持っている。

ただこの場合、日本の風土についての知識が欠けていたのが問題だが。

「小練くん」

「は、はいっ！？」

教授の話も耳に入っていない状態だったマシュマロは、慌てて顔を上げた。

「君もよく知ってのとおり、我が輩は忙しいのだ。もう分かったかね？」

威圧するような教授の言葉。オハナミについての知識欲で押し返していたが、教授は本来、マシュマロにとっては「怖い人」なのだ。

「すすす、すみません！　もう分かりました！　ありがとうございます！」

マシュマロは電話で見えなくとも何度も頭を下げ、それから通話を終わらせた。

「ど、どうしよう。オハナミがそんなに大規模なものだっただなんて……」

マシュマロは流れる汗を抑えきれず、ばくばくと鳴る胸を押さえた。
「で、でも、歓迎会って言ってたよね。ああーぅ、歓迎会って、そこまでするものなのかな……」
ぐるぐると回りそうな頭を押さえ込むマシュマロ。そう考えると、もしかして、と頭の中で別の可能性を考えてしまう。
「カンゲイカイ……だよね？　も、もしかしてわたしが聞き間違えたんじゃ……」
ごく、と白い喉を鳴らして、マシュマロは再び辞書をめくった。
『かんげ【勧化】　仏の教えを説き、信仰に入らせること。仏の教えを広めること。』
「！！！！」
マシュマロはついにオハナミの正体を悟った。
「か、勧化会って、そ、そういうことだったの！？　わたしを、仏教徒にしようと……！？」
あわわわ、と慌てたように言葉が漏れる。
もちろん、仏教と神道が別のものであることくらいはマシュマロも知っている。
だが、日本では神仏習合と言い、神と仏は同じものであるという考え方が広く知られているという。となれば、今までの話の流れ、すべてがうなずける。
「ど、どうしよう、どうしよう……？」

○小練マーシュ・マロウ、決意する

マシュマロはしばらくベッドの上で転げ回ってから、ついに結論を出した。

「うん。改宗はできないって、ちゃんと言わなきゃ！

○小練マーシュ・マロウ、謝る

そして、日曜日。午前１１時１５分に瑞珠学院前に到着したバスを、マシュマロは降りた。

洋太から知らされた、目的の場所へ向かう道中は、気が重かった。

マシュマロにとって、高校生としての生活は、あくまで魔術師として、クエスターとしての活動を偽装するための、表の顔である。

だからして、クラスメイトとの友情……というのは、おろそかにしてはならないのだ。もし普通の高校生ではないことが発覚してしまっては、「魔法は秘すべき」とする連盟の教えに背くことになる。

あくまで仲良く、ただしプライベートには立ち入らせず……そんな関係を続ける必要があるのだ。

校舎とは別の方向。

並木道には、バスが通ってきた桜の木が植えられている。その奥に進むと、すっかり一面桜で満たされて、頭上はピンクと青のコントラストを描いている。

並木道の奥には、生徒たちが持ち寄ったのだろう、模様もサイズもばらばらなビニールシートが広げられて、その上に菓子類や弁当、飲み物が積み上げられるように置かれている。

どうやらまだ奏楽の準備はされていないようなので、マシュマロは安心した（そんな準備はまだどころかずっとされないのだが）

と、生徒たちの誰かがこちらに気づいたらしく、声をかけられた洋太が小走りに近づいてきた。

「ま、マシュマロさん、まだ準備中だよ！　１２時って言ったのに、早く来すぎだって！」

瑞珠学院には部活などに熱心な生徒が多く、日曜でも学校に来るものが少なくないので、朝は1時間に2本程度、バスが出ているのである。
「ご、ごめんなさい。でも、早く言わなきゃって思って……」
「どうして？　もしかして、嫌になった？」
困り顔のマシュマロの表情で、洋太は嫌な予感がしたのだろう。大きな目を陰らせる。
マシュマロはそうっと顎を引くように頷いた。

「気持ちは嬉しいんだけど、わたし、改宗するつもりはないの」
「……はい？　か、回収？　ええっと……ふ、フラグでも立ててたの？」
「旗？　オハナミでは旗を立てるの？」
「そ、そういうわけじゃないんだけど。え、ええっと……ちょっと待ってね」
洋太はあっという間にこんがらがった話を立て直すため、振り返って人を呼んだ。

「勇生！　マシュマロさんの話、翻訳してよ！」
呼ばれた勇生は、これまた困惑の表情を浮かべた。
「マシュマロは普通に日本語を話せるじゃないか！」
「そうじゃなくて、彼女の話がよく分からないんだって。ほら！」
焦れた洋太が、勇生の手を引いて駆け戻ってくる。

「ほら、頼んだ！」
どんと背中を押されて、勇生がマシュマロの前に突き出される。
マシュマロはと言えば、洋太の反応を見て、もしかしてまずいことを言ってしまったのではないかと困惑しきっていた。
「ええっと……ど、どうしたの？」
勇生が問う。マシュマロは視線を泳がせながら、

「わ、わたし、これでも洗礼も受けてるから。気持ちは嬉しいし、みんなと一緒に楽しみたい気持ちはあるんだけど、やっぱりママに相談もしないで改宗するのはどうかなって……」

はうはうと言葉を詰まらせながら言うマシュマロ。

洋太よりは彼女の思考パターンを理解している勇生は、はぁー、と大きく息を吐き出した。

「あのね。……もしかして、お花見を何かの儀式だと勘違いしてない？」

と、かなり近いところまで予想してきた。

「え。……ち、違うの？　だって、勧化会って」

「歓迎会だよ。なんでそんな聞き間違い、するかなあ。魔法オタク」

「だ、誰が！」

勇生の言いぐさに、マシュマロが両手を振り上げる。洋太は早速傍観者モードに入ったらしく、二人の様子を見てくすくすと笑っていた。

「あのね。お花見って、そんなんじゃないよ。単にみんなで集まって、桜を見ながらご飯食べたり、話をしたり……」

「そ、そうなの？　道理で、お酒やゴザがないわけだわ」

「……入ってる情報は間違ってないのに、なんで間違った結論が出せるの？」

呆れた様子で勇生が言う。

「でも、どうしてそんなこと、するの？」

「さあね。楽しかったらなんでもいいんじゃない？」

「楽しいの？」

「やってみればわかるよ」

二人の会話が一段落したと判断したのだろう。ひょいと洋太が横から顔をのぞき込ませた。

「話はまとまった？　とにかく、一緒にお花見、してくれるんだよね？」
「う、うん。ごめんなさい、実はわたし、お花見ってよく分からなくて。調べてみたんだけど、間違えちゃったみたいで……」
顔が赤くなっているのが自分でも分かった。もともとの肌が白いので、頭上の桜の花にも負けず劣らずのピンク色だ。頬が熱くて、まともにみんなの顔を見ることができない。
「ひ、ひどいよねわたし。みんながせっかく誘ってくれたのに、ぜんぜん知らなくて……」

必死に謝っているつもりだったのだが、洋太はまったく気にしていないそぶりで背中を向けて、
「そんなことより、まだ準備中だから！　勇生、マシュマロさんの相手してて！」
と言って、さっさと戻っていった。
「え……あれ、ええと」
本当になんでもないことのように去っていった洋太を見て、マシュマロは驚いたような、戸惑ったような、そんな顔を作る。

と、必死の謝罪の行き場を無くしたマシュマロの肩を、ぽんと勇生が叩いた。
「別に、分からなかったとか、知らなかったからとかで、みんな軽蔑したり笑ったりしないって」
そう言って、肩をすくめる。勇生はマシュマロの目のあたりを見つめながら、
「マシュマロは、気負いすぎだよ。がんばるのはいいけど、いつも肩に力を入れてたら疲れちゃうだろ？　たまには、ちょっと他の人に頼ったっていいんだから」
そういった。

「そ、そっかぁ……」
はぅー、と、息を吐くマシュマロ、思わず崩れそうになるのを、勇生にもたれてこらえる。
「うわっ。……な、何？」
いきなりもたれかかられた勇生は慌てた様子だ。
「じ、実は、どうやって断ろうかと思っててあんまり寝てなくて……」
「……だから気負いすぎだって」
「ご、ごめん」
「そうそう。そうやって素直に謝って、助けてもらえばいいんだよ」
くすくすと笑う勇生。マシュマロはまた顔が赤くなるのを感じたが、今度は何も言わなかった。

○小練マーシュ・マロウ、花を見る

「よし、オッケー！　勇生、マシュマロさんを連れてきて！」
「うん。……行こう、マシュマロ」
勇生がマシュマロの手を引き、シートの敷かれた方に向かっていく。

ぱん！　ぱんぱんぱん！

クラスメイトたちが一斉にクラッカーを鳴らす。
「これからよろしく、マシュマロさん！」
「こっち、座ってよ」
「ちょっと男子、小練さんが困ってるでしょ」
「いいだろ、ちょっとくらい！」
マシュマロはその『普通の学校』の光景にぽかんとしていたが、

ふいに目元が熱くなるのを感じた。
思わず目を伏せると、洋太が困ったように、
「ま、マシュマロさん？　どうしたの？」
「ご、ごめんなさい。ちょっと今、ひどい顔してるから。き、昨日から寝てないし、朝ご飯も食べてないし」
マシュマロはごしごしと目元を袖でぬぐっていた。
クラスメイトたちが顔を見合って、ほほえみ合う。

「そういうことなら」
と、端に両足をそろえて座っていた女子が手を上げる。寿美地歩（すみ・ちほ）という名前のクラスメイトで、先日マシュマロと勇生が奈落の魔の手から救ったばかりだ。
「私、お弁当作ってきたから。みんなで食べよう？」
と、立派な重箱を差し出した。
「あ……あり、がとう」
マシュマロは、被害者であり、奈落の記憶を失っている地歩とは積極的に関わろうとしてこなかった。
しかし、差し出された料理に口をつけないわけにもいかない。まずは、小さなサイズのおにぎりを手にとって、口に運んだ。

はむ。
と、口にした瞬間、さっき抑えこんだはずの涙が、決壊したように溢れてきた。
「うわ。ま、マシュマロ、どうしたの？」
「おいしくなかった？」
心配げに聞いてくる勇生と地歩に、マシュマロはぶんぶんと首を振って応える。
「お、おいしい……」
その涙は、口にしたおにぎりがおいしかったからだろうか。それとも、自分が『普通』の高校生から受け入れられたことに対する喜

びのせいだろうか。
それはマシュマロ本人にもわからない。
涙を流すマシュマロの代わりに喜びの歌を歌うように、桜の花が風に吹かれて、さらさらと鳴っていた。

第2話「疾く駆ける獣」―その1

○シーン1

N市街地へ向かう道の上、少女の声が夜の郊外に高く響く。

「マナよ！　我と彼らを包み、世界を成せ！」

少女の茶色がかったセミロングの髪がふわりと広がる。月のわずかな光を浴びて、青い瞳が輝いた。振り上げた杖……複雑な機械と錬金術の粋を組み込まれたチャンバースタッフが赤い光を放つ。

途端、赤い光は周囲の空間を埋め尽くしていく。世界を構成する情報が書き代わり、やがて淡い光に包まれた空間が周囲に現れた。

「マシュマロ！　これは！？」

少女の隣から少年が問いかける。少年の短い黒髪は汗を吸って額に張り付き、隠しようのない緊張が表情に浮かんでいた。

少年は伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）。少女は小練（こねり）マーシュ・マロウ、勇生からはマシュマロと呼ばれている。共に世界を守る宿命を背負ったクエスターである。

「『結界』を張ったの。この空間は周りから隔絶されているから、周りのことを気にしないで、存分に戦えるわ。……あいつを逃がすこともないし、ね！」

マシュマロが前方に視線を向ける。その先には、黒い毛並みの獣。犬とも狐とも付かないフォルムだが、勇生が動物園で見たライオンよりも大きい。体長四メートルから五メートルと言うところだろう。口からは不揃いな牙が突き出てだらだらと唾液が垂れている。

獣は奈落に憑かれている。それは間違いなかった。全身から邪悪な気配が漂っている。魔術師連盟の施設から脱走した実験動物、ということだ。どんな実験が行われていたのかは気になるところだっ

たが、今はそんなことを気にしている場合じゃない。
奈落に憑かれた獣は、街へ向かっているのだ。マシュマロによればより多くのマナを求めているから、とのことだが……それはとりもなおさず、人を襲うつもりということなのだ。

「それなら……行くぞ！　出でよ、剣の騎士！」
勇生の掲げた左手の先で空間が歪み、一振りの剣が現れる。世界の壁に穴を開け、武器を召喚したのだ。表れた剣は空間に満ちる赤い光を照り返し、鋭い光を放っている。
同様に、右手にナイフを構える。不揃いな二刀流。マシュマロも隣で、チャンバースタッフを構えた。

獣が全身の毛を逆立てた。獣臭を孕んだ奈落の気配が一気に空間に広がっていく。
「来るか！」
獣の攻撃に備えて、セキュアダガーを前に突き出す。このナイフには所有者を守る力が備わっているのだ。
「勇生、待って！　何か来る！？」
マシュマロが驚きにも似た声を上げる。直後、

ビシッ。
マシュマロの作った『結界』が悲鳴を上げた。続けて同じような音がいくつも重なる。
「マシュマロ！　これって！？」

少女は太めの眉をこわばらせていた。
「誰かが結界を壊そうとしているみたい。そんな、この奈落に仲間なんて居ないはずなのに！」
獣もこの事態に気づいたらしい。勇生たちへの敵意を緩めこそしないが、様子をうかがうように首を振っている。

「ダメ！　もう耐えられない……きゃあっ！？」

マシュマロが悲鳴を上げると同時、結界はシャボン玉が弾けるように消え去る。赤い光は失われ、月明かりだけが周囲の景色を照らしている。

N市の町並みを背に獣と対峙していた勇生たちとは反対側、獣を挟んで向かい合うように人影があった。

女性だった。それも、少女だ。背は勇生と同じくらい。すらりとしたスレンダーな体躯だ。鋭い眼光が、何よりも目立って見えた。短い黒髪。月光を受けて輝いているのは、前髪が目にかからないように着けられた髪留めだろう。ブレザーにスカートの制服姿である。

両腕をまっすぐ前に突き出している。その手に握られているものに、勇生ははっと息をのんだ。無骨に黒光りするもの。

銃だ。

片手には拳銃。もう片手には一回り大きな、掌だけでなく肘まで使って構えるような、独特の形状の火器。勇生は銃器に詳しいわけではないが、直感でそれらが本物だと感じられた。銃身はどちらもまっすぐに獣に向けられていた。細い指が銃把を握り、引き金にかけられている様は、どことなく場違いにすら見える。

「見つけた、奈落。……埋葬する」

少女が呟く。構えられた銃口から聞こえてきたのかと思えるような、鋭さと強さが感じられる声だ。

続けざまに銃声。少女が左手に構えた銃器から弾丸をばらまく。獣がかわそうと駆けだしたそのタイミングに、獣の肩を狙って放たれた弾丸が突き刺さった。

獣が絶叫を上げる。放たれる銃弾に背を向け、逃げ出そうとする。

「させないっ！」
マシュマロがチャンバースタッフから火線を放った。杖は弾帯を巻き上げ、魔法弾がはき出される。炎は獣の表面を焼くが有効打にはならない。

「マシュマロ、このままじゃ逃げられる！」
「そ、そうか！　マナよ！　我と彼らを包み、世界を成せ……っ？」
カシャン、と軽い音が響いた。チャンバースタッフにつながる弾帯が完全に巻き上げられている。
「弾切れ！？　こんな時に！」
マシュマロが悔しげに叫んだ。

獣は急速に足を止めるとバネのように方向を変えた。二挺の銃を手に後を追う少女に向かい、不揃いの牙に覆われた顎を開く。
猛烈な風圧。分厚い本を床に思い切りたたきつけたような音と共に、少女の体が吹き飛ばされる。
「くっ……！」
人ひとりを吹き飛ばすような衝撃の中でも、少女は銃を獣に向ける。しかし、狙いを外された銃弾が命中するはずもない。少女は銃を握ったまま、地面の上を転がって受け身を取った。
「待て！」
勇生が追おうとするが、獣は車よりも速く走り出し、やがて闇の中へ飛び込んでいった。うなりを上げて風が過ぎ去った後は、その場に沈黙が降りる。

「逃げられたか」
立ち上がった少女が、銃を構えた手を腰の下にぶら下げて呟く。
「逃げられたか、じゃないわよ！　せっかく結界の中に捕らえていたのに！」
マシュマロが食ってかかる。

「どうせ、キミたちじゃやつは仕留められない。変な格好をした女と、頼りがいのなさそうな男じゃ」
少女は鋭い目をマシュマロと勇生に順番に向けた。その瞳は、まるで獲物を狙う肉食獣のそれだ。ぞく、と背筋が寒くなるのを勇生は感じた。
「わたしだって好きでこんな格好してるんじゃないわよ！」
少女は顔を赤くしたマシュマロの言葉も平然と受け流し、不意に自分のスカートをめくって見せた。

「うわっ！？」
勇生は慌てて目線を逸らそうとして、気づいた。彼女の腿に巻かれているベルト……おそらくは拳銃を吊すためのものだろうそれに、黒水晶のような重い光を放つものが取り付けられている。
「それって、まさか……シャード？」
少女が頷く。
「イエス。ボクはクエスターだ。そして奈落退治の専門家でもある」
「葬儀人（アンダーテイカー）！？」

マシュマロがぎくりと声を上げた。
「そう。だから、やつはボクが仕留める。邪魔をしないで」
「邪魔をしたのはそっちじゃない！　あの動きの速い獣の足を止めるためにわたしと勇生がどれだけ苦労したと思って……」
「ま、マシュマロ。落ち着いて」
勇生が二人をなだめるように間に入る。

「格好だけじゃなくて、名前も変わっているんだね」
マシュマロの顔がかーっと赤みを増していく。勇生は怒りが爆発する前にマシュマロを抑えて少女に向き直った
「マシュマロは愛称だよ。彼女は小練マーシュ・マロウ。僕は伝宝

勇生。ねえ、同じクエスターなら一緒にあの奈落を追えば……」
「ノー」
勇生の言葉を遮って、少女が告げる。
「奈落を仕留めるのはボクだ。他のクエスターの協力なんか必要ない」
それだけ言って、少女はきびすを返す。銃を手にぶら下げたまま、歩き始める。
「ま、待って！　せめて名前だけでも……」
少女は足を止め、首だけで振り返る。
「神力充（しんりき・みつる）」
そして、また歩き始める。勇生はもう一度声をかけたが、少女……充が振り向くことはなかった。

○シーン2

「もおっ、なんなのよあの女！　偉そうに！」
昼休みの屋上。マシュマロがばりばりと惣菜パンの袋を破りながらわめいた。
マシュマロの元に届いた連絡によれば、『獣』が活発に動くのは夜の間だけだ。昼の間はどこかに潜んでいるらしく、追いかけても無駄とのことで、二人は昨晩の失敗のことを嘆きながらも、昼の間は学院に行くことにしたのだ。
「お、落ち着いて。彼女だって同じクエスターなんだし……」
「全然違うわよ。あの連中、奈落さえ倒せればいいって感じでやり方は乱暴だし、周りのこと考えてないし……」
「あの連中、って、『葬儀人』ってやつ？　昨日は聞けなかったけど、それはなんなの？」

マシュマロは憤懣やるかたない様子で惣菜パンにかみつく。
「『葬儀人』っていうのは、フューネラルコンダクターっていう会社が使うエージェントのこと。奈落を倒すためには手段を選ばない連中で、おかげで連盟も結構迷惑かけられてるんだから」
がつがつと惣菜パンを口の中に押し込んでいく。
「FC社は表向き、葬儀会社なんだけど、実体は……いろいろな宗教が持ってた、対奈落のための戦闘部隊をまとめ上げたものなのよ。退魔師、祓魔師、エクソシスト……そういう人たちの集まり。最近の葬儀人の中には個人的な恨みで奈落と戦う人も多いって聞くけど」
「そっか。でも、彼女……神力さんも銃の腕はすごかったよね。本物の銃なんて初めて見たけど、ああいうのって普通あんなに簡単に撃てるものじゃないでしょ？」
「服も特別製だったみたいね。一見普通の制服だけど、所々補強されていたわ。その分、少し動きが鈍くなるけど……」
「そうなんだ。全然気づかなかったな。よく気づいたね」
マシュマロが惣菜パンをごくりと飲み込んだ。
「ああもう、おいしくない！」

ついに行き場を無くした憤りを爆発させた。味に文句を言うにしても、全部食べてからというのがどうにも律儀である。
「それ、購買だと一番人気があるパンなんだけど。やっぱり、味覚がちょっと違うのかな」
海外暮らしが長いマシュマロの味覚を想像してみる。マシュマロの居たイギリスでは普段、どんなものを食べているのだろうか。……残念ながら、勇生にはイギリスの名物料理はひとつも思いつかなかったので、それ以上は考えないことにした。
「って、勇生の方こそ、昼ご飯はどうしたの？」

「え、えーと。マシュマロがいきなり屋上に来いって言うから、もらいそびれたって言うか……」
「もらいそびれた？」
どう説明しようか、と勇生が考えているとき。屋上の戸が開かれた。

「あ、ここにいたんだ。勇生くん、忘れ物だよ」
その戸をくぐって表れた女生徒が、勇生に声をかける。片手にはハンカチに包まれた弁当箱。勇生やマシュマロの同級生、寿美地歩（すみ・ちほ）だ。
「ありがとう。ごめん、こんな所まで」
「ううん、勇生くん、一人暮らしでしょ？　大変なんだもん、気にしないで」
地歩が弁当箱を勇生に渡す。ぽかんとそれを眺めていたマシュマロが、はたと気づいて手を打った。

「もしかして、寿美さんが勇生にお弁当作ってるの？」
「たまに、だけど。作ってくれるっていうから、甘えちゃって」
はは、と頭を掻いて弁当箱のふたを開く。

地歩は、かなり料理がうまい。勇生は一人暮らしなので自分で作ったたいしたことのない料理と店屋物ぐらいしか知らないが、地歩の料理は店で出してもおかしくない、いやそれ以上の味だ。
とは言っても、豪勢な料理というわけではない。卵焼き、豚肉と野菜の炒め物、白いご飯。爪楊枝でハムと生野菜がまとめられている。なんてことはないものばかりだ。それでも、素直においしいと感じられるのだ。もしかしたら、料理の巧拙はたいした問題ではなくて、誰かが自分のために作ってくれた、という思いがおいしいと感じさせるのかも知れない。
「小練さんこそ、勇生くんとどうしたの？　二人で何かお話？」

「え、えーと……」
地歩がスカートの裾を抑えながら二人に聞く。まさか、本当の事を教えるわけにはいかない。地歩は前の事件で奈落に憑かれていたとはいえ、事件のことは覚えていないのだ。

「二人で内緒話？　うらやましいな、仲がよくて」
地歩が二人をからかう。
「そ、そんなんじゃないけど……あ、そ、そうだ。勇生、放課後にも用事があるから。ちょっと付き合ってね」
そう言って、マシュマロはそそくさと立ち上がる。

「え、あ、ちょっと……」
静止の声も聞かず、立ち去っていく。
「気を遣ってくれたのかな。そんなのじゃないのにね」
勇生と並んでマシュマロを見送り、地歩が口元を隠して笑う。
「う、うーん……」
逃げたな、と勇生は思ったが、考えてみればマシュマロは地歩を避けている気がする。もしかしたら、地歩に気を遣っているのかも知れない。地歩にとって、マシュマロは事件の後の生活に紛れ込んできた存在だ。それがあまり近くにいると、ふとしたきっかけで地歩の心を刺激してしまうかもしれないのだ。

そう考えると、勇生は少し安心した。奈落と戦うために必死なマシュマロは腹を立てたりすることはあっても、周りのことを考えているのだ。それなら、自分もその気持ちを無駄にはできない。以前と同じように、地歩と話をして、彼女の心をなだめる。それが今の自分が地歩にしてやれることなのだから。
「そ、それよりさ。今度の授業だけど……」
夜になれば再び奈落の戦いが待っていると分かっていて、それでも勇生は以前と同じ『普通の昼休み』を地歩と共に過ごした。

第2話「疾く駆ける獣」ーその2

○シーン3

放課後。勇生はマシュマロに連れられて、N市の北にある本町を、さらに北に向かって歩いていた。

「こんなところで、なんの用事があるの？　こっちには工場くらいしか……」

「その工場に用事があるのよ」

いぶかる勇生に、マシュマロが振り返って青い瞳を向けた。

「サジッタ社に行くの」

「サジッタ社って、あのサジッタ社？　『サモニングモンスター』の？」

「そう、そのサジッタ社」

「え、えー？」

頭の中に大量の疑問符が浮かぶ。考えてみれば、マシュマロと出会ってからは分からないことばかり聞かされている。今回もそうなのだろう、と思って、勇生はサジッタ社になんの用事があるのかと推測してみることにした。

サジッタ社は近年、急速に頭角を現してきた玩具メーカーだ。開発・製作だけでなく、アミューズメント施設の展開もしている。安価な子供向け玩具だけでなく、最新鋭のロボット技術を応用した大人向けの玩具なども作っていて、マニアからの評価もかなり高い。N市にはそのサジッタ社の大規模な工場兼研究施設があり、市の財政に貢献しているのだ。

そしてサジッタ社の『未来へ向かう矢』を表したロゴを一躍有名にしたのが、トレーディングカードゲーム『サモニングモンスター』

である。モンスターを召喚して戦わせるというモチーフのゲームで、小中学生を中心に世界中で爆発的なヒットを記録したのだ。今や、スポーツのように国際大会が行われ、サモナー（サモニングモンスターのプレイヤーは互いのことをこう呼び合う）ランキングも作られるほどの人気である。

「えー……と、そ、それで？」

世界有数のアミューズメント企業。それが勇生の認識であって、それ以上でもそれ以下でもない。そういうわけで、結局マシュマロに聞くことにした。

「サジッタ社にはお世話になってるの。……これとか、ね」

そう言って、マシュマロは胸のブローチを示して見せた。マシュマロが魔法少女の姿に『変身』するときに使う『魔法兵器』である。

「これ……って、もしかして」

マシュマロは驚いたり困ったりする勇生の様子をおもしろがるように、口元に笑みを作って頷いて見せた。

「そう。サジッタ社は魔術兵器を作る対奈落企業でもあるのよ」

十数分後。勇生とマシュマロは応接室へと通されていた。

「にしても、知らなかったな。サジッタ社が元々は魔術師連盟の錬金術師たちが作った工房で、それが資金稼ぎのために始めた事業が今の玩具メーカーの元になったなんて」

マシュマロはソファに浅く腰掛けて、くすくすと小さく肩を揺らしている。

「そりゃあそうよ。魔術師たちが隠していることだもの。それで、今は奈落と戦うための兵器を作って、わたしたちクエスターに使わせてくれている、ってわけ。こんな風にね」

そう言って、マシュマロはブローチからチャンバースタッフを取

り出した。今ではすっかり見慣れた気もするが、改めて見てみると複雑で奇妙な機械の塊である。
「科学と魔法の融合、かあ。マシュマロもそういう勉強をしたの？」
「もちろん。これでも錬金術師（アルケミスト）の称号だって持っているんだから。そもそも、科学も魔法も、根っこの部分は一緒なんだから。マナの発生させる現象がどうやって作用するかって違いしかないんだし、その接触点を用意してやれば、あとは望む現象を起こすために必要な環境と要素（エレメント）を用意しなきゃいけないけど……」
「わ、わかった、分かったってば。そ、それにしても遅いね、まだかな」
勇生はふと入り口に目を向ける。
「忙しい人だから……一応、アポは取ったんだけどなあ」

何かあったのかな、とマシュマロが心配げに眉を寄せる。そのとき、さっと扉が開かれた。
入ってきたのは女性だ。銀色の髪に白い肌。一見して日本人ではないと知れた。二十代だろう。若さに対する自信を誇示するように白衣の前は閉じられておらず、胸元が大きく開かれた服装だ。きりりと整った眉の下には、緑色の瞳。その瞳が、部屋の中の勇生に止まった。
「ごめんなさい、待たせてしまって。……その子が、話で言っていた伝宝勇生くん？」
「はい、エッシェンバッハ博士」

マシュマロが立ち上がって迎える。慌てて勇生もその場に立った。
「やめてよ、博士なんて柄じゃないわ」
マシュマロにエッシェンバッハ博士と呼ばれた女性がふっと穏やかな笑みを作る。大人の余裕を感じさせる表情だ。
「勇生、紹介するね。この人はアルミナ・エッシェンバッハさん。

サジッタ社の技術顧問で、このチャンバースタッフを開発したすごい人なのよ」
「アルミナさん。よろしくお願いします。そんなにすごい人だなんて……まだ、若いのに」

勇生が頭を下げる。アルミナはひょいと肩をすくめた。
「技術者は道具を作るだけ。実際に『すごいこと』をするのはあなたたちクエスターだわ」
そう言って、アルミナはぽんと手を叩いた。勇生たちに着席を勧めてから、自分もソファに腰掛ける。
「では、早速本題に入るわね。まず、サジッタ社は今回発生した奈落……『駆ける獣（ランニング・ビースト）』とでも呼びましょうか。その発生原因とみられる実験に技術協力したこともあるし、全面的に連盟の派遣したクエスター……つまり、マーシュさんと勇生くんに協力するわ」

マシュマロがどこかほっとした表情を浮かべる。
なるほど、と勇生は思った。『実験』とやらにサジッタ社が関わっていたのだ。そこで、今回の事件でマシュマロは魔術師連盟からの応援だけでなく、サジッタ社と協力して事に当たることになったのだろう。
「まず、マーシュさんが必要とするだけの魔法弾を提供するわ。その前に、マジカルブローチとチャンバースタッフの情報を提供してもらうけど……」
「もちろんです。奈落との戦闘データもありますから、有用なサンプルになると思います」

チャンバースタッフやブローチがサジッタ社によって作られたものなら、マシュマロは連盟の所属でありながら、サジッタ社とも深い関わりがあるのだろう。勇生はそれだけ考えて、自分にはあまり関係なさそうな二人の話を聞き流していた。

「正直な話、わたしたちだけでは少し手が足りません。『駆ける獣』を捕まえるのはかなり難しくて……」
マシュマロが言う。勇生は「それに、他のクエスターが邪魔しに来るし」と言いそうになったのをなんとかこらえた。
「そうじゃないかと思って、クエスターを一人、呼んでおいたわ。助っ人ってところね」
「本当ですか！？　よかった、どんな人なんです？」
勇生は大きく胸をなで下ろした。味方が増えるのは心強い。一緒に戦ってくれるクエスターならなおさらである。
「マーシュさんも知っている人よ。彼も乗り気で、すぐにこっちに向かうって」

アルミナはおもしろがるように目を細める。マシュマロの表情が引きつったのが、勇生の視界の端に見えた。
「それって、もしかして……な、なんで彼を？」
「あら、そんなにいやがる事はないじゃない。彼はあなた以上の白魔術の使い手だし、それに……極めて優秀な召喚術師よ」
アルミナは、それで話は終わり、と言うように手を地面と平行に振って見せる。

「召喚術？　本当にそんな魔術があるんだ。すごいじゃないか、マシュマロ」
「そ、そうね……」
引きつった表情のまま、マシュマロが答える。勇生はマシュマロの様子に首をかしげる。
「それじゃあ、データをチェックするから、マーシュさんは私と一緒に来てくれるかしら。勇生くんは、会議室を取ってあるからそっちに行って」

きびきびとした様子でアルミナが言う。人に指示を与えることに慣れた口調だ。かっこいいな、と勇生は素直に思った。
「す、すぐ終わると思うから。待っててね」
マシュマロが部屋を出て行く。マシュマロが苦手に思うような召喚術師とはどんな人だろう、と勇生は考えながら会議室に向かった。

○シーン４

会議室はなんということのない部屋だった。勇生はテレビドラマで見るような物々しい緊張感のある部屋を想像していたのだが、あっさりとした内装で、パイプ机と椅子があるだけの変わったところのない部屋だ。
「なんか、魔術だ奈落だってことに関わってる割に普通だなあ。こんなものなのかな」
１０分もすれば暇になってきて独り言も漏れる。マシュマロは「すぐ終わる」と言っていたが、もちろんそんなにすぐ終わるわけではないだろう。

「せっかくなんだから、暇つぶしに使える玩具くらい置いておいてくれればいいのに」
独り言が続く。あまり独りで居るのは不安だった。他の誰かと一緒に居るうちはいいが、昨晩の獣の姿が思い出される。

奈落。
対面するのは二度目だが、前回は地歩を……自分の大切な人を守るため、という思いが強かった。しかし、今は違う。もちろん、被害に遭うかも知れない街の人を守りたいという思いがないわけではない。しかし、自分が奈落の獣に立ち向かうことができるのは、むしろマシュマロのためという気がする。

蒼き星を救うために奈落に立ち向かっていく、強い使命感を持った少女。だからこそ、一緒に戦いたいと思うのだ。自分の危ないところを救ってくれたマシュマロに恩を返したいという気持ちもある。あるいは、彼女に良いところを見せたい、なんていう見栄かもしれない。

「だ……大丈夫だよね。マシュマロも居るんだし。それに、アルミナさんがクエスターを派遣してくれるって言ってたし」

一人で居ることに押しつぶされそうになる。すがるように、マシュマロと、そしてもう一人、『助っ人』のクエスターのことを考えようとする。

「どんな人だろう。召喚術師って言ってたけど、そもそも召喚術ってどういう……」

呟いたとき、不意に会議室の入り口が開かれた。

「待たせたな！」

自信に満ちた高い声。小さな姿が部屋の中に飛び込んできた。

最初に目に飛び込んできたのは、栗毛がかった淡い髪を押さえるゴーグルだ。というのも、入ってきた少年は勇生の肩ほどまでの身長しかなかったのだ。顔つきはくっきりしているが幼い。虎やライオンの子供を思わせるような、きりっとした目鼻立ちだ。赤と黄色の派手な柄のTシャツに膝までの長さのカーゴパンツ。総じて、活発な遊び盛りの小学生、という感じだ。

「ええと……」

突然の闖入者に、驚くよりも戸惑ってしまう。現れた少年の方も、きょろきょろと部屋の中を見回している。部屋の中に勇生しか居ないことを確かめると、胸を張って勇生の顔を見上げながら声をかけてきた。

「おい、ここで何をしてるんだ？」

自信満々、というよりは傲岸不遜と言った風である。さては、と勇生は思った。サジッタ社の工場施設にいるのだ、社員の息子と言うところだろう。しかもこの様子からすれば、親は管理職だか重役だかと言ったところに違いない。その子供が最新の玩具を見るために工場の見学、いや見物に来ているのだ。そう考えれば、この態度も納得できる気がする。

「人を待ってるんだよ。大事な話をしなきゃいけないし、ここには面白いものはないから、君は工場の方に行った方が……」

サジッタ社はマシュマロのスポンサーに近い関係だ。どんな形でも、波風を立てたくない。やんわりと少年を追い返そうと思ったのだが、彼は気に召さなかったらしい。きっと勇生をにらみつけてくる。

「バカにするな！　オレは世界レベルのサモナーだぞ！」

サモナー、ということはサモニングモンスターのプレイヤーだろう。世界ランカーと言うやつか。国際大会に出場するようなプレイヤーとなればかなりの腕だ。とはいえ、こっちは奈落との戦いを控えているのである。事の重大さが違う。

「そ、そうなんだ。すごいね。僕はここの社員じゃないから、案内はできないんだけど……」

「誰もこんなぼんくら丸出しのやつが社員だと思ってねーよ！」

「だっ、誰がぼんくら……！」

相手は子供とは言え、初対面でバカにされて黙っているわけにはいかない。勇生は驚かせるつもりで拳を振り上げた。

「やるかっ！？　そっちがそのつもりなら……！」

少年が腕を振り上げた。と、その手にポンと音を立てて百科事典のような分厚い本が現れる。その背表紙にひまわりを思わせるような、黄色い宝石が輝いている。

「シャード！？　まさか……」
「今更謝っても許してやんねーぞ！　召喚（サモン）！」

男の子は本に無造作に手を伸ばし、そこから何かを取り上げた。カードだ。勇生にも見覚えがある。『サモニングモンスター』の柄と同じものだ。彼がそのカードを掲げる。カードぐにゃりと歪んだかと思った瞬間、それは別のものに変わっていた。一メートルほどの竜。大きな頭を重たげに前に向けながら、勇生をにらみつけてくる。
「ち、ちょっと！　こ、これって……」
「本物の召喚術だよ、バーカ！　やれ、子竜の突撃！」

呪文じみた叫び。少年が指をびしっと突きつけ、子竜が身を沈めた。今にも勇生に飛びかからんばかりだ。
そのとき、開きっぱなしになっていた扉から、新しい人影が飛び込んできた。マシュマロだ。
「待って！　なんでいきなりケンカしてるのよっ！？」
「マシュマロ！」
「マーシュ！」

勇生と少年が同時に声を上げた。少年の顔には喜色が浮かび、子竜への命令も中断してマシュマロに向き直る。
「会いたかった！　オレの力が必要なら、サジッタを通さなくても直接言ってくれればいつでも駆けつけてやるのに……」
スキップするような軽い足取りで、少年がマシュマロに近づいていく。マシュマロは辟易した様子で、
「べ、別にわたしがレオくんを呼んだんじゃなくて、アルミナさんが勝手に……」
「寂しいこと言うなよ。本当はマーシュもオレに会いたかったんだ

ろ？」
勇生と子竜はぽかんとその様子を眺めている。
「あの、マシュマロ。もしかして、アルミナさんが言ってた助っ人って……」
マシュマロが太い眉のあたりを押さえながら答える。
「う、うん。……この子が、召喚術師で、クエスターの……」
「門真礼央（かどま・れお）だ」
少年が後を引き継いだ。胸を張って、勇生に向き直る。
「なんだ、アルミナが言ってた『別のクエスター』ってのがお前だったのか。ふん、せいぜいオレとマーシュの足を引っ張らないようにしてくれよ」
やれやれ、と肩をすくめながら礼央が言う。
勇生は、マシュマロが困惑していた理由が分かった気がした。

第2話「疾く駆ける獣」ーその3

○シーン5

二人から説明を受けた勇生は、こほん、と咳払いをしてから、
「つまり、礼央くんは『サモニングモンスター』を遊んでいる内にサジッタ社から才能を見いだされて、召喚術師としての修行を積んだ……ってこと？」
マシュマロが頷く。
「うん。実は、『サモニングモンスター』は、サジッタ社が魔術師として才能がある若い人材を見つけるためのプロジェクトなの。詳しい方法は企業秘密だからわたしも知らないけど、サジッタ社は礼央くんみたいな人材を見いだして、魔術師としてのトレーニングを積ませてるのよ」

テーブルの上に座っている礼央が、子竜を再び封じ込めたカードを本に戻して、足をぶらぶらと揺らしながら胸を反らしてみせる。
「ま、オレほどの才能がゲームだけで収まるわけがないってことだな！」
胸を張ってみせる姿は、いかにも幼い。
「で、マーシュとその他一人が追ってる奈落ってのは、どんなやつなんだ？」
礼央はひょいと机から飛び降り、勇生たちと向かい合う。かなり引っかかる言い方だが、勇生はスルーすることにした。
「『駆ける獣』って呼ぶことにしたんだけど、動物に取り憑いてるみたい。夜しか動けないみたいだし、ある程度行動は予測できるんだけど、動きが速いのがやっかいで。なんとかして結界の中に閉じ込めて戦いに持ち込みたいのよ」

「今夜こそ、この街の市街地に入ると思う。だから、被害が出る前にやつを捕まえて仕留めたいんだ」
二人の説明を聞き、礼央がふむと頷く。

「ようし、作戦を考えたぞ。見てろ、こいつがターゲットだ」
身につけたカードケースをごそごそと探ると、その中から『漆黒の魔獣』と書かれたサモニングモンスターのカードを取り出した。続けて、そのカードに向かう形で、美女のイラストが描かれた『ガール・マジシャン』のカードを置く。
「こいつが現れたら、まずマシュマロが派手な魔法で驚かせて追い込む。やつが逃げた先にオレが待ち構えて……」
テーブルの上に『天才召喚術師』と書かれたカードが置かれる。『ガール・マジシャン』に押された『漆黒の魔獣』が『天才召喚術師』の元に追いやられていく。
「こいつを結界に捕らえて、ぶちのめすってわけだ」

二枚のカードを『漆黒の魔獣』に重ねる。礼央は自慢げに背を逸らし、鼻を鳴らしてみせた。
「なるほど……追い込み猟のやり方だね。それなら、確かに獣に対して有効かも」
マシュマロが顎に手を当てて頷く。礼央はますます得意げに鼻を高くした。

「……えーと、僕は？」
勇生はひーふーみー、と机に置かれたカードの枚数を数えて、自分を表すカードがないことを確かめてから聞いてみた。礼央は面倒そうにカードケースを探りながら、
「マーシュの身を守ってろ。いないよりは居た方がマシかもしれないからな。マーシュの足を引っ張るなよ」
『見習い戦士』と書かれたカードを、ぺたりと『ガール・マジシ

ャン』の隣に置いた。にやりと笑って、勇生が怒るのを楽しんでいる様子である。

「ぐ……」

怒ったらますます調子に乗らせるだけだ。勇生は喉をうならせて、怒りを必死に押さえつける。

「あ、アルミナさんが推薦してくれるぐらいだから、きっと礼央くんなら間違いなく捕まえてくれると信じてるよ」

引きつり気味の笑みを作りながら言う。マシュマロははらはらした様子で声をかけようとするが、それよりも早く、礼央がばん、と机を叩いた。

「ま、作戦リーダーのオレが立てた作戦の通りにしてりゃあうまくいくって！　ほら、やつがまた出てくる前にさっさと出発するぞ！」

そう言って、準備運動のように腕を振り回しながら部屋を出て行く。

「いつの間にリーダーに。……騒がしい子だなあ」

ぼつりと勇生が漏らす。マシュマロは眉をハの字にしながら、

「ご、ごめんね。悪い子じゃないんだけど……」

「マシュマロが謝ることじゃないよ。……でも、大丈夫かな」

怒りを鎮めようと、頭を掻いて深呼吸。

「前に別の事件で一緒になったことがあるんだけど、その時になっかれちゃったみたいで。勇生をライバルみたいに思ってるのかな」

マシュマロは苦笑いだ。

「え。ら、ライバルって？」

思わず聞き返す。自分がマシュマロへの見栄で戦ってることを見抜かれていたのだろうか、と勇生の胸が跳ねる。

「礼央くんはクエスターとして目覚めたことをかなり特別に感じて

るみたいだから。同じクエスターでもオレの方が強いんだぞって見せつけたいんだと思う」
「あ……ああ、そういうことか」
ほうと胸をなで下ろす。
「そういうことって？」
きょとん、とマシュマロが顔をのぞき込んでくる。完全に墓穴を掘ったことに気づいて、勇生は慌てて首を振った。
「え、あ、い、いや……」

「おい、何してんだ！　早く行くぞ！」
礼央がばんとドアを叩く。思わぬ助け船に勇生は初めて感謝しながら、
「い、今行くよ！」
ドアに向けて歩き出した。
「……変なの」
マシュマロは小さく呟いてから、二人の後を追いかけた。

○シーン6

勇生とマシュマロは、『駆ける獣』の行動予測を元に、N市街地にほど近い場所へやってきた。昨日、獣と対峙した場所よりも、地図上では少し、実際の感覚ではかなり人気の多い場所へ近づいている。
『駆ける獣』の行動を予測するというのは、こういうことだ。マシュマロと魔術師連盟が奈落の放つマナを観測し、奈落の元になった実験動物の行動パターンに基づいて、次に奈落がどこに現れ、どう動くのかを予測するのだ。あの奈落が夜しか行動しないのも、元になった動物が夜行性であったことと無関係ではないだろう。
奈落は小規模な結界を身に纏って行動している。だから一般市民

にそうそう見つかることはないが、逆に言えば、もし獣に目を着けられれば彼らは襲われたことにすら気づかず、その命を終えるのだ。

「本当に、このあたりに？」

勇生が問う。マシュマロはこくんと頷いて見せた。

「発生位置を完全に特定することはできないけど、ここを通るのは間違いないと思う。ここでやつの進路を変えさせる事ができれば、礼央くんのいるところまで追い込めるわ」

礼央はここよりは街の入り口に近い場所で結界を作る準備をしている。派手な魔法を使うことのできるマシュマロが獣を驚かせて、礼央のいる場所まで追い込む。勇生は獣が驚いてマシュマロを襲わないよう、守るのが役目だ。

「なるほど」

不意に、第三の声が聞こえてきた。ぶつりと針のように刺さる鋭い女の声。

「ボクのために下調べを済ませてくれたというわけだ」

ショートの髪にピンが光る。少女が闇の中、ブレザーのネクタイを直しながら近づいてくる。

「あのときのガンスリンガー女！」

マシュマロが激昂した様子で叫ぶ。今にも飛びかからんばかりだ。勇生は彼女の前に手を掲げて制し、一歩前に出た。

「よくここが分かったね」

ガンスリンガー女、もとい神力充は懐とスカートの中から二挺の銃を抜いた。いつでも抜けるように普段から準備しているのだろうと思わせる、見事な手際だ。

「キミたちが調べられるような事は、ボクにだって調べられる。……連盟から枢機卿の所にタレコミがあったよ。連盟は今回の事件に

ついてかなり負い目があるみたいだからね、簡単に教えてくれたそうだよ」
充が立ち止まって答える。距離は二十メートルと言った所か。
「枢機卿って、FC社の事業部長のこと。彼女が言ってるのは、彼女の上司のことだと思う」
マシュマロがささやくように言う。勇生は小さく頷いた。

「前も言ったけど、同じクエスターじゃないか。一緒にやつと戦う……ってことは、できないのかい？」
「前も言ったけど、ノーだ。やつはボクの獲物だ。任務を下された以上、ボクが倒さなきゃいけない」
充の声と構えが鋭さを増す。無造作に右手を突き出し、半身になってもう一方の手にも銃を構えている。
「僕らだって、黙って見ているだけってわけにはいかない」

ちりちりと空気が熱気を帯びていくのを感じる。頭が痛くなりそうな緊張感。
「なら、どちらが上か分からせてあげるよ」
そのとき、充が右手に構えた拳銃にレーザー照準機が備えられているのに気づいた。マシュマロの頬に赤い光点が漂っている。

「僕が相手になる。彼女に手を出すな」
「勇生！」
勇生はさらに一歩踏み出した。袖を引こうとするマシュマロを振り払い、視線は充に向けたまま、
「君は奈落を追い込まなきゃいけないから。万が一でもけがされちゃ困る」
そう言って、右手にナイフを構える。
「なら、行くぞ」

それだけ言って、充は銃を構える。それと同時、風船を割るような乾いた音と共に、銃口が火を噴いた。
勇生はセキュアダガーの魔力を頼りに、横に飛んでかわそうとする。……が、直感がささやいてくる。放たれたたった一発の弾丸。それをかわすことはできない、と。
充のスカートがはためいている。わずかな輝きで、彼女の白い足がくっきりと照らされている。

「シャードの加護！？　そんな、クエスター同士で！」
マシュマロが悲鳴にも似た声を上げる。
勇生は銃弾が放たれ、自分の元にたどり着くまでの時間を、コマ送りのようにゆっくりと感じた。銃弾が回転しながら近づいてくる。マシュマロの前で、この弾丸を受けることはできない。見栄か、意地か、使命感か、それともシャードの囁きか。何者かが頭の奥でそう告げていた。

「あああああっ！」
気づけば、叫んでいた。蛇ににらまれたカエルのように動かなかった体を、シャードの光が包んで無理矢理に動かす。額の真ん中に向けられた赤い光点に向けてまっすぐ飛んでくる銃弾が突き刺さる直前、セキュアダガーを掴んだ右手を振り上げる。
金属同士がぶつかり合う硬い音。

弾丸をはじき飛ばした右手のしびれを感じながら、勇生は飛び出した。
「口で言って分からなきゃ……！」
全力で走る。しかし、距離が遠すぎる。勇生が殴りかかる前に、充が再び引き金を引くのは間違いなかった。

瞬間、周囲を暗い気配が包んだ。生理的に嫌悪を感じる獣のにお

い。どうと音を立てて、『駆ける獣』がその場に降り立った。
「っ！　炎よ！　槍となりて悪を焼き尽くせ！」
獣の動きを目で追うので精一杯の二人と違い、マシュマロの反応は素早かった。チャンバースタッフを胸の前で構え、振り上げる。杖の先に輝く水晶から、炎が獣の首に向かって長く伸びる。
ラジカセの音量を最大にしてノイズをならすような叫びを上げながら、毛皮を焼かれた獣がマシュマロに向き直る。炎が突き刺さった毛皮は、しゅうしゅうと煙を上げながら、爛れを塞いでいく。いや、それどころか盛り上がり、どろりとにじみ出るように触手がうごめき始めた。

「マシュマロ！」
我を取り戻し、勇生が手を伸ばす。むろん届くはずはない。代わりに、背中を向けた充に背中を蹴られた。地面にうつぶせに倒れ、なんとか手で頭を守る。その頭上を充の銃弾が通り過ぎていく。威嚇射撃だ。しかし弾丸は分厚い毛皮に阻まれ、マシュマロの魔法ほどの効果を上げることはできない。勇生は背で、充が歯がみするのを感じた。
獣は再び駆けだし、マシュマロに迫る。
「きゃあっ！？」
今度は、本物の悲鳴だ。マシュマロの体を、獣の首から伸びた触手が捕らえる。一瞬で両手足を絡み取られ、マシュマロは羽交い締めにされて獣の首に貼り付けられた。
そのまま、獣は風のように駆けだした。

「マシュマロ！　くそっ！」
勇生がその後を追いかける。ドン、と再び銃声が響いた。勇生は前方に転がりながらなんとかそれをかわす。
「これで分かっただろう。ボクの邪魔をするな」
充の鋭い視線が突き刺さるように感じられる。勇生は怒りにまか

せ、

「そんなことを言ってる場合か！　僕か、あの獣か、どっちでも好きに狙えばいいだろ！」

叫び、再び走り始める。もう撃たれても構うものか、そう思った。

「……ふん」

充は転びつつ走る勇生の背に小さく首を振る。何かを考える暇を、感じる時間を惜しんで、少女もまた走り出した。

○シーン7

礼央は市街地に背を向け、左手に装着した籠手のような装置の具合を確かめる。彼が学んだ召喚術は、形のない魔法に名と体を与え、カードの中に封じ込める技術だ。あるいはこの世界のどこかから、あるいは別の世界から、そうして力を与えた魔法をカードを介して呼び出すのである。左手の装置は、彼の望むカードをすぐに準備して魔法を発動させる魔法兵器だ。ちなみに、『サモニングモンスター』をプレイするためのキットとしても使える。

「さあ、来い。このオレが最強コンボでけちょんけちょんにやっつけてやる。そうすればマーシュも感謝してくれるし、アルミナに貸しを作れるし、良いことづくめだぜ」

礼央の口元ににやりと笑みが浮かぶ。上達した召喚術で獣を倒せば、マシュマロはどんな顔をするだろう？　わくわくと高鳴る胸を押さえきれない。

「……そろそろだな」

にやけた笑みを、さらに不適なものに変える。びゅう、と風のうなる気配がした。以前にも感じたことがある、奈落の気配だ。

「来たか。ドロー！」
右手を左手のキットに添える。キットは一瞬で、彼の望むカードをはき出した。そのカードを掲げ、名を叫ぶ。それだけで簡略化された儀式が効果を発揮するはずだ。奈落の後に追いついてくるマシュマロとその他一名を一緒に結界に取り込まねばならないため、そのタイミングをぎりぎりまで計る。

獣の姿が見えた。全身のバネを収縮させて地を蹴り、大きく跳ねながら、近づいてくる。
「まだだ、引きつけて……っ！？」
その獣の姿に、礼央は我が目を疑った。奈落の首元で触手がマシュマロを捕らえている。

「マーシュ！　……うわっ！」
叫んだ瞬間、気配に気づいた獣が口から衝撃波をはき出した。礼央の軽い体は簡単に吹き飛ばされる。手にしたカードはさらに遠くへ吹き飛んだ。
獣はその脇を通り過ぎ、市街地へと向かっていく。礼央は衝撃で頭をしたたかに打ち、立ち上がることもできない。

少しの間を空けて、勇生が追いついてきた。
「礼央くん！　やつは？」
見下ろしてくる勇生への怒りで無理矢理に体を起こした。
「くそ！　マーシュを守れって言っただろ！」

「ごめん。……後でいくらなじってくれてもいいから、今はマシュマロを助けることを考えないと」
「誰のせいで……！」
ぎり、と礼央が歯を鳴らして拳を振り上げる。

「今度は仲間割れか。忙しいね」
追いついた充が脇を通り過ぎながら言う。二人が反応する間もなく、
「ボクはやつを追わせてもらう。今度こそ、邪魔をするな」
そう言って、獣の走っていった方向へ向かっていく。

「なんだ、今の？」
礼央が怒りも忘れて、きょとんとした様子で言う。勇生は首を振り、
「後で説明するよ。行こう」
そう言って、走り出す。
「お前ら、オレが子供だからって舐めるなよ！」
礼央はなんとなく置き去りにされている気がして、腹の底の怒りは後で勇生にぶちまけてやると誓ったのだった。

第2話「疾く駆ける獣」ーその4

○シーン8

獣がビルの間を駆け、あるいは飛び越え、あるいは壁を蹴る。およそ自然の生き物とは思えない動きで、月明かりの下の街を進んでいく。住宅街や繁華街からは離れている。人気が多くはないが、ないわけではない。

神力充は、両手に銃を構えたまま獣を追っていた。下半身でいくら速く走っても、上半身をぶらさずに狙いをつけられる。あるいは、そのぶれを計算に入れて撃つことができる。幼いときに引き取られてから、組織にたたき込まれた体の動かし方。

戦士として、狩人として、学んだことはいくらでもあった。気配の読み方。考えるのではなく、感覚で次にどう動くべきかを判断する術。恐怖を押し殺す方法。戦いながら、わずかな時間で敵を知るということ。

それらすべてを使って、充は獣を追い詰めていた。獣が次にどう動くか、予測は徐々に正確になっていく。人間の多い方に向かおうとするたび、その鼻先に銃弾を放って獣の方向を変える。

獣の首もとに張り付いた、セーラー服を着た少女。なぜ奈落が彼女を捕まえたのかの想像はつく。奈落にとって、クエスターは最大の敵であると同時に、大量のマナを含んだ好物でもあるのだ。クエスターを、シャードを取り込むことができれば、奈落の力は何倍にもなる。

「面倒な……。だからボクの邪魔をするなと言ったのに」

再び撃つ。こんな状況でも、少女に弾丸を当てない自信はあった。右手の自動式拳銃に備えられたレーザーサイトが、暗闇の中でも敵の姿を追ってくれる。本命は左手の軽機関銃だ。極端に重心が後ろ

に寄った銃は、取り回しは難しいが慣れれば頼れる武器である。指と掌、上腕を使って構え、肘で支える。

再び獣の鼻先を狙って引き金を引く。獣が銃弾に驚いて方向を転換するたび、距離は徐々に近づいていく。獣がビルを蹴り、角を急角度で曲がった。充も後を追う。

「……っ！」

獣の向かう先に人影が見えた。街灯の明かりに照らされた姿は、残業でもしていたサラリーマンだろうか？　結界を纏った獣の姿には気づいていない。充は歯がみする間も惜しんで、シャードに語りかけた。

「報復を！」

シャードから大量のマナが流れ込んでくるのを感じた。体に染みついた感覚。神経物質の伝達が数倍の速度に達し、周りの時間がゆっくりに感じられる。ひとつ呼吸をするよりも短い時間の間に、銃のマガジンを落とし、代わりに腰に巻いたベルトに指を引っかけ、そこに備えられていたマガジンをピストルに装填する。わざわざ狙って構えるなんてことはしない。体が覚えているとおりに、獣の巨体に向けて引き金を引いた。

弾丸が銃口から飛び出す瞬間を最後に、バレット・タイムが終わりを告げる。その弾丸を目で追うことはできなかったが、一瞬で巨体に突き刺さったのは分かった。通常の弾丸よりもずっと硬度が高く、重たい弾丸が獣の体を叩く。充の殺意がマナに変わって、その威力を数倍にも高めている。弾丸は獣の体を吹き飛ばした。

激しい衝撃が突然頭上で生まれて、サラリーマンが尻餅をつく。通常の物理法則ではあり得ない現象を理解しようとするのを諦め、失神したようだ。その背で、獣の巨体がビルに激突した。窓ガラスがいくつも割れ、コンクリートにひびが入る。

無口な狩人の口元に小さく、嗜虐的な笑みが浮かんだ。充は両手の銃を構え、勢いよく駆ける。サラリーマンの横を通り過ぎる。多少の被害には構っていられない。ビルが砕けようが、一般人に姿を見られようが、奈落を逃すよりはずっといい。

獣の頭部を確実に狙える位置まで寄ってから、銃を突き出す。引き金を引こうとした瞬間、獣が吠えた。全身から黒い気配が立ち上り、その姿が一瞬にしてかき消える。

「何っ！？」

逃げたか、と充が思った瞬間、巨体が少女の背後に現れた。一瞬の移動。間髪入れず、獣は充の背を爪でえぐった。

「がっ……！？」

自分の掌ほどもある爪が体に食い込み、引き裂いていく感覚。大量の血があふれるのを、シャードのマナがなんとか補充していく。

「いやあっ！？　こいつ……やめなさい！」

背後から少女の声が聞こえる。膨大なマナの放出で目を覚ましたのか。そんな分析にも今や意味が無かった。とどめが来る。そう直感していた。

「そこまでだ！」

声と、甲高い音。風を切り裂いて、ナイフが飛来する。そのナイフが毛皮に突き刺さる直前、獣は充の背から飛び退いてビルに跨がる。

「勇生！　礼央くん！」

少女の声が聞こえる。二人の少年が駆けつけていた。

「マーシュ！　今助けるからな！　ドロー！」

別の少年の声。しかし獣は身を翻し、月に向かって飛び上がった。

「逃がすもんか！」

「待て！」
少年たちが駆けだそうとするのへ、充が声をかける。
「なんだよ、まだ自分の獲物だなんて言うつもり！？」
年長の少年……勇生が苛立った様子で言う。充はシャードの力でなんとか力を取り戻した体を起こしながら、首を振った。
「違う。……周りを見ろ」
彼らの立つ道の上に、闇よりもさらに濃い影が生まれていた。それは墨で絵を描くように徐々に形を作り始め、やがて獣の姿を取る。奈落の本体である獣の、ミニチュア版といった様相だ。
「こいつらにオレたちの相手をさせるつもりか」
もう一人の少年、礼央がデッキから抜いたカードを構えたまま、呟く。額には汗が浮かんでいた。
「話は後。まずはこいつらを……片付ける」
充が言う。振り返る勇生の表情に、真意を探るような、怪訝な色が混じる。
狩人の少女は、表情を変えないままでも痛感していた。一人では勝てない、と。

○シーン9

勇生は、投擲したセキュアダガーを構え直し、左手に『剣の騎士』を握りながら獣たちに向き直る。漆黒の毛皮をもった獣たちはうなりを上げながらじりじりとにじりよってくる。
「行け！　お前が食い止めろ！　オレの召喚術で倒してやる！」
背中から礼央が声をかける。
「そんな乱暴な作戦……」
「それが一番有効だろ！　早くしろ！」

言い返そうとする勇生の言葉を遮って、礼央が苛立たしげに言う。勇生はもう一度何かを言い返そうとするが、まず言い争っている場合じゃないな、と思い、次に礼央の言うこともっともだ、と思った。

礼央は魔術師だ。シャードから与えられる力が、魔術を使いこなすための力や、精神力として発現している。それに比べて、勇生はどちらかというと、体力や器用さや俊敏さといった方向にシャードが力を与えてくれているらしい。なら、自ずと役割は決まってくる。自分が前に出て、獣たちを引きつけるのだ。

その場にはもちろん充もいるが、先ほど『駆ける獣』によって深手を追っている。

「ああ！」

短く、それだけを答える。右手にセキュアダガー、左手に剣の騎士を構えて獣の群れの中へ。威嚇するようにうなりをあげる獣の一匹に狙いを定め、両腕の剣を振り下ろす。

ドッ、と鈍い感触と共に、獣の体に剣が食い込む。絶叫を上げる獣が、血の代わりに奈落の煙を噴き上げる。

「そのまま、引きつけていろ！」

礼央が言う。ちらと後ろを振り返れば、掲げたカードから黒みがかった紫色の、羽の生えた何かを呼び出している。その生物らしき何かは礼央の周りを飛び回り、魔術的な記号を描いている。

「任せて！」

礼央の口元には、不敵な笑みが浮かんでいた。直感的に分かる。礼央にとって、自分はデッキの中のカードと同じ、勝つための手段の一部なのだ。悪い気はしなかった。『見習い戦士』なんて扱いでも、役に立たないよりはずっとマシだ。

獣たちが怒り狂ったうなり声を上げながら、次々に飛びかかってくる。腕に脚に腰に、食いついてくる獣たち。セキュアダガーを振り回して、あるいはその鼻先を叩いて潰し、あるいは身をすくめてかわす。もちろんすべてをかわしきるというわけには行かないが、充のような深手は負っていない。

「よっしゃあ！　必殺コンボ、行くぞ！」

礼央が叫ぶ。キットから引き抜いたカードを三枚、右手にぱっと広げる。まっすぐに上に向けて構えた。謎の生物が、なんとも字にしがたい哄笑を上げる。

「召喚！　子竜の突撃・陣形！」

掲げたカードから、異界への門が開かれる。門からは、会議室で現れたのと同じ子竜が三体、現れた。

勇生が剣王から武器を借りるときと同じ感覚だ。勇生自身は、『剣の騎士』を呼び出すたびに、かなりの疲労を感じる。それを、カードを介してとはいえいくつも同時に行ってみせているのだ。世界レベルの召喚術師、という言葉もあながち舐められたものではない。

子竜は白い蒸気を鼻から噴き出しながら、獣の群れの中に突っ込んでいく。分厚い鱗に覆われた子竜の頭が、獣たちを次々に吹き飛ばしていく。

「すごい、これが召喚術……」

子竜たちは嘶くように声を上げると、ぶるっと身を震わせて異界へと帰って行った。獣たちの三分の一ほどが、形のない奈落へ分解され、やがて溶けていく。しかし、勇生が先に傷をつけて動きを鈍らせた連中以外は、まだ動けるようだ。

「くそ、マーシュみたいにゃいかないか！」

「礼央くん、もう一撃だ！　僕が引きつけておくから……」

「当たり前だ！　オレに指図すんな！」

礼央はカードを片手に広げながら、次の作戦を練り始める。が、
「その必要はない」
鋭い声。充だ。両手に構えた銃を、ゆっくりと前に向ける。
「お、おい。まだあいつが……」
「問題ない。標的を選ぶくらいはできる」
背後から殺気。それでも、勇生はその殺気が自分に向けられているのではない、と分かった。
「右、二歩、避けて」
充の指示。返事もせず、勇生は右に体を投げ出した。
いくつもの銃弾が、殺気とともに空間を叩く。軽機関銃の斉射で、獣の群れは一匹残らず消え去った。
「よっしゃあ！」
礼央が拳を振り上げた。

静かになった路地。勇生は失神したサラリーマンの様子を確かめる。とりあえず、命に別状はないし、外傷もなさそうだ。礼央が、
「サジッタに言っておけばなんとかしてくれるぜ」
と言うので、サジッタ社に連絡して、後を任せることにした。どういう風に「なんとか」するのかは分からないが、今はあまり時間を使っていられない。
「これで分かっただろう、きみ一人じゃ、やつを倒せない」
振り向いて、街灯にもたれかかった充に言う。
「……くっ」
充は唇を噛みながらうなった。
「なるほどな、こいつがマーシュたちの邪魔をして、それで作戦がうまくいかなかったってわけだ」

礼央が腰に手を当てて、やれやれと肩をすくめる。

「礼央くん。きっと彼女にも何か事情があって……」

「知るかよ。事情があろうがなかろうが、結局奈落を取り逃がしてるんだ」

「礼央くん！」

勇生は礼央をとがめようとするが、充がゆっくりと首を振った。

「その子供の言うとおりだ。ボクはやつを独りで倒せると思っていた。だが、できなかった。……フン、とんだ無能だよ」

「どうして、そんなにそんな風に奈落を倒すことにこだわるんだい？　しかも、独りでなんて」

勇生の問いかけに、充は目を伏せる。

「……ボクは、ＦＣ社に拾われたんだ。身よりはなかった。組織では、子供の頃から訓練をたたき込まれた。奈落を葬るための訓練を。……そうする以外に、ボクが彼らに必要とされる術はなかったんだ」

ぽつぽつと充が声を漏らす。

「組織は、ボクを奈落狩人として育てた。ボクの人生はそのためにある。ボクが奈落を倒せなければ、ボクの人生も、組織のやってきたことも無駄になってしまう……」

充の声は震えている。ぎゅ、と彼女は目をつぶった。

「だから、ボクは奈落を倒せることを証明し続けなきゃならないんだ。キミたちとは違う。奈落を倒せなきゃ、ボクがいる意味なんてないんだ！」

声を荒げる。自分で上げた声に驚くように、充は再び視線を伏せた。

「……違うのかも知れない。僕は、そりゃあ、きみみたいに強い使命を持って戦ってるわけじゃない。でも、やつを倒したいと思って

る」
　勇生は街灯の明かりで照らされた充の顔を見つめる。白い肌が光に濡らされているように見えた。
「なぜ？」
　充が小さく問い返す。
「マーシュが攫われてるんだぞ！」
　礼央が叫んだ。かっと目元を赤くしている。
「そうさ。このままあの奈落を放っておいて、マシュマロを失いたくない。……それに、きみだって。独りで戦って、そんな風に傷つく所を見たくないんだ」
　充ははっとしたように顔を上げた。
「ボクを？　なぜ……別に、知り合いでもなんでもないじゃないか」
　言われて、勇生はふと頭を掻いた。
「……なんでだろう？」
「オレが知るかよ」
　礼央がじと、と目を細めている。
「同じクエスターだし、名前も聞いちゃったしさ。あー……昨日知り合ったばかりだけど、無関係ってほどじゃないんじゃないかな？」
　頭を掻きながら続ける。……ふいに、充の鼻から息が漏れるような微笑がこぼれた。
「ふっ……ふふふ。それだけで？」
　おかしくて仕方ない、という様子で充は肩を震わせている。鋭い目元が細められ、真っ白な頬にリンゴのような赤みが差し始める。
「理由ならもう一つあるぜ。おい、動くなよ。お前もだ」
　礼央がカードを二枚、掲げる。
「召喚。癒しの手よ！」

カードから白い光がふわりと現れ、勇生と充の体を撫でる。二人の体に刻まれた傷を、光が塞いでいく。礼央は相変わらずの不適な笑みのまま、

「今、あの野郎をぶちのめすコンボを思いついた。カードが四枚必要だ。『シャードに選ばれた戦士』ってカードがな」

いつものように、少しでも背を高く見せようとするように胸を張りながら言ってみせる。

「とりあえず、三枚はここにある。もう一枚、取り返すことができれば完璧だ」

虚勢を張ってみせる様子に、勇生の頬にも笑みが浮かんだ。

「よし、それで行こう！　神力さんなら、やつの素早い動きにも対抗できる。……どうかな？」

勇生は充に向かい、片手を差し出した。充の瞳に、一瞬で力が戻ってくるのが分かる。

「ああ。……次こそ、確実に仕留める」

そう言って、彼女は勇生の手を取った。

第2話「疾く駆ける獣」―その5

○シーン10

漆黒の毛皮を持つ獣が、ビルの屋上にゆっくりと降り立つ。眼下には人間の街。何人もの人間が、うごめいているのを感じる。

餌の群れ。獣は腹が減っていた。

人間を喰いたい。極めて原始的なその思いが、獣を満たしていた。満腹感を得られることなど永遠にないだろう、と本能的に分かっている。それでも、喰わずにはいられない。もっともっと、大量の餌を喰って強くなりたい。いつか、この世界ごと喰らい尽くせば、満腹を感じられるだろうか？

が、今は足下の人間などどうでもよかった。その気になればいつでも喰うことができる。獣はそんなものよりずっと大きなごちそうを手に入れていた。

首元で獲物を捕らえていた触手がぐずぐずと崩れる。どさりと小さな体が屋上に落ちる。セーラー服……なんて言葉を、獣が知っているはずもないが、それを着た少女。ほっそりした体を、月光が照らしている。まるで調味料に浸されているかのようだ。

唾液がこぼれる。圧倒的な量のマナ！　この人間と、そしてシャードを喰らえばどれほどの空腹が満たされるだろう。

獣はもちろん、シャードやクエスターなんて言葉を知っているわけではなかった。いや、それどころか言葉なんて概念を理解してはいなかった。が、脳神経の中枢まで奈落によって侵された今は、この少女が敵であると同時に、もっとも美味なものであることを知っていた。

「っ……！　きゃっ！？」
少女が目を覚ました。恐怖と怒りの表情が広がっていく。
「わ……わたしを食べるつもり？　そんなこと、絶対にさせないんだから！」
少女が胸元のブローチに手を当てる。かっとブローチから赤い光がこぼれる。獣は、この少女と二度対面していた。だから、それが危険なものであると知っていたし、直感で理解していた。

口を開き、衝撃波を放つ。衝撃波は少女の体を吹き飛ばし、屋上の柵に押しつけた。さらに吐きかけた衝撃波が、セーラー服をびりびりに破いていく。ブローチはわずかな布と共に、あらぬ方向へ吹き飛ばされた。
「しまった！　マジカルブローチが！」
少女の表情に、焦燥が加味される。ああ、と獣は思った。ああ、なんて美味そうなのだろう。早く喰らいつきたい。あの白い肌に牙を突き立てたら、どんな表情をするだろう。華奢な骨をかみ砕いたら、どんな声を上げるだろう。

「くっ……！　ほ、炎よ！」
少女が叫び、片手で胸元を隠しながら片手を突き出す。ごうと音を立てて放たれる炎。しかし、以前に受けた炎に比べれば、ごく小さなものだ。毛皮を焼くことすらできない。
獣は叫んだ。背筋を反らし、甲高い遠吠えを上げた。星々に、月に、告げるように。それは罵倒だった。クエスターを生み出しておきながら、自分の悪行を止められないこの世界への。すべてに対する侮辱だった。

ずぶずぶと獣の足下から奈落が広がっていく。ごくわずかな下着だけの姿になった少女へ、奈落が這い上がっていく。両足を黒い触

手が絡み取り、ずるずると引き寄せていく。
「いやっ！　奈落に……こんな！？」
少女が必死に逃れようともがく。が、虫かごの中で暴れるようなものだ。意味が無い。

「誰があんたなんかに！　こうなったら！」
少女が再び魔力を集める。無駄なあがきを、と思った。しかし、様子がおかしい。広げた掌を自分の胸に向けている。自殺する気だ、と獣は悟った。触手を伸ばし、その腕を捕らえる。両腕を真上に吊り上げた。
「っ……！　そんな、やだ、奈落に……食べられるなんて、いや！」
目尻から大粒の涙をこぼしながら、甲高い悲鳴を上げる。獣は愉快でたまらなかった。ずるりと近づき、大きな口を開いてその涙を舐める。舌が痺れるほどの甘露だった。

「いやあっ！　助けて！」
瞬間。獣はどんと低い音を聞いた。
自分の頭蓋骨に、硬い弾丸が突き刺さる音だった。

○シーン１１

激しい衝撃で、獣の体が弾かれる。どうと思い音を立てて獣が屋上に倒れ込む。
「銃撃……？」
屋上から生えた触手につり下げられたマシュマロが、首を振る。屋上の戸を開き、充がまっすぐに拳銃を構えている。銃口からは硝煙がたなびいていた。
「運命の予感とやらもバカにしたものじゃないな。なんとか、間に

合ったみたいだ」
充が弾倉を交換しながら、低く呟く。口元には小さく笑みが浮かんでいる。
「なんでもかんでも分かるってわけじゃないんだけどね。でも、地球だって、小練さんが襲われるのを見てるだけじゃないってことさ」

その背を押すように勇生が飛び出す。さらに小柄な影が現れた。
「のんびりしてる場合か！　召喚、封じられし聖域！」
礼央がカードを掲げて叫ぶ。ごうと空間が渦巻いて、地球という世界から隔離されていく。結界だ。
「勇生！　礼央くん！　それに……」
「充だ。神力充」
充が首もとのネクタイを緩めながら答える。

「助けて！　こいつ、私のシャードを食べて強くなるつもりよ！」
マシュマロが叫ぶ。三人ははっと気づいた。屋上の隅、マシュマロから離れた場所に、赤いシャードの着いたブローチが転がっている。
「マシュマロとシャードをやつから守るんだ。行くよ！」
「お前が命令するなっ！」
勇生の言葉に、礼央が叫ぶ。充は小さく頷いた。

獣が、ゆっくりと体を起こす。怒りからだろう、低く喉を鳴らしている。勇生は肉食獣への恐怖を必死に押し殺しながら、『剣の騎士』を呼び出し、両腕に武器を構える。
奈落が身を沈める。視線の先には、マシュマロのシャード。
「やっぱり、速いっ！」
勇生も駆け寄ろうとするが、追いつきそうにない。
「誰がさせるか！　召喚、鉄鎖の縛め！」

礼央がカードを掲げる。異界から呼び出されたマナは、鎖となって獣の脚に巻き付いていく。獣は一瞬、動きを鈍らせる。が、それでも鎖を引きずりながら、シャードに向かっていく。
「くっ……足りないか！？」
「いや、充分さ」
充が小さく言う。その声に重なって、ばさ、と布がひるがえった。
「え……うわっ！？」
充は、着ていた制服を脱ぎ捨てていた。実用性一点張り、といった様子のスポーツブラ。勇生が何か言うよりも速く、充は駆けだしていく。わずかだが、今までよりも速い。
どさりと重い音を立ててブレザーが床に落ちる。その音を聞いて、勇生は昼休みにマシュマロが言っていたことを思い出した。この制服は充の身を守るためのものだが、代わりに動きを鈍らせているのだ。
充は猫のようにしなやかに走り、獣よりも速くシャードに辿り着いた。迫ってくる獣に向けて銃弾を浴びせてから、
「勇生！」
叫び、マシュマロのブローチを投げる。
「え……あ、あ、うん！」
礼央と一緒になって、下着姿の充を視線で追っていた勇生は、慌ててブローチを受け取った。うまくキャッチできず、お手玉しながらマシュマロに駆け寄っていく。
「マシュマロ、今助ける！」
マシュマロは触手につり下げられたまま、涙の跡の残る顔でぐっと頷く。
左手に剣の騎士。勇生は自分のシャードに意識を向けた。世界を守れ、という囁きが頭の中に響いてくる。

「奈落は倒すさ！　だから、マシュマロを助けるのに協力してくれ！」
かっと青い光があふれる。全身が熱く輝いた。
一閃。
『剣の騎士』が白刃を閃かせ、分厚い触手をいとも簡単に断ち切った。解放されるマシュマロの体を、右手で受け止める。
「よかった……助けに来てくれたんだ。勇生も、礼央くんも、充さんも」
マシュマロが青い瞳に涙をにじませながら言う。
「おい！　あんまりマシュマロの体にべたべた触るな！」
後ろから礼央が叫ぶ。首があさっての方向を向いているのは、マシュマロから目を逸らしているのかも知れない。見れば、マシュマロは上下共にぼろぼろの下着姿だ。勇生は顔を赤くして、その胸元にブローチをさしだした。
「マジカルチェンジ！」
マシュマロが力ある言葉を叫ぶ。赤白の服が体を包み、頭に帽子が被さる。
「言っとくけど、お前に見せ場を譲ったわけじゃないからな！」
礼央が勇生を指さしながら言う。
「分かってる。一番有効なコンボを実践してくれたんでしょ？」
マシュマロが礼央に向け、目をつぶってみせる。
「ま……まあな！　オレの作戦どおりだ！」
礼央は腰に手を当てて空笑いだ。
「のんびりしている場合じゃない、見ろ！」
充が飛び退き、両手で構えた銃を獣に向ける。

獣は、怒りの咆吼を上げながらクエスターたちをにらみつけていた。断ち切られた触手がうごめき、別の形を作り出していく。先ほどと同じ、獣の眷属を作り上げていく。
「やつも、ここで決着をつけるつもりだ」
言う充に、勇生は困ったように目を伏せた。
「そ、それはいいんだけど、そのままだとこっちも集中できないっていうか……」
ぽそりと呟く。どうしても、充の胸元に視線が吸い寄せられてしまう。

「どこ見てんのよっ！」
がつ、とチャンバースタッフの柄でマシュマロがつつく。勇生は背を押さえながら、
「し、仕方ないだろ！」
「やれやれ……」
肩をすくめて、礼央がブレザーを拾って充に差し出した。
「ほら、早く着ろ。それにしても、結構でかいんだな」
訓練の成果だろう、充は引き絞られた弓のような印象の体つきだ。それに反して、胸元は女性らしい膨らみがある。マシュマロよりも……などと思うのを、ぐっと勇生は考えないように抑えこんだ。

「別に、大きくしようとしたわけじゃない。邪魔なときもあるぐらいさ」
充は淡々と答えながら、ブレザーに再び袖を通す。
「うぐ……」
マシュマロが小さくうなる。勇生はそれを聞かなかったことにして、

「と、とにかく、行くよ！　やつを倒すんだ！」
叫んだ。『駆ける獣』は十体以上の眷属を生みだしている。

「だから、お前が指図するなっ！」
礼央が言う。その後ろで、マシュマロと充が一瞬だけ視線を合わせ……互いに、小さく笑みを見せた。

第2話「疾く駆ける獣」―その6

○シーン12

「剣の騎士よ！」

掲げた左腕に、再び剣が現れる。すっかり慣れた感触。その隣では、礼央が羽の生えた生物を呼び出していた。どうやら、その「小悪魔」は召喚術のサポートを行っているらしい。

最初に動いたのは、『駆ける獣』だった。猛烈な吠え声とともに衝撃波をはき出す。結界の底面にぶつかった衝撃波が逆巻く嵐となってクエスターたちを取り囲む。

かわすすべはなかった。四方八方から流れ込んでくる風があらゆる退路を絶つ。やがて、一人また一人と風に足をすくわれて体勢を崩されていく。

低く振動するような音。獣の全身から奈落があふれ出し、衝撃波は物理的な風にくわえ、生命そのものを奪い去ろうとするような、激しい殺意の塊となって吹き荒れる。

「うっ……あぁぁあ！」

誰があげたものかも判然としない悲鳴。四人の体が風に巻き上げられ、ばらばらに吹き飛ばされる。手足が引きちぎられるような痛みが意識を奪う。ビルをもうひとつ重ねたほどの高さまで持ち上げたかと思うと、今度は下に風が吹く。何倍もの体重になったかのように、床を砕きながら落下した。

全身の骨が悲鳴を上げる。確実な死の感触。それでも、シャードから生命力が流れ込んでくる。世界から切り離された空間に四つの光が宿り、クエスター達が立ち上がる。

「限界突破（ブレイク）……っ。一撃でここまで追い込まれるなんて」

マシュマロが額に汗を浮かべながら唸る。

ブレイク。クエスターの生命の危機に反応して、シャードが過剰なマナを供給してトランス状態に追い込む現象だ。人間の身であるクエスターに、神の不死性をわずかながら与えるシャードの力である。

「奴だって、奈落の神の力を引き出しているんだ。そう何度もこんな技を使えるわけじゃない」

充が言い、ふっと息を吐く。乱れた呼吸をその一息で整え、両腕をまっすぐ前に突き出す。

「ボクが奴らを散らす」

必要なだけの言葉を告げる。……ぐ、っとわずかな間を空けて、

「手伝ってくれ」

と、付け足した。答えを待たず、蠢く獣たちが迫ってくる中心へ、二本の銃身を向ける。

「任せて！」

マシュマロが笑みと共に答えた。チャンバースタッフを掲げて、祈りをささげるように力ある言葉を紡ぐ。

「我がシャードよ、かの武器へ力を！　純粋なる死を与えん！」

機関銃の銃口へ、複雑にくみ上げられた魔方陣が纏わりつく。なぎ払うような機関銃の斉射。マシュマロの作り出した印が銃弾の一つ一つに刻まれ、目もくらまんばかりの輝きを放っていた。

銃弾が獣達の身体へ突き刺さる。肉体を破壊するというよりは、存在そのものを打ち砕くような弾丸の雨。穴だらけになった獣の体が、どろりと崩れ落ちたかと思うと、吹き飛ぶように消えた。

「たいした魔力だね。段違いの威力だ」

「弾丸が当たってなきゃ、倒せやしないわ。百発百中、ね」

マシュマロが片目をつぶる。充は前を向いたまま、うなずいて答えた。

「まだ気を抜かないで！　奴が！」

勇生が指を突き出す。その指の示す先で獣が怒りの咆哮をあげて、轟々と衝撃波を吐き出した。

「させないっ！」

マシュマロが否定の言葉を紡ぐ。周囲のマナを一瞬でより集めて網を作り出す。びしりと獣の口を網が締め上げ、閉じさせようとする。獣の体が大きく震える。吐き出そうとした衝撃波が、体の中で出口を求めて暴れまわっているのだ。

「そうか！　口を閉じさせれば衝撃波も使えないし、力を大きく削ぐことができるはず！」

そのとき、ごぼりと音を立てて獣の肩が裂けた。裂け目が徐々に盛り上がり、その内側にはびしりと白い棘のようなものが生えそろっていた。封じられた口の変わりに、新たなあぎとを作り出したのだ。

「往生際の悪い！　いくらでも作ってみやがれ！」

礼央が手に持ったカードを掲げる。ばさりと広がったそれは、マシュマロの作り出したたのと同じ光の網に変わり、獣の体中へ向かっていく。獣のもう一方の肩に、腹に、背に、腿に、新たなあぎとが作られるたびにそれを封じていく。

「すごい……！」

「ぼさっと見てるんじゃねえ！　早く行け！」

周囲にカードをいくつもばら撒きながら、礼央が叫ぶ。勇生は背を押されるような気持ちで、駆け出した。

「せやあっ！」

両手の武器を構えて、獣の眼前まで駆け寄る。二つの剣をあわせて、獣の首に向けて振り下ろす。そのとき、ばちんと音を立てて獣の身体を覆ってた光の網がはじけた。轟と奈落の気配が噴き上がり、勇生の身体を押し返す。

「うっ……あ！？」

攻撃のために振り上げた腕を胸元に引き寄せ、吹き飛ばされないように体勢を支える。獣の体が内側から膨張し、棘のついた風船のよう張り詰める。棘は、せり出したあぎとだ。いまや、獣の全身に口が裂け、毛皮の変わりに無数の牙が表面を覆っていた。

「なっ……！？　これは！？」

「たぶん、わたしたちがシャードの力でブレイクするのと同じ。あの獣の食欲を媒介に奈落の力が暴走してるのよ！」

マシュマロが言う。

「ひるまないで！　追い詰めているはずよ！」

叫び、魔術師の少女は杖を振り上げて炎の槍を放つ。硬い牙が、がちりと炎をくわえ込む。その口は炭化するが、獣は牙の生えそろった足で床を噛んでマシュマロをにらみつけた。

「おい、お前ら！　ちゃんと俺とマーシュを守れ！　召喚、長き手の刀鍛冶！」

礼央のカードから力強い腕が現れ、勇生のセキュアダガーと充の機関銃に触れる。マナが武器を包み込み、武器としての力を引き出していく。

「ああ、分かってる！　もう一ラウンドでこいつを倒す！」

勇生は『剣の騎士』を呼び直し、獣に向き直る。とは言うものの、後ろの仲間達に獣が近づかないように、けん制するので精一杯だ。

「くそ、こいつ……！」

礼央がカードから鎖を召喚し、獣を縛ろうとする。しかし、無数

の牙が今度は鎖を噛み砕き、大した効果をあげられない。
獣の体がさらに変貌を遂げていく。体すべてを、ひとつの巨大なあぎとに変えて勇生の身体に食らいつく。
「う……ぐ、ううあっ！？」
無数の牙が、骨の一つ一つを砕くように身体に食い込んでくる。シャードから供給されるマナも追いつかない。全身がばらばらになりそうになる。
「勇生！」
「ちっ、仕方ねえやつだ！」
悲鳴を上げるマシュマロの横で、礼央が一枚のカードを取り出す。『見習い戦士』だ。

「とっておきのコンボだぜ。ありがたく思え……よっ！」
見習い戦士のカードに大量のマナが流れ込む。かっと黄色い光に包まれ、そのカードから精悍な戦士の姿が浮かび上がった。
「召喚、英雄の帰還！」
輝く戦士が勇生の身体に重なる。勇生は、痛みが消し飛び、体の奥から燃え上がるような熱い生命力が溢れてくるのを感じた。

「おおおおおああああ！」
全身の血液が沸騰するような熱さに身を任せ、ざくりと『剣の騎士』を獣の巨大なあぎとに突き刺した。
「援護する」
充が勇生のもとに駆け寄り、至近距離から二挺の銃を突き出した。火薬のはじける音が響き、押し付けられた銃口から飛び出した獣のあぎとの付け根を砕く。

「これぐらい！　挫けて、たまるかあっ！」
強引にあぎとをこじ開け、内側に『剣の騎士』を突き立てる。両

手足を獣のあぎとに押し付け、さらに大きく押し開いていく。礼央の魔力で強化されたセキュアダガーが、音を立てて牙だらけの顎を突き抜けた。
「仲間が一緒に戦ってるんだ！　だから、負けない！」
思い切り身体を突っ張る。獣の砕けた顎が耐えられずに弾けた。両手で剣をつかむ。
「滅びろ！　お前に人は食わせない！」
膨大なマナが二本の剣を包み、一回り大きな刃を作り上げる。純粋な破壊のエネルギーが、獣とすらいえない存在となった異形の奈落の身体を十字に断ち割った。

○シーン13

奈落が断末魔の悲鳴をあげる。体中の無数の口があげる声がひとつ、またひとつと力を失い、やがて完全に沈黙する。
「やった……！」
奈落の気配が、徐々に薄れていく。獣の身体は無数の牙に分かれ、その牙もやがてマナに分解されて消え去った。
「やった！　よかった、わたし、つかまったときはどうなるかと……！」
ぺたんとマシュマロが膝をつく。抑えていたものがどっと溢れるように、目から涙がこぼれる。
「……悪かった。ボクのせいで……」
充が視線を伏せながら呟く。勇生は首を振り、
「いや、きみが居なきゃ奴を倒すことはできなかったよ。一緒に戦ってくれて、ありがとう」

充の口元にわずかに笑みが浮かぶ。
「礼を言うのはこっちのほうだ。仲間でもなんでもないボクと一緒に戦ってくれて……」
その背を、ばんと礼央が叩く。
「何言ってんだ！　オレの指揮で戦ったんだし、手下みたいなものだろ！」
そういって、大きく胸を張って笑ってみせる。そして腕をあげて、作り出した結界を解く。

「あ……もう、朝だね」
マシュマロが声を漏らす。東の空から、ゆっくりと日が昇り始めていた。
「手下……か」
「なんだよ、不満か？」
礼央が充を振り返って問う。

「一緒に戦って、あんな強い奈落を倒したんだ。仲間、でいいじゃないか」
勇生が笑みを浮かべながら言う。
「そうね。うん、組織の違いなんて、細かいこと気にしてもしかたないもの。一緒に奈落と戦ってるんだから、いいじゃない」
「ま……まあ、マーシュがそう言うなら、いいけど」

礼央が鼻の下をこすりながら言う。充はくすくすと笑って見せる。
「ボクはもう行かなきゃ。キミたちも、学校があるだろう？」
勇生はあっと声を漏らした。充はそれじゃあ、と声をかけて、屋上から去っていく。
「そ、そうだった。あー……もう、居眠り決定かな」
はー、と大きく息を吐く。礼央がふんと鼻を鳴らした。

「オレほどじゃあないが、一応、子分としてそれなりの働きをしたからな。うちの自家用ヘリに乗せていってやろうか？」
「じ、自家用ヘリ？」
思わず唸る。太陽を背にして、空から礼央の言ったとおりのものが近づいてくる。

「礼央くん、お金持ちなのよ。言ってなかったかな？」
「い、いや、そんな気はしてたけど、そこまでとは……」
ヘリは間違いなくこちらを目指しているようだ。感心するというか、驚嘆するというか。疲労にまぎれて、勇生は反応を取り損ねた気分だ。
「ま、オレの才能に比べれば家柄なんて大したことじゃないけどな！　……で、どうするんだ？」

「せっかくだけど、遠慮しとくよ。あんまり、目立っても困るしさ」
「そうか？　ま、それならいいけどな。それじゃあ、マーシュ、また会おうな！　見習い戦士もな！」
さすがに着陸はできないらしく、ヘリから降りてきた縄梯子を昇り、派手な音と共に礼央は遠ざかっていった。考えてみれば、ふさわしい去り際な気もする。

「あー……疲れた。さあ、僕らも行こうか」
疲労を押し殺して、マシュマロに向き直る。
「そうね。あ、いつまでもこの格好じゃ目立つわよね」
魔法少女状態の服装に気づいたマシュマロが胸元に手を当てる。
「え、ちょ、待って……」

「リターン」
短い言葉と共に、マシュマロの身体を覆ってた服が消え去る。
「わあっ！？」

勇生はあわてて目をふさごうとしたが、間に合わない。
「え、あ……きゃああっ！？」
マシュマロが悲鳴と共に勇生の頬を打った。
「な、なんで僕がぁっ！？」

勇生は悲鳴を上げて倒れ、疲労に身を任せて気を失った。
目に焼きついていた光景は、上下おそろいの、ピンクがかった白だった。

第2話「疾く駆ける獣」―その6（後書き）

○アペンディクス
キャラクターデータ
・伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）
年齢：16歳　性別：男　種族：人間
身長：166cm　体重：55kg
クラス（レベル）：レジェンド（2）／ファイター（1）／スカウト（1）

・小練（こねり）マーシュ・マロウ
年齢：16歳　性別：女　種族：人間
身長：155cm　体重：46kg
クラス（レベル）：アルケミスト（1）／ブラックマジシャン（2）／ホワイトメイジ（1）

・神力充（しんりき・みつる）
年齢：16歳　性別：女　種族：人間
身長：165cm　体重：51kg
クラス（レベル）：ガンスリンガー（2）／スカウト（2）

・門真礼央（かどま・れお）
年齢：11歳　性別：男　種族：人間
身長：145cm　体重：38kg
クラス（レベル）：サモナー（2）／ホワイトメイジ（2）

番外編2「神力充、探し回る」前編

○神力充、登校する

私立万色（ばんしき）学園……

N市内でも屈指の名門校として知られる中高一貫の学園である。

朝7時。万色学園前のコンビニエンスストア、『六文』が開店すると同時、その店内に一人の女生徒が踏み込んだ。

左胸に万色学園の校章があしらわれたブレザーに、ベルト飾りのついたスカート。ショートの髪はヘアピンで眉に掛からないように留められ、足下は黒のハイソックス。年かさの教師が考えるような標準的な女子学生の姿だが、腰に巻いた厚いベルトが目立って見える。

女子生徒にしては背が高い。手足は長く、メリハリのついた体型はモデルと言っても通用しそうなぐらいだ。

しかし、その鋭い眼光が、外見から受ける印象をどこか危険なものに変えていた。

女生徒の名は神力充（しんりきみつる）。万色学園に通う高校生にして、奈落葬儀人（アンダーテイカー）である。

「いらっしゃい。相変わらず早いねえ、充ちゃんは」

窓を閉ざしていたシャッターを上げおえて、店内に戻ってきた店主、六文字（ろくもんじ）センが声をかける。

充よりもさらに背が高い。が、化粧っ気はなく、髪もどこか野暮ったい三つ編みだ。加えて、

「何か予約でもしてたかな。それとも、今日発売の週刊誌が待ちきれなかった？　ははぁん、さては朝ご飯を抜いてきたね？」

……このようにおばさんくさい、もといフランクな物言いで、学

園の生徒からは親しまれている。

充は、学生向けにそろえられた商品棚には目もくれず、カウンターの前に立った。店主が戻るのも待たず、

「はなまるあんパンと白牛乳」

低くささやくように告げた。

センは、ゆっくりと肩をすくめ、カウンターの中に戻る。

「仕事熱心だね、充ちゃんは」

その言葉に続けて、低く何かをささやいた。

瞬間、空気が変じる。

『六文』の商品棚の配列、店内の飾り付けはすべて、風水の理に従って並べられている。

店内を通る気脈はカウンターの裏、ちょうど今センが立っている場所に集まり、そこでの呪文と操作により、店全体が簡易な魔術結界となるのである。

他の魔術師や魔物を退けるほどの効果はないが、一般の生徒が店の中に入ろうとすると、『何となく気が向かなくて』きびすを返すことになるだろう。

そう、このコンビニエンスストアもまた、尋常の店ではないのだ。

「この前も奈落を仕留めたばかりじゃない。枢機卿も評価なさってたよ」

センがやれやれと肩をすくめて見せる。その顔つきは、溌剌とした（自称）看板娘のものではなく、眼光は充に劣らぬ鋭さを備えていた。

彼女は、充と同じくＦＣ（フューネラル・コンダクター）社の構成員である。ただし、センの場合は奈落と戦う葬儀人ではない。連絡員だ。

『六文』は、このＮ市に滞在する葬儀人やエージェントたちにとっての連絡拠点であり、センはいわば、充にとって直接の上司にあた

る。
ちなみに、充の言った『はなまるあんパンと白牛乳』というのは、『今から裏の仕事の話をしたい』という合い言葉なのである。
「あれは、ボク一人の力で成し遂げたことじゃない。……一人で戦えるようになりたいんだ」
充が呟くように言う。
「やれやれ、それだけの実力があれば充分だけどね」
その手腕はさすがと言うべきか、センも『駆ける獣（ランニング・ビースト）』の事件で何があったのか、おおよその事情は掴んでいるのだろう。慰める口調ではないが、充の心情を察しているようだ。
「残念ながら、今は仕事はないわよ」
「なに？」
あっけらかんと言うセンに、充は困惑したように聞く。
「紹介してあげたいのは山々だけど、奈落の目撃情報から、細かい葬儀の後処理まで、なーんもなし。あたしが掴んでないんだから、枢機卿に聞いてもムダだと思うよ」
「けど……」
「念のため、弾薬の補充くらいはしてあげるけどね。今日はおとなしく高校生してなさい」
ひらひらと手を振るセンが、ごそりとカウンターから箱詰めの弾丸を取り出す。
もちろん、普通の生徒が見てもそれが何かは分からないように隠蔽されているのだが、なかなかダイナミックな店内である。
「何か、ちょっとしたことでも……」
「しつこい！　充ちゃんは若いんだから、青春ってやつをもう少し謳歌してみなさい。奈落と戦ってばかり居るより、案外強くなれるかも知れないわよ」

センは弾薬を充に押しつけ、ぐいと背中を押す。なお食い下がろうとする充へ、
「朝は稼ぎ時なのよ！　このコンビニもれっきとした店なんだから、邪魔しない！」
そう言って、押し出してしまった。

しぶしぶ学校に向かう充の背中を眺めながら、センはため息を漏らす。
「実力は充分、なんだけどね。あんな戦い方じゃあ、いつ我が身を滅ぼすか……」
ＦＣ社にとって、葬儀人は使い捨てのコマではない。時にはそうした冷酷な決断を下さなければならないときはある。
しかし、戦い続けるためには、捨て鉢な戦法は危険すぎる。充ほどの腕を持つ葬儀人に、そう簡単に死んで欲しくない、というのが、社と、そしてセンの共通した意見だった。
「あの子にも何か、守りたいものでもできればいいんだけど。友達とか、ね」

○国府津由宇、お守りをなくす

教室に、生徒たちがひとりまたひとりと集まってくる。
朝の時間をもてあました充は、それでもきっちりと背を伸ばし、席に着いていた。
（……無駄な時間だ）
と、思う。

充の両親は、彼女が物心つく前、奈落によって殺された。
その奈落は、ＦＣ社の葬儀人によって『始末』され、彼女は年の離れた兄と一緒に、ＦＣ社に引き取られた。

その兄は、すぐにＦＣ社を構成する宗教組織での修行に向かい、今も彼女と同じように葬儀人として各地を巡っている。だから、年に数度会うくらいだ。

彼女はと言えば、社によって奈落退治の専門家として育てられた。

人間の持ちうるもっとも強力な武器……銃の扱いを教え込まれた。

年齢が１０を数えるよりも早く、充は奈落との戦いを経験した。その戦いを監督していた葬儀人いわく、『非凡な才能』を発揮し、『単独で奈落を殲滅することが可能』な程度の能力と才能があると判断された。

そして、彼女への教育は苛烈さを増し、いくつもの国を飛び回って奈落との戦いに明け暮れた。

その充が、今年になって突然、『奈落事件が頻発する兆候』があるというＮ市に配属となり、さらには表の顔として高校に通うことになったのだ。

彼女にとって、葬儀人の価値とは、奈落と戦うというその一点だけであり、ＦＣ社が説明したような『社会性』などは、必要とは思えなかった。

しかしそれでも、彼女は組織によって育てられたのだ。組織の命令には逆らえず、この春からは高校生として万色学園で学生をしている。

彼女の洞察力は戦いの中で鍛え上げられており、息づかい一つで敵の動きを予測することができた。『一を聞いて十を知る』を体現するその才覚は、あっという間に必要なだけの学力を手にすることを可能にした。

一年生の修了時には、二年生のカリキュラムを終えていると言われる名門、万色学園においても充は学力面で不足することはなかった。

そんな彼女にしてみれば、学校で、他の生徒と一緒に授業を受けることは、
（……無駄な時間だ）
というわけだ。

もちろん、そういった態度はＦＣ社の考える『社交性』とはほど遠く、転校して一ヶ月も経っていないうちから、充は話しかけづらい存在として、クラスの中でも孤立していた。
ざわついている朝の時間、充に話しかける生徒はいない……
「神力さんも、おはよう」
国府津由宇ただ一人を除いて。

肩の上で髪をそろえた少女だ。際だって美人というわけでもなく、身長は平均ほど、スリーサイズもおそらくは平均近く。
隣のクラスを覗いても同じタイプが２，３人は見つかりそうな、ごくごく普通の少女である。
「……おはよう」
ぶっきらぼうに答える充。（話しかけるな）と主張するオーラが全身から漂っている。

しかし、由宇はそのオーラに気づいていないのか、それともあえて無視しているのか、ととと、と近づいてきて、
「充さん、香水変えた？」
と、さらに話しかけてきた。他の生徒が充を避けるようになってからもこの調子である。
あまりにつきまとうので、ＦＣ社に頼んで徹底的に身元を洗わせたのだが、公務員の父と専業主婦の母、それから小学生の弟がいる、という何の面白みもない調査結果だけが返されてきた。隣の学校にも何十人と良そうな、ごくごくごく普通の女子高校生、である。

「香水なんてつけてないよ」
さすがに無視し続けるわけにもいかず、充は答える。
由宇は不思議そうに首をかしげると、小さく鼻を鳴らしてみせた。
「そう？　でも、いつも良いにおいがするなあ、って思ってたんだけど」
「つけてないったら」

とはいうが、心当たりはある。
充の武器は銃だ。火薬である。時には、制服を着たままそれを使うこともあるのだ。
もちろん、毎日それをぶっ放しているわけではないが、多少の硝煙のにおいが彼女の体には移っている。
それを隠すために使っている、消臭剤のにおいだろう。それほど香るようなものではなく、いちいち充に興味を持って近づいてくるのでもなければ、気づかない程度のものだ。
あまり勘ぐられても面倒だ、と思った充は、別の話題を探した。その視線が、微妙な違和感を捕らえる。

「……いつものお守りは？」
「は、はうっ？」
由宇は驚いたように下を向いた。
彼女がいつも使っている通学かばんには、小さなお守りが着けられていたのだ。『健康祈願』の、別に対して有名でもない神社で作られたお守りである。
普段、特別由宇に注意を向けているわけでもないのだが、充の鋭い観察力と記憶力は、そのお守りがなくなっていることを察知したのである。

「はう、えーっと、な、なくしちゃった」
と、少し引きつった笑顔で由宇が答える。

「なくした？　大事なものじゃないの？」
「う、うん。小さいころに家族みんなで華ってから毎年、初詣の時に買ってるんだけど……」
指をもじもじとつつき合わせながら、由宇は呟く。
「どこでなくしたか分からないから、仕方ないよ」

由宇の表情はどこか寂しげだ。充はなんとなく見ていられなくて、視線を伏せた。
「はう、も、もう時間だね。それじゃあ！」
由宇が自分の席に戻っていく。再び退屈な朝の風景が戻ってくる。充はぼんやりと学園の日常をどこか意識の外で眺めながら、
（なくしもの、か。……悲しそうだったな）
そんなことを、考えていた。
（どうせ仕事もないし、暇つぶしに、探してみるのもいいかな……）

番外編2「神力充、探し回る」後編

○神力充、たのむ

放課後、充は部室棟に居た。
と言っても、万色学園のクラブハウスではない。N市の南方、丘の上にある私立瑞珠（ずいしゅ）学院の部室棟、その隅にある『魔法部』の部室だ。
「なくしたものを、探して欲しい」
突然、別の学校の制服を着た充が部室の戸を開けて入って来るなり、そう言ったのだ。中に居た二人は驚いた様子で振り返った。

一人はいくらか小柄な少年。名前は伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）。
一人は明るい色の髪を二つにまとめた少女。名前は小練（こねり）マーシュ・マロウ。
共に充と協力して奈落を倒したことのあるクエスターだ。
二人でしばらく顔を見合わせてから、小練マーシュ・マロウ……マシュマロがハッとしたように叫んだ。
「強力なマジックアイテムが奈落に奪われたの！？」
「い……いや、違う」
太めの眉をきっとこわばらせるマシュマロに、充は控えめに視線を伏せる。

「じゃあ、奈落を呼び寄せるような何かが？」
「ち、違う」
「まさか充さん、シャードを！？」
「ち、違う」
「じゃあ、一体？」
眉をハの字にしてマシュマロが困惑する。なんとなく言い出しに

くい雰囲気を感じながら、充は口を開いた。

「知り合いが大事なものをなくしたみたいなんだ。今は仕事がないから、暇つぶしに探そうと、思って」

「その人って、友達？」

何でもない風に、勇生が問う。充は思わず返答に窮してから、視線を逸らした。

「別に。ボクに友達はいない」

ぼそりと答える充。勇生はそれ以上問いかけて来なかったが、代わりにマシュマロが身を乗り出した。

「本当は、あまり個人的な目的で魔法を使うのはいけないんだけど、充さんには助けてもらったお礼があるものね。うん、どんなものか教えてくれる？」

「お守りだ」

「お守りって、神社の？」と勇生。

「そうだ」

「その持ち主の名前って分かる？」

マシュマロの問いにも、充は頷く。

「国府津由宇」

「Ｃａｕｓｅ（あなたが居るから）　Ｙｏｕ？　変な名前ね」

（お前が言うな）と、充と勇生はまったく同時に思ったが、これ以上話をこじらせるのも面倒なので、二人とも黙っていた。

マシュマロは他に2，3の質問をしてから、儀式に取りかかった。部室に簡易な結界を施して魔法を使っているところを他の生徒に見られないようにしてから、胸のブローチに格納されたチャンバースタッフを取り出す。

「マナよ、失われしものの行方を、我に指し示したまえ……」

呪文に応え、チャンバースタッフに埋め込まれた水晶が光を放つ。細長い三角形を形作り、指し示す方向と角度から、マシュマロは独自の計算に基づいて結論を出す。

「市街地のほうにあるみたい……こっちね。だいたいの距離しか分からないから、あとは行って探してみないと」

「わかった。……すまない」

それだけ言って、立ち去ろうとする充の隣に、勇生が立ち上がって並ぶ。

「僕たちも行くよ。暇つぶしに」

ぴくりと充の眉が動く。

「キミは案外、嫌なやつだな」

「なんのこと？」

と、勇生は肩をすくめて言った。

「なんのこと？」

と、マシュマロはどうやら本気で聞いているようだった。

○神力充、探し回る

3人は丘の上の瑞珠学院からN市内に降り、住宅街へと向かった。きょろきょろと周りを見回しながら、万色学園のブレザーを着た充と、瑞珠学院の制服を着た二人は歩いて行く。

「由宇の家は、このあたりだったな」

ぽつりと充が漏らす。

何事にも全力のマシュマロは道ばたの溝をのぞき込んで気づいていなかったが、勇生はその声を聞いて、ふと振り返った。

「その人の家にも、行ったことあるの？」

いかにも意外、というような表情で聞いてくる。
「いや……。調べたことがあるだけだ」
我知らず視線を逸らしながら、充は答える。勇生はふうんと鼻を鳴らした。
「調べるって、どうして？」
「あんまりボクにつきまとってくるから、素性を確かめた。クラスメイトが奈落ということも考えておかなければ、事件が起きてからでは遅い」
「そう……かもね」
勇生はなぜか目を伏せた。

「経験があるのかい？」
普通なら聞きにくいだろうことを、充はずばっと聞いた。勇生は返答に窮したようだが、やがて、
「まあ……ね。マシュマロが居なかったら、危なかったよ」
「その人は、友達？」
「まあ、そう……かな。大事な人だよ」
勇生が答える。
「そうか」
充はしばし、何を言うべきか考えた。自分でも気づいていなかったが、その質問を口にするため、数秒間の間、彼女は呼吸も忘れるほど緊張していた。

「その、友達っていうのは……」
「ああっ！」
突然、マシュマロが声を上げた。
「な、何！？」
驚いた勇生は前を行くマシュマロのもとへ駆け寄る。
充は二人の背を見て、自分が何を聞こうとしたのか、思い出そうとした。

友達というのは、どういうものなのか？　どうやって作るのか？
友達がいると、どんな気持ちになるものなのか？
自分のしようとした質問がどれだったのか、自分でもまったく分からなかった。

「あの犬がくわえてるのって、もしかして！」
マシュマロが指さす方向に視線を向ける。くたびれた首輪をつけた中型犬が、紐のちぎれたお守りをくわえてる……！
「アレだ！」
叫ぶが速いか、充は走り出していた。制服姿のまま、上半身をぶらさない訓練された走法で一気に犬との距離を詰める。
「ひゃん」と驚きの声を上げた犬は慌てて逃げ出していく。

「充さん！」
一瞬遅れて、勇生とマシュマロがその後を追う。が、さすがと言うべきか、充はその二人をぐんぐん離し、二足歩行と四足歩行という圧倒的なハンディキャップにもかかわらず、逃げる犬に手を伸ばす！
しかし犬もさるもの、充の指がその首輪に触れる直前に方向を転換し、ラグビーボールが跳ねるような動きで横合いの路地へと飛び込んだ。
「チッ！」
舌打ち一つと共に充は急制動を掛け、塀に手をかけ、ぐいと体を引き寄せて路地を曲がった。

「ひゃん！？」
振り切った、と一瞬気を緩めた所に、なおも追って来た充の姿に驚き、犬がばたばたと駆けていく。
驚いて鳴き声を上げた拍子に、ぽとりと地面にお守りが落ちた。
「あ……っ！」

と、充がお守りに飛びつこうとした瞬間。

「おお、なんてこった！　俺ってばちょうど、どことも知らない神社で作られた赤っぽい色のお守りが欲しかったところなんだ！」

ひょい、と別の手がそのお守りを拾い上げた。髪を茶色に染めた高校生ほどの少年だ。

「おおっ、そりゃあ超絶激烈塩基配列ラッキーじゃん！」

その隣の、鼻にピアスを開けた少年が応じる。

充は、不意に路地に入ってきた少年が何をしにこんな所に来たのか、とか、なぜそんなモノを欲しがっているのか、というような余計な疑問を一瞬で脳裏から締め出し、感覚のすべてを状況の解決に注ぎ込んだ。

ほとんど脚を止めた状態から腿から下の筋肉の力で飛び出す。自分が弾丸になったかのように一瞬で鼻ピアスに接近。

「な……」

んだ、と鼻ピアスが口にする前に、そのすねにシューズの先端を打ち付ける。

「いっ……」

てぇ、と鼻ピアスが悲鳴を上げきるより早く、上半身を大きく振り、茶髪の襟を掴んでぐっと押す。突然のことに反応できない茶髪は、あっけなく背後の塀に背中を押しつけられた。

「ボクは今苛立ってるんだ、これ以上話をややこしくするなら、どうなっても知らないぞ！」

いきなり引き倒された茶髪は驚きを顔中に広げて、困惑しきった様子で充の顔を見上げていた。

「な、ななななんだよ、お前！」

脚を抱えて倒れた鼻ピアスが叫びを上げる。

「そのお守りをよこせ、それで見のがしてやる！」
「な……なんだよ、お、女じゃねえか。俺は今日、どことも知らない神社で作られた赤っぽい色のお守りが見つかったら必ず手に入れてやろうと決めてたんだぞ」
「しゃらくさい！」
充のはそう叫び、ブレザーの中に手を突っ込む。腰に巻かれた太いベルト……ガンベルトの後ろ側に備えられたオートマチックピストルに指を引っかける。そのまま引き抜いて茶髪の口の中に突っ込んでやろうと……

「充さん！」
ようやく追いついたマシュマロが、充に声をかける。
「……チッ」
並んで路地に現れたマシュマロと勇生を見て、頭にのぼった血がさっと冷える。
「それをよこせ」
「な、なんだよこの女、格闘技でもやって……」
「よこせ！」
また銃に手を伸ばしそうになるのを鉄の精神力で抑えこみ、充は茶髪が握ったままになっていたお守りを奪い取った。

「あ……あれ？」
握っていたはずのお守りが一瞬で抜き取られたことに茶髪はぽかんと口を開けて自分の手を見下ろす。
「これでいい。どこにでもいけ」
茶髪をどっと突き飛ばし、充は背を向ける。
「なんだ、この女……っ！」

一瞬。
茶髪がその背中に飛びかかろうとした時、充は腰に手を伸ばし、

黒い鉄塊をブレザーの裾から覗かせた。
威勢は良いが、保身能力に長けた種類の人間である茶髪と鼻ピアスは、
「お、おい、今の……」
「ま、まさか」
「ハッ！　なぜか突然お守りが要らなくなった！」
「お、おお、なぜか突然向こうの方に歩いて行きたくなったなあ！」
という会話と共に、充たちとは逆の方向へと路地を出て行った。

「……変わった人たちだね」
ぽつりと勇生が漏らす。充はふんと鼻を鳴らしただけで、何も答えない。
「でも、充さんでも人のために必死になることがあるんだね」
「な……何を。単なる暇つぶしだよ」
「そうは見えなかったわよ」
マシュマロが目を細める。
「よっぽど有意義な暇つぶしになったみたいだね」
からかいではなく、朗らかに笑ってみせる勇生。

「ば……馬鹿を言うな！」
「でも、それ……ボロボロになっちゃったね」
マシュマロが充の手の中のお守りを示す。紐はちぎれ、表面は毛羽立ち、所々に穴が空いて中の厚紙が覗いている。
「そう……だな」
なぜか、由宇ががっかりする顔が浮かんだ。沈んだ表情を察してか、
「そ、そうだ、マシュマロが魔法で直すこともできるんじゃない？」
と、勇生。
「でも……」

マシュマロは考えこむ様子だ。本来、『魔法は秘すべし』の命を受けた魔術師連盟の構成員であるマシュマロにとって、奈落との戦い以外で魔法を使うことは、あまり望ましいことではないのだ。だが、充に対して何かをしてやりたいという気持ちもあるのだろう。その板挟みの表情を見て、充は首を左右に振った。

「いや、構わない。ここまで付き合ってくれただけでも充分だ。ありがとう」

素直にお礼を言う充の姿に驚く二人に、充は手を掲げる。

「後は自分でなんとかするよ。……じゃあ」

そう告げて、自分の部屋へと戻っていった。

少し落ち込んでしまった自分の顔を、二人に見られたくなかったのだ。

○神力充、気づかれる

翌日。

結局、表面をぬぐい、穴を縫い合わせ、消臭剤を振りかけてはみたものの、やはりお守りが元通りになるわけもなく、ぼろぼろな印象はそのままだ。

そんな状態のお守りを堂々と渡して、由宇が落ち込む顔を見るところを想像すると、どうしてもそれはできなかった。しかし、せっかく勇生とマシュマロに協力してもらってまで探してきたものだ、返さないというのも気が引ける。

結果、充はやはり朝一番に登校し、いつも由宇が使っている机の中に、お守りを忍ばせた。

充が背筋を伸ばしてじっと座っているうちに、他のクラスメイトたちがぽつぽつと登校し、やがて由宇が教室の中に入ってきた。

「おはよう、神力さん」
「……ああ」
いつもは表情をくずすことがない充も、このときばかりは何故か由宇の顔が見れない。
充がそっぽを向いている間に、由宇は自分の使っている席に向かい、すぐに机の中に入っているお守りに気づいた。
「あれ……」
声。充の胸がドキッと鳴る。それを悟られまいと、ますます充は表情を硬くした。
「これ……でも、誰が？」
充は顔を背けていたので気づかなかったが、由宇はそのお守りを眺めた後、鼻を小さく鳴らしてにおいをかいでいた。

○神力充、友達になる

放課後。
コンビニエンスストア『六文』に、万色学園の生徒ふたりが連れたって入店した。
神力充と国府津由宇である。
「お礼だから、何か好きなの、一つだけ！　小物がいいかな。あ、でも神力さんはそういうのより、もっと実用的な方が好き？」
由宇が楽しげに声を弾ませている。充はその後ろに居心地悪そうに立ち、
「だから、何度も言うけど、お礼をされるようなことなんて、してない」
「そう？」
由宇は自分のかばんにくくりつけた、ボロボロのお守りを一瞬眺

めてから、
「神力さんがそう言うなら、勘違いかなあ」
ぽつりと由宇が言う。
「おやぁ、充ちゃんが誰かと一緒に来るなんて珍しいね」
カウンターで客をさばいたセンが、肘をつきながら言う。

「友達かい？」
「えっ……？」
不意に問いかけ。突然すぎて、充は答えられなかった。しかし、
「はい」
と、由宇は一瞬の間も置かずに頷いて見せる。
「けっこう、けっこう！」
と、センは機嫌よさげに、からからと笑って見せた。

「そうだ二人とも、女生徒に売れるかと思って新しい商品を入荷したんだけどね、ちょうど広告塔になってくれるコを探してたんだ。二人で一緒に着けてくれない？　特別に3割引にしとくからさ」
そう言って、センはカウンターの横に置いてあるヘアピンを示して見せた。
花の形をした飾りがついた、二つセットのヘアピンだ。
「はう……それ、いいかも。ねえ神力さん、一緒に買おう？」

由宇とセン、二人の視線が一斉に充に集まる。
充は少し言葉に詰まってから、
「の……ノーという理由はない」
と、答えた。
「うん、それじゃあ、これ、2セットください」
「はいよ、まいどあり！」
充はいつもの観察眼でもって、センが白い歯を見せ、由宇がえくぼを浮かべているのを見つめていた。

自分の口角がわずかに上がっていることには気づいていなかったが、ほんの少し、温かいものが胸に広がっていることには、気づいていた。

番外編３「門真礼央、デュエルする」前編（前書き）

本編に登場する『サモニングモンスター』のルールおよび内容は作者の創作であり、実際の『アルシャードガイア』における『サモニングモンスター』、および実在のあらゆるトレーディングカードゲームまたはその他のゲームとは一切の関係はありません。

番外編3「門真礼央、デュエルする」前編

○門真礼央、屋上にて好敵手を待つ

地上30メートル……。
サジッタ社N市工場、その事務所ビルの屋上。
特別な対戦のため作られたデュエルスペースに、門真礼央（かどま・れお）は立っていた。
11歳の少年である。ゴーグルで押さえた髪は、栗毛がかった淡い髪。猛獣の子供を思わせるような、きりっとした目鼻立ちだ。
派手な柄のシャツとズボンが、吹き付ける風に煽られてばたばたとひるがえっている。

「来たか」
礼央の目がゆっくりと開く。屋上への入り口を開き、3人の人影が姿を現した。
1人目は銀色の髪をオールバックになでつけた男。タキシード姿がトレードマークの『サモニングモンスター』の公式ジャッジにしてプロデューサー、レイモンド・サロネスだ。
続くのは、セーラー服を着た少女。長い髪を後ろでふたつにまとめている。青い瞳は、不安げに屋上を見回していた。
最後に姿を現したのは、少女と同年代の少年だ。短い黒髪に、えんじ色のジャケット。沈む夕陽に照らされて、茶色がかった瞳が赤みを増している。

「れ、礼央くん。わざわざ、こんな所を用意したの？」
「分かってくれ、マーシュ。この勝負にふさわしい場所を用意しただけだ」
先に入った少女……小練（こねり）マーシュ・マロウ……マシュマロが困り

顔で問いかけ、一段高くなったデュエルスペースから礼央が答えた。
「礼央くん、どうしてもやらなきゃいけないの？」
その後ろから、少年……伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）が戸惑うような表情で問う。

しかし、レイモンドが振り返り、チッチッチ、と芝居がかった動作で指を振って見せた。彼の得意の仕草だ。
「この場所は、大会や特別なデュエルの時以外は滅多に使わないんだけどね。世界ランカーにして、我がサジッタ社の誇る有能な召喚師（サモナー）であるところの礼央くんがどうしてもというから、許可が下りたんだ。これでデュエルしないとなると、少し困ったことになるね」
身振りを交えた動作で、レイモンドは言う。メディアに露出することも多い彼の仕草は、不思議とどこか、逆らうのをためらわせる力があった。

「レイモンドさん、ルールは？」
礼央が問う。レイモンドはゆっくりと頷いた。
「きっちり、説明しておいたよ。テストプレイも一度」
「よーし。準備万端ってわけだな」
「なかなか筋が良いよ、彼はね」
目を細めて、勇生を褒めるレイモンドに、不機嫌そうに礼央はうなる。
「そう言うのはいいんだよ。さっさと始めようぜ！」

待ちきれない様子でとんとんと足を踏みならす礼央。
「それじゃあ、こっちへ」
道を示すレイモンドに勇生はその後について、デュエルスペースへと登っていく。
「勇生……ほ、本当にするの？」
「仕方ないよ、ここまで来たら……礼央くんも、やらなきゃ納得してくれなさそうだし」

「でも……」
「大丈夫。なんとか……やってみるよ」
礼央はようやく登ってきた勇生に対してしびれを切らし、指を突きつける。
「まったく、大事なデュエルに遅れて来るとは、大した自信だな。このデュエルの意味が分かってるのか？」
「し、仕方ないじゃないか。急だったし、それに意味って言ったって……こんなことで、本気なの？」
「こんなことだと！　デュエルをなんだと思ってるんだ！」
ツバを飛ばす勢いの礼央から思わず身を引く勇生。礼央はますます苛立って、叫んだ。
「このデュエルに勝った方が、マーシュを手に入れるんだ！」

○門真礼央、決闘を挑む

『駆ける獣（ランニング・ビースト）』の事件が終わった後、礼央は悶々とした日々を過ごしていた。
というのも、礼央が密かに（と本人は思っていた）アプローチをかけていたマシュマロに、勇生とかいう妙なやつがくっついてきたからである。
礼央にとって、『世界のために奈落と戦う』クエスターとしての使命は、最高に楽しいゲームだった。しかし、それは秘密のゲームなのだ。その戦いのことは、他の人に……たとえば、同級生やデュエル仲間たちに明かすことはできないのだ。
そして、礼央はクエスターとしては非常に若い……いや、幼い。この『楽しいゲーム』を共有することのできる、同年代の仲間が少なすぎるのだ。

そんな中で、彼にとってマシュマロは歳が近く、ゲームの楽しさを理解してくれる相手だと、礼央は感じていたのだ。
それはもしかしたら、少し年上の女性に対するあこがれのようなものであったかもしれないが、幼い礼央にとって、憧憬と恋心の区別などつくわけがなかった。
そういうわけで、そのマシュマロと一緒に居る勇生は、礼央にとって目障りそのものだったのだ。だから、礼央は自分なりの方法で、マシュマロをかけての勝負を申し込んだのだ。

『果たし状！
伝宝勇生へ
明日の放課後、サモニングモンスターでのデュエルを申し込む！
サジッタ社立ち会いのもと、正々堂々の勝負だ。
この勝負に勝った方がマーシュを手に入れるものとする。
断ったら、敵前逃亡と見なしてオレの勝ちとするからな！
レオ』

という文面を唐突に送りつけ、その個人的な決闘のプロデュースを、レイモンドに依頼したのである。
……サジッタ社にとって礼央のような若い魔術師は貴重であり、その扱いは連盟が所属の魔術師にするよりもずっと丁重だ。
レイモンドは、それでクエスターの仕事がはかどるならと、この件を承知したのである。
無論、マシュマロは、
「私はものじゃない！」
と怒ったのだが、自分勝手でマイペースな礼央に向かってそう言った類のことを言うのがいかにムダであるか、彼女は何度かの共闘を経て思い知っていた。
かくして、決闘は始まったのである。

○レイモンド・サロネス、ルールを説明する

勇生と礼央は、互いの前にある、大きな祭壇……のように彫刻された台座を挟んで向かい合った。

「サモニングモンスターはＴＣＧ（トレーディングカードゲーム）の性質上、より多くのカードを所持、把握しているプレイヤーが有利になる。礼央くんは世界でもトップクラスのサモナーであり、一方で伝宝くんは今日初めてカードに触れる初心者だ。その格差は大きい」

二人の間にジャッジであるレイモンドが立ち、説明を始める。

「そのため、このデュエルにおいては、互いが同じ条件で勝負することができるように、初心者用にデザインされたスターターセット……しかも、礼央くんも知らないカードによって構成された、今期新発売予定のセットを使って、デュエルを行う」

「さすがだぜ、レイモンドさん。それでこそ、同じ条件で戦ってこそ、正々堂々と勝利をつかみ取れるってもんだ」

にやりと礼央が口元を吊り上げる。尖った八重歯が、きらりと光った。

「な、なんだか大変なことになっちゃったな……」

勇生は思わず呟く。

「なんだ、怖じ気づいたか？」

「だ……誰が。そんなこと、ないよ」

礼央の挑発に、思わず口をついてその言葉が漏れた。

「礼央くんには『黄金の森』のデッキを、伝宝くんには『白銀の丘』のデッキを一時間前に渡してある。その時間で、互いにデッキの研究はできたかな？」

「おう、ばっちりだぜ」

「な、なんとか……」

礼央は自信満々に、勇生はためらいがちに返事を返す。それぞれの返事を聞いて、レイモンドは頷いた。

「よろしい。では、今期の目玉、加護ルールについて説明しよう」

「加護ルール？」

それは、礼央にとっても初耳だった。きょとんとする礼央の素直な反応に、レイモンドは我が意を得たり、とばかりに笑みを浮かべた……もしかしたら、この機会に新作のプロモーションの予行をしているのかもしれない。

「現在のサモニングモンスターには、長期展開によるいくつかの問題点がある……たとえば、新しくゲームを始めることの敷居の高さ。また、あらゆるカードに対する対策が研究し尽くされたことによる、デュエルの長時間化……」

朗々と語るレイモンド。へえ、と礼央は思わず感嘆の声を漏らした。

確かに、『サモニングモンスター』は今やサジッタ社の収入をになうビッグタイトルへと成長した。しかし、四半期に一度のブースターの発売や、ルールの改良などが積み重なり、またＴＣＧの性質上、新しく始めたプレイヤーがデュエルに勝つのは困難なのだ。

さらには、サモナー……『サモニングモンスター』のプレイヤーのことだ……たちの間で、日々カードの研究は進められており、いくつかの定石が作り上げられている。たいてい、はじめの数ターンは相手がどの手を狙ったデッキを組んでいるのかの読み合いになり、デュエルが降着しやすくなっていたのだ。

「まあ、オレほどのサモナーになれば、自分の腕とヒキを信じてデュエルするだけだけどな」

「それが、初心者にはできないのさ」

レイモンドは頼もしげに頷き、一度途切れた説明を再開するため、

こほん、と咳払いをした。
「そこで、それらの問題点を一挙に解決するため、次の大型アップデートによって追加されるのが加護ルールさ。召喚師たちのもとに現れた新たな力……それは、神の力だ！」
そう言って、レイモンドは何枚かのカードを取り出した。
「これは……！？」
礼央はノリもよく、大きく驚いてみせる。こういったイベントごとに不慣れな勇生とマシュマロは、戸惑いながらレイモンドの手中にあるカードを見つめた。

「これは、加護カード。このカードの中から、君たちはそれぞれ三枚を選び、デッキに加える事ができる。加護カードの効果はいずれも強力なものだ。敵サモナーの召喚したモンスターを即座に戦場から排除するものや、逆に復活させるもの……」
演説のようなレイモンドの言葉が、暗くなり始めた空に響く。
「さらには、加護カードは場にタップする必要はなく、たとえ相手のターンの間でも、手札から公開することで即座に効果を発揮する！」
「って、おいおい、そんなことができたら、今までの定石はどうなるんだよ！」
ますますヒートアップするレイモンドの調子に、抜群のタイミングで礼央が問う。打ち合わせがあったようにしか見えないが、どうやら礼央の方は素でこの調子らしい。

レイモンドが、例の仕草で指を振って見せる。
「それが狙いさ。たった三枚のカードをデッキに加えることで、今までとは全く違ったゲームになる……加護ルールは、『サモニングモンスター』を新たな地平へと導く！」
「なるほど……このデュエル、一筋縄じゃいかなさそうだぜ！」
額に汗を浮かべて礼央が漏らす。ノリを合わせた方がいいのだろ

うかと、勇生は大げさに襟を治す仕草をした。
「な……なるほどね。面白くなってきたよ」
まるで販促漫画の悪役のようなセリフを口走ってしまったが、レイモンドは『それでいい』と言いたげな視線を向けて頷いてくれた。
「ちなみに、加護カードは君たちに渡したスターターセットに付属し、それとは別に専用のブースターパックも発売する予定だ」
「それって、テストプレイに使われてるんじゃ……」
思わずマシュマロが漏らす。ひとり蚊帳の外にいて、思わず我慢仕切れなくなったらしい。
せっかく熱くなり始めていた三人が、思わずそちらを振り返る。マシュマロは「うっ」と漏らして、視線を泳がせた。
「しー」
と、一同が一斉に指を立てて口に当てる。勇生はこの短時間でかなり勢いに飲み込まれていた。

「デュエルの前に、君たちにはそれぞれがデッキに加える加護カードを選んでもらおう！　制限時間は5分。選びきれなければ、ランダムで選んだっていい。それだけ、強力なカードをそろえている！」
叫ぶレイモンドに、二人が一斉に「はい」と答え、彼から加護カード一式を受け取った。
「な、なんだか、本当にすごい事になっちゃったなあ……」
思わずマシュマロはうなる。しかし、すでにその言葉に耳を貸すものは居なくなっていた。

制限時間の5分が過ぎたことを告げるタイマーが鳴り、二人が再びデュエルスタンドの前に並ぶ。手には、新品のデッキがそれぞれ握られていた。
「二人とも、準備は良いかな？」
「もちろんだぜ！」

「はい、いつでも！」
「ようし。では、デッキのシャッフルを。……いいかな？　次は、互いに相手のデッキをカットしてくれ。……オーケー、デッキを戻して」
互いのデッキがきちんとシャッフルされた事を確かめて、レイモンドは両手を挙げた。

そのとき、示し合わせたように……いや、これは合わせていたのだろう……屋上の灯りが点灯し、スポットライトを当てるようにデュエルスペースに光を投げかけた。
「今宵、二人の召喚師が、互いの力と、召喚獣の絆をかけて相まみえる……」
レイモンドが両手を振り下ろし、叫んだ。
「サモニング・デュエル……レディ、スタート！」

番外編3「門真礼央、デュエルする」後編

○門真礼央、第一ターンをしのぐ

向かい合う両者の間を、風が吹き抜ける……ちなみにこの屋上は、魔術と設計工学の両面からのアプローチにより、風が強く吹いても、デュエルスペースの上でカードが飛ばないように綿密に設計されている。恐るべし、サジッタの技術力。

「先攻・後攻をコイントスで決めるよ。サモニングモンスターのエンブレムが表、サジッタ社の刻印が裏だ」

「オレは表に賭けるぜ」

先手必勝。それが礼央の戦法だ。……いや、『サモニングモンスター』においては、相手の様子を見る事のできる後攻の方がわずかに有利と言われている。しかし、礼央は確率論や統計よりも自分の直感を信じるタイプのサモナーだった。先手を取って攻めに徹し、相手を精神的に追い詰める。それが、一番の戦法だと信じていた。

「だったら、僕は裏だ」

「よし。ではトスするよ」

レイモンドのまっすぐ差しのばした手が、コインを弾く。それはライトの光を煌めかせながら空中で回転し、ぴったりデュエルスタンドの中央へ落ちた。

その面は……表だった。

「よしっ！」

小さくガッツポーズを取る礼央。勇生はわずかに悔しげだった……すでに、礼央に飲まれ始めている証拠だ。

「互いに、手札を5枚ドローして」

レイモンドの言葉に応えて、礼央は勢いよく、勇生はたどたどし

く、デッキからカードを引く。
「……む、っ！」
礼央は思わずうなった。最初の5枚に、すでに加護カード……『破壊神の怒り』が含まれていたのである。
『即座に戦場からモンスター1体を排除する』
簡潔な文に込められた意味は、まさに普段のゲーム感を打ち壊すものだ。しかも、これは敵のターンに使うこともできるのだ。まさに必殺の切り札である。

（けど……これをいつまでも持っているということは、5枚しかない手札を圧迫し続けると言うことでもあるってわけだ。切り札であると同時に、重荷でもある……なるほどな）
礼央のゲーム感が冷静な分析をはじき出した。
「複雑な表情だね。いきなり加護カードを引いたのかな？」
対戦相手から声をかけられて、礼央ははっと顔を上げた。そうだ。デュエルは互いのカードと運を競う勝負であると同時に、敵の手と思考を読む高度な駆け引きでもあるのだ。
「何、どんなカードにだって意味があるんだ。こいつらがオレを勝利に導いてくれると思って、喜んでいたのさ」

不敵に笑って、礼央は早速手札に手を伸ばした。
「同時召喚
マルチサモン
！　『猫の瞳の射手』！　そして『鱗持つ勇者』！」
礼央がデュエルスタンドに二枚のカードを公開する。同時、彼の頭上に2つの幻影が浮かびあがる！
「これは！？」
驚くマシュマロにレイモンドが振り返り、大げさな身振りと共に叫ぶ。
「これがサジッタ社の技術により実現した、デュエルビジョンシス

テム！　スタンド上で行われているデュエルをリアルタイムに監視し、それを立体映像として空中に投影する！」

「それにしても、1ターン目から攻撃力に優れた『猫の瞳の射手』と防御力に優れた『鱗持つ勇者』をドローし、同時に召喚するとは……さすが礼央くん、すばらしいカード運と容赦のない攻めだ」

「へへっ、そんな風に褒めてくれるなよ。さらに一枚のカードを裏向き（リバース）にセットして、オレのターンは終わりだ！」

「それじゃあ、こっちのターンだ。こっちは……よし！　『精霊契約者』を召喚！」

「何っ！？」

礼央が驚きの声を上げる。

「な、何？　どういうこと？」

おろおろとマシュマロが空中に浮かぶ幻影を眺めて慌てた調子で言う。

「『精霊契約者』は魔法による攻撃を得意とするモンスター……防御力に優れる『鱗持つ勇者』も、魔法には弱い！」

「その通り！　そして、第一ターンにおける主導権を握る事は、ゲーム全体をコントロールするも同じ！　食らえ、『ウンディーネの槍』っ！」

勇生の頭上に浮かんだ幻影……異形の魔術師が、両手を掲げた。その掌の間に、見る間に巨大な氷柱が作り出されていく……

「その通り！　だが、そのイニシアチブをお前に渡すわけにはいかない！」

礼央は叫び、手札からカードを引いた！

「何！？　それはまさか……」

「そのまさかだ！　受けろ、『破壊神の怒り』！」

瞬間、『精霊契約者』の頭上に巨大な雷がほとばしる！　かと思

った直後には、『精霊契約者』は跡形もなく消え去っていた。
「く……っ。まさか、1ターン目から加護カードを使ってくるなんて……」
「普通なら、強力なカードほど後に控えてしまうものだが……しかし、それはかえって決定的なチャンスを逃すことに繋がりかねない。あの思い切りの良さこそが、礼央くんを世界ランカーへと押し上げた要因さ」

感服したように語るレイモンド。マシュマロは思わず、ぐっと息をのんだ。
「く……っ。最後に1枚の伏せカードを置いて、ターンを終了します……」
苦しげにうなる勇生が、カードを場に出しながら言う。
「よし。ならばオレのターン、ドロー！」
高く叫び、礼央がデッキに手を伸ばした。
「まだまだ攻めるぜ。一気に押しつぶしてやる！」

○門真礼央、逆転を受ける

その後も、礼央の猛攻は途切れることなく続いた。強力なモンスターを次々に召喚し、勇生の反撃の隙を奪うような苛烈な攻めだ。勇生も時折反撃に身を転じる事はあるが、すぐにその反撃を封じられ、ますます激しい攻めに晒される。
「勇生……！」
思わず身を乗り出すマシュマロ。それを制するように、レイモンドが片手をあげた。
「デュエルの邪魔をすることは許されない」
「でも！」
「まだ勝負は終わっていないよ。それに……勇生君だって、これで

終わるつもりはなさそうだ」

ハッとしたマシュマロが視線を向けると、確かに勇生の目は、まだあきらめの色を浮かべていなかった。

「いまだ！　オレはリバースカードを表にして……」

「そこっ！　加護カード『太陽神の照破』！」

カッ！

勇生の背から光が閃く。それは一瞬にして、礼央の場に伏せられたカードを消滅させた！

「これは！？」

「『太陽神の照破』は、伏せられたカードを三枚まで即座に除去するカード！　礼央くんが伏せていたカードは、ちょうど三枚……そうか、この瞬間を彼は待っていたんだ！」

「く……！　だったら、『全能神の否定』！　敵の使った加護カードの効果を打ち消す！」

礼央が叫ぶのに合わせて、先ほど生まれた光が逆再生で消えていく。

「ほう！　やはり『全能神の否定』を見逃しはしなかったか。相手の加護カードが発動するまで持っていなくてはいけないのが難点だが、これほど強力なカードもない！」

「ダメだよ、礼央くん。まだ勝負は決まっていない！　こっちも『全能神の否定』をオープンだ！」

「なっ！？」

再び、白光が閃く。そして今度こそ、光に照らされた伏せカードがその場から消滅する！

「うわあああああっ！」

その精神的ショックに悲鳴を上げ、礼央がのけぞる。

マシュマロは、

（そこまで大げさに反応しなくても……）
と思ったのだが、黙っておくことにした。
「このときを待っていた甲斐があったよ！　召喚！　『ガルムの堕とし子』！」
勇生の召喚したモンスターが場に姿を現す。それは戦場を睥睨するほどに巨大な、漆黒の狼……いや、犬だった。
「やれ！　冥府の吐息！」
巨大な犬が生者には耐え難い吐息を噴き出す。それは礼央の場に居るモンスターすべてを打ち倒すほどの強力な攻撃！
「ぐあああああっ！」
悲鳴を上げる礼央。く、と彼は唇を噛んだ。

「加護カードを2枚も持ったままデュエルを続けていたのか！？手札の周りも悪くなるし、自分から選択の機会を狭めてるようなものだぞ！」
「ふ……理由はいくつかあるんだけどね」
笑みを浮かべて、勇生が語る。
「レイモンドさんから『白銀の丘』のデッキを受け取った時に考えたんだ。礼央くんが受け取ったデッキはどんなのだろうってね。僕のデッキには魔法で戦うモンスターを中心に、補助カードは直接的でストレートな効果を持ったものが多かった」
「ほう……」
レイモンドはまた、感心したように勇生の顔を見る。

「だったら、礼央くんのデッキには、罠を張ったり、待ち構えるような種類のカードが多いんじゃないかと思ったんだ。加護カードを選ぶとき、これだ、と思ったよ」
「『全能神の否定』は！　いつから持っていた？　まさか、最初から……？」

「それは、言えないな」
勇生は目を細めて答えた。
礼央が勇生に飲み込まれた瞬間だった。

○門真礼央、決着をつける

形成は完全に逆転していた。リードしていた礼央は追い詰められ、召喚したモンスターは次々に勇生によって打ち破られていた。気づけば勇生の方が、礼央よりもさらに勝利に近づいている……！
（考えろ……！）
礼央は額に汗を浮かべ、必死に言い聞かせていた。
（あいつが逆転できたのは、オレのデッキを予測して対策したからだ！　オレもあいつの手を読まないと、負ける……！）
「……ドロー！」
いささか勢いをなくしながらも、礼央がカードをドローする。

「……っ！」
そのとき引いたカードは……そう、最後の加護カード、『天空神の制裁』だ。敵サモナーに直接ダメージを発生させる切り札である。
（よしっ！　これを使えば、俺の勝ちだ……っ！）
心の中でガッツポーズを作る礼央。『天空神の制裁』によるダメージだけで、勇生を倒すには十分だ。これを公開しさえすれば……。
「何か、いいカードを引いたみたいだね」
勇生に声をかけられて、礼央は背筋に冷たい水を浴びせられたような気がした。

（待てよ…そうだ、あいつのデッキにも、加護カードはまだ残っているんだ。いや、もしかしたら、手札に……！？　そうだ、あいつ

はガイアの恩恵だかなんだかで、運だけはやたらにいいんだ）
ふつふつと頭が沸き立つような気がした。猛烈な速度で脳が回転を始める。
（あいつが最後に選んだ加護カードはなんだ？　受けたダメージを無効にする『守護神の犠牲』……いや、もしかしたら、『全能神の否定』をもう一枚って可能性もある。それがもし、あいつの手札の中にあったら、このカードは通用しない……！）
ぐるぐると思考が回る。そう思うと、勇生は切り札をしっかと隠し持っているような気がしてきた。
（だとしたら、ここは様子を見て、あいつの切り札を先に切らせた方が……）

レイモンドはその礼央の様子を見て、内心で考えていた。
（いけないな……礼央くんの持ち味である思い切りがすっかり鈍っている。これは、勝負は決まったね）
このまま、巻き返しはないだろう。レイモンドはそう思っていた。
礼央は堂々巡りの思考に没頭している。
そのとき。
「礼央くん、楽しそう……」
ぽつりと、そんな呟きが耳に届いた。マシュマロだ。

「な……なにっ！？」
その、意外と言えば意外すぎる言葉に礼央は狼狽した。
「ご、ごめんなさい。でも、なんだか嬉しそうに見えたから」
「お、オレが……嬉しそうに？」
きょとん、とまばたきしながら自分を示す礼央。マシュマロは小さく頷いた。
「いや、そんな……でも……」
思わず、礼央はうなった。言われてみれば、少しだけ……あくまでほんの少しだけ、楽しかったような気がする。

（もしかして……このデュエルで、あいつのことが、分かってきたからか……？）
ぱっと、頭の中でとぐろを巻いていた何かが弾け、必要な回路が繋がったような気がした。
（そうだ……忘れてた、この気持ち！　なんでサモニングモンスターが好きになったか、思い出せた……）
あっという間に、目の前を塞いでたものが晴れていく。そして、礼央は目を開いた。
（デュエルして、強いやつと戦って！　相手のことが分かって！　一緒にもっと強くなれるからだ！）
が、なんとなく悔しかったので、それを口にすることはなかった。

「そうだ、そうだ……分かってた。お前はそんなに臆病なやつじゃない！」
びしっ！　と、礼央は勇生に指を突きつけた。
「あの待ちの構えですっかり驚かされちまったが、そうさ、お前は守ることだけを考えてるやつじゃない。攻めなければ勝つことができないって知っている！」
（ほう……）
レイモンドは感嘆の声をもらした。この短い時間で、礼央は自分の中にあった障害を乗り越えたらしい。

「そもそも、お前はそんなに決断力があるほうじゃない……だから、攻めや守りに傾いた選択をしちゃ居ないんだ。つまり、お前のもう一枚の加護カードは攻撃のためのカードだ！」
「く……っ！？」
勇生が驚きの声を上げる。
「図星だろう！　そして、お前がそのカードをまだ使っていない理由はひとつ……！」

八重歯を光らせ、礼央は勇生にまっすぐ、指を突きつけた！
「まだ、それをドローしていないからだっ！」
「ううっ……！？」
「だったら、答えは簡単だ！　勝負はこれでつく！　食らえ、『天空神の制裁』！」
礼央のプレイに合わせて、ビジョンシステムが空から振り下ろされるハンマーを生み出す。そのダメージは、序盤の猛攻で削られていた勇生の生命力を奪いつくし……
「うわあああああ！」
そして、勝者を決した。礼央の予測が正しかったことを、勇生の悲鳴が裏付けていた。

○門真礼央、ちょっぴり成長する

「デュエルエンド！　門真礼央の勝利だ！」
礼央の手を取って、レイモンドが宣言する。
「よおっしゃあ！」
ぐっと拳を突き上げ、礼央が歓喜の叫びを上げる。
「負けた……さすがだね、礼央くん。強かったよ」
勇生が右手を指しだしてくる。その手を払いのけて毒づいてやろうかという思いが、礼央の頭をほんの少しだけかすめたが、礼央はそれを振り払った。
「お前も、なかなか強かったぜ」
二人は握手を交わす。満足げに、レイモンドは頷いていた。
「って、わたしはどうなるの！？」
マシュマロが叫ぶ。ぱきーん、と男の友情を盛り上げる雰囲気が壊れたようだった。

「任せてっていうから、なんとか勝つ方法があると思ってたのに！」
さすがに賞品にされた身としては溜まったものではないらしい。
「い、いや、今までみたいに何とかなるかと思ってたんだけど……」
曖昧に笑みを浮かべて、勇生が答える。
「み、見通しが甘いわよぉ。礼央くん、こういうのには拘るんだから……」
ちら、とマシュマロが礼央に視線を向ける。が……
「なーに言ってんだよ。マシュマロが誰のものかなんて、そんなの、こんなゲームで決めることじゃないだろ」
「……は？」
勇生とマシュマロが同時に、ぽかんと口を開けて問い返した。

「冗談だよ、冗談！　なんだよ、本気にしてたのか？」
「冗談って、でも……」
「いいだろ。それとも、本気だったほうがいいのか？」
じろ、と礼央が視線を向けると、勇生は困ったように首を振った。
礼央はもう、デュエルをした理由などどうでも良くなっていた。
ただ、認めることができる相手と、全力のデュエルをしたのだ。それで十分だった。

その背を眺めながら、デュエルスペースから下りてくるレイモンドに、マシュマロが問う。
「……もしかして、レイモンドさん。礼央くんが何か得るものがあるって思って、勇生とのデュエルを認めたんですか？
「さあ……どうだろうね？」
肩を軽くすくめてレイモンドが答える。マシュマロは心底疲れ切った様子で、大きく息を吐き出した。
「おい、何してんだ！　もう夜だぞ、飯でも食いに行こうぜ！」

屋上の出口に手をかけながら、礼央が手を振る。レイモンドは、いつもの調子で指を立ててみせた。
「急ぎすぎるのは、よくありませんよ。夕食ぐらいなら、手配しましょう」
「お、さすが！　気が利くな！」
上機嫌の礼央が先に立ち、下へ向かうエレベータへと乗り込んでいく。
勇生とマシュマロは互いに視線を向け合って、はー、と軽く息を吐いてから、後を追って歩き出していった。

「まっ、勝ったのはオレだからな！　またやろうぜ、今度もオレが勝つけどな！」
絶好調と言った様子の礼央の笑い声が響く。それもやがてエレベータが閉まるのでかき消え、屋上にはわだかまりを覆い隠すように闇の帳が下りた。

第3話「狂気の刃」ーその1

○シーン1

その日。伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）は路地裏でカツアゲにあっていた。

「ちょっとだけ恵んでくれればいいんだよ。分かるだろ？」

右側の茶髪の少年が言う。おそらく、高校生だろう。年齢は同じくらいのはずなのだが、小柄な勇生からすれば見上げる格好になってしまう。

「そうそう、ちょっとでいいんだよ。俺たちビンボーでよお」

左側には鼻にピアスを空けた少年がいる。二人は勇生を挟んで壁際に追い詰めるように立っている。路地裏だ。逃げ場所はない。

「い、いや、でも僕、お金あんまり持ってなくて」

表情を引きつらせながら、思わず身を守るように胸の前で腕を折る。世界を守るために滅びた神の力と加護を授かったクエスターとはいえ、まさか武器の原質ともいえる『剣の騎士』を召喚して彼らを傷つけるわけにはいかない。

だいたい、シャードさえなければ普通の高校生と何も変わらないのだ。何度かの戦いを重ねたとは言え、他人に傷つけられることが怖くなくなるわけではないし、カツアゲくらって自分の方が強いからいいんだ、なんて陰湿に納得できるわけでもなかった。

「おいおい、よく考えろよ。手持ちを全部俺たちに恵んでくれるのと、鼻が折れた時の治療費とどっちが高いかくらい分かるだろ？」

茶髪が言う。鼻ピアスが、どんと壁に手を着いた。

「いいから、とっとと出せばいいんだよ！　ぶっ殺すぞ、コラぁ！」

「っ……！」
耳が痛くなりそうな大声で叫ばれて、勇生は身をすくめる。殴られたくはないが、それ以上にいわれもなく金を奪われるわけにはいかない。人通りの多いところまで逃げれば、さすがに諦めてくれるだろう。体当たりでどちらかを突き飛ばして、そのまま一気に逃げよう。そう決めると、茶色がかった瞳に固い意志が表れる。
「なんっだその目は！　一発殴られねえとわかんねえのか！」
勇生の瞳に見据えられ、鼻ピアスが怒りの声を上げる。大きな動作で、拳を振り上げた。
「っ……！」
思わず目をつぶりたくなるのを抑えて、その拳を見る。どちらに体を動かせば避けられるか……感覚でそれを判断できるようになっていた。しかし、勇生は避けなかった。避ける必要がなかったのだ。
後ろから伸びてきた別の手が、鼻ピアスの振り上げた手首を掴んでいた。
「こんな所で弱い者いじめか？　相変わらず、いい趣味してやがんなあ？」
長身だ。一八〇センチ近くはあるだろう。短い髪を真っ赤に染めている。狼のような印象を受けるのは、鋭くつり上がった切れ長の目と、口元にちらちらと覗く犬歯のせいだろう。首輪のような、黒いチョーカーを巻いているのも原因かも知れない。
「て、てめえ……」
現れた少年を見て、茶髪がうなるように言う。その表情に、わずかにおびえの色が浮かんでいた。
「面白いこと言ってやがったな。鼻を折るんだって？」
赤髪の少年が拳を握ってみせる。ひっ、と鼻ピアスが声を漏らした。

「ちょ、ちょっとからかっただけだよ。本気で恐喝なんか考えてねえって！　じ、じゃあな！」
茶髪が早口に言って、鼻ピアスの腕を引っ張っていく。鼻ピアスは何か言おうとしたが、赤髪の少年に睨まれて口を閉じた。

「ふん、根性のない」
「あ……あの」
鼻を鳴らす少年の背に、勇生は声をかける。礼を言おうとしたのだが、
「ああ？」
不機嫌そうに少年が振り返る。鋭い視線を向けられると、思わず口を閉じてしまう迫力があった。

「あ、いや、あの……その」
口ごもる勇生。そのとき、少年の表情が変わった。信じられないものを見るかのように目を見開く。ぐい、と勇生に顔を近づける。
「ひゃあ！？　あ、ぼ、僕、お金あんまり持ってなくて……」
「勇ちゃん！　勇ちゃんじゃねーか！」

「……へ？」
思わず、勇生は相手の顔を見返した。何度も瞬き。
「俺だよ。枡田健（ますだ・けん）だ！」
「け、健くん！？」
相手の顔にわずかに残る面影を感じて、思わず声を上げた。
「やっぱりそうだ！　いやー、懐かしいな！　俺が引っ越して以来だから、8年ぶりか？　こんな所で会えるなんて、いやー、縁ってあるもんだな！」

少年……健が、ばしばしと勇生の背を叩いて上機嫌で言う。
「そ、そう、だね。ぐえ……い、痛いって」

「ああ、悪い悪い。にしても、気をつけろよ。あいつら、木戸仁（きど・じん）ってタチの悪いやつの手下で、この辺で好き勝手やってんだよ」
健が手を引いて、肩をすくめて見せる。それでも、不機嫌そうな表情は消え去っていた。

「そ、そうなんだ。健くんのことを怖がってたみたいだけど……」
「その木戸ってのが何かと俺に突っかかって来るんだよ。あいつらみたいに群れるわけじゃねえけど、おかげで何かあるごとに担ぎ出されて、こっちは迷惑してんだ」
いかにも面倒、と表現するように、健ががりがりと頭を掻く。

「そっか……大変なんだね」
「ま、大したことじゃねえよ。それより、どっか行くところがあるんだろ？」
「え……う、うん。そうだけど、どうして？」

「その制服、瑞珠（ずいしゅ）学院だろ？　瑞珠の生徒が放課後に遊びに行くならこっちの本町じゃなくて新市街だろうし、どこかに用事があるんじゃないかってな。ほら、急いでるんなら早く行けよ」
そう言って、にっと犬歯を見せる。勇生は感心して、笑みを返した。
「うん。……健くん、助けてくれてありがとう」
「ダチが困ってたら助けるのは当然だろ。またな！」

そう言って、また勇生の背を叩く。乱暴だが、どこか暖かみがある。勇生は体勢を崩しながらも、手を振って健と別れた。

○シーン2

「ここ……かな」
健と別れた後、勇生は教えられた住所と、目の前の建物を見比べた。
『骨董屋　花鳥風月』。そう書かれた木彫りの看板が立てられている。こざっぱりとした建物で、ガラス窓から、今ひとつまとまりのない商品が見えている。
本当にここが来るように言われた場所なのか、少し不安に思いながら勇生は店の入り口をくぐった。

「あ、来た！　もう、遅いよ！」
店の中で、少女が振り返る。栗毛がかった長い髪を、後ろで二つにまとめている。大きな青い瞳の上で、なんとなく幼げな印象を与える太めの眉が非難するようにつり上がっている。勇生と同じクエスターにして魔術師、小練（こねり）マーシュ・マロウだ。勇生は彼女のことをマシュマロと呼んでいる。
「遅れないでって言ったでしょ。どこで何してたの？」
「いや、なんていうか……」
答えにつまる。カツアゲされて助けてもらいました、とマシュマロの前で言いたくなかった。なんとなく、彼女の前では見栄を張りたくなるのだ。

「まあまあ、小練さん。彼もわざとやったのではないし、問い詰めても仕方ないわ」
店の奥から、しっとりとした女性の声が聞こえた。そして、のれんをくぐって声の主が姿を現す。二〇歳くらいだろうか。まだ若いのに、藤色の着物がよく似合っている。髪は頭の後ろ側で一つに結っていた。イギリス人の血が入っているマシュマロとは違って、いかにも大和撫子、と言った風情だ。女性が、垂れ気味の目を勇生に向けた。
「あなたが、伝宝勇生くん？」

「あ……は、はい！」
ぴんと背筋を伸ばして答える。
「何を顔赤くしてるのよ」
じと、とマシュマロが視線を向けてくる。女性は口元を隠してころころと笑ってから、
「私は、来嶋牡丹（きじま・ぼたん）。今日から、あなたたちの顧問になることになりました。よろしくね」
「顧問……って？」
勇生は説明を求めてマシュマロを見る。
「魔術師連盟に報告したら、N市に拠点になる場所を用意した方がいいって言うから、人を紹介してもらったの。牡丹さんは連盟の構成員だから、連盟と連絡を取ったり、いろいろとサポートしてもらいなさいって。学校からも許可をもらって、わたしたち魔法部の外部顧問ってことにしてもらったのよ」
「そ、そうなんですか。そんな風には見えないですけど……」
勇生は思わずまじまじと牡丹を見てしまう。この若さで骨董屋、と言うだけでもなんとなく妙な感じなのに、その上魔術師だと言われても、にわかには信じられない。
「れっきとした魔術師で錬金術師よ。この店だって、骨董品だけじゃなくて魔法のアイテムや薬品を扱ってるのよ」
マシュマロが周りを示して語る。言われてみれば、確かに所々から強いマナや独特の反応を感じる。
「君も、クエスターなんでしょう？　若い人の力になれてうれしいわ」
牡丹が笑顔で言う。勇生はかっと顔を赤くして頷いた。

「い、いえ、牡丹さんだってすっごくお若いじゃないですか！　ぼ、僕も牡丹さんみたいな人に助けてもらえるなら、うれしいです」
「まあ、お世辞が上手ね」
「お世辞だなんて……いいっ！？」
突然、二の腕に痛みが走った。マシュマロが抓っている。
「無駄口叩いてないで！　牡丹さん、まだ用事があるんでしょう？」
ふくれているマシュマロの様子に笑みを漏らしながら、牡丹が頷く。
「ええ。こんな所で立ち話もなんだから、奥に来てちょうだい」
二人は骨董屋『花鳥風月』の奥にある和室に通された。上品な雰囲気の部屋で、壁には「夏炉冬扇」と書かれた掛け軸。ほんのりと、何かの花のにおいが漂っている。
「あなたたちの今までの活動は聞いたわ。以前、同級生の女の子を奈落から助けたでしょう？」
二人にお茶を勧めながら、牡丹が言う。
「寿美地歩（すみ・ちほ）さんのことですか」
マシュマロが問う。牡丹は静かに頷き、
「連盟が彼女の記憶から奈落のことを忘れさせようとしたんだけど、彼女、ちょっと特殊な体質みたいで。ちょっと、普通の方法ではうまく記憶を操作できなかったのよ」
「そ、そうなんですか？　それで……？」
勇生が思わず身を乗り出す。地歩は彼にとって大事な友人だ。まさか、何かあったのだろうか、と満面に懸念が浮かんでいる。
「そんなに心配しなくても大丈夫よ。記憶操作のスペシャリストに頼んで、何とかしてもらったから」
ほっと勇生が息を吐く。

「でも、その記憶操作を頼んだ相手が、交換条件を出してきたのよ」
「交換条件、ですか？」
牡丹がまた頷く。それから、部屋の奥を振り返った。
「いいわよ、入ってきて」
「はいっ！」
幼げな声で返事が聞こえた。そして、すたすたと軽い足音と共に、小さな影が入ってくる。黒い髪に鈴のついた、小さな少女。九歳か十歳というところだろうか。その姿は、ちょっと普通ではなかった。
紅白の千早……いわゆる巫女服に身を包んでいる。それだけでも充分おかしいが、それ以上におかしなものが『付いて』いた。茶色がかった黄色い毛に覆われた、大きな耳と尻尾。しかも、尻尾は二本だ。まるで……
「き、きつね？」
勇生は思わず呟いた。マシュマロもぽかんとした表情だ。
「はいっ！　キツネ人（フォックスティール）の御子柴（みこしば・みさる）貞流と申しますぅ！」
元気いっぱいな様子で少女が言う。困惑至極の勇生たちの顔を見て、牡丹が少し人の悪い笑みを浮かべた。

「さっき言った、記憶操作のスペシャリストっていうのは、彼女たちキツネ人のこと。キツネ人はお稲荷様の眷属なのよ。昔から、『キツネに化かされる』とか言うでしょう？　彼女たちには、人間の心を乱したり、記憶を操ったりする力があるのよ。ほとんどはこの世界から隔離された幽界に暮らしてるから、普通の人は知らないけれど」
牡丹が説明を加える。少女、貞流がそのとなりで小さな胸を張る。
「ミサは、天狐様の血に連なる立派なキツネ人なんですよぅ！」
「そ、そうなんだ。でもえっと、牡丹さん……彼女と、その交換条件と、なんの関係が？」

マシュマロがなんとか表情を立て直して聞く。
「貞流ちゃん、見せてあげて」
「はいっ！　これですぅ！」
貞流が大きなキツネ耳に手をやり、その耳飾りに触れる。耳飾りには紫色の勾玉が飾られており、夜の月を思わせる光を照り返している。

「それって……もしかして、シャード、ですか？」
シャード。今は失われた神の欠片であり、大量な魔力（マナ）を備えた力の結晶である。これを持つものはクエスターと呼ばれ、世界を侵蝕する悪しき存在、『奈落』と戦う運命にあるのだ。
「そう。彼女はクエスターとして、この世界……人間界、って言いましょうか？　人間界で修行を積まなければならないんだけど、キツネ人たちは人間界に詳しくないから。だから、クエスターとして彼女の面倒を見てくれないか、って言われたのよ。それが、キツネ人たちが提示した交換条件なの」
牡丹が答える。
「というわけで、よろしくですぅ！」
にっこりと真っ赤なほっぺに笑みを浮かべ、二本の尻尾を振りながら貞流が言った。

第3話「狂気の刃」ーその2

○シーン3

牡丹が店番に戻った後。部屋に残された勇生とマシュマロは、貞流と向かい合っていた。

「人間界ってどんなところなのか、興味があるんですぅ！　ああ、ようやく幽界から出て来られたのですから、人間界のことをもっと知りたいんですぅ！」

瞳を輝かせて、貞流が二本の腕とついでに尻尾を振りながら言う。

「面倒を見ろっていうのは、人間界のことを勉強させろっていうのも含まれてるのかな」

勇生が呟く。マシュマロは首をひねり、

「そういうこと、かなぁ。人間の世界を見せるのはいいけど、その格好じゃ、ちょっと」

マシュマロが貞流の姿を眺めて言う。紅白の千早で、街中を歩いて目立たないわけがない。しかも、耳と尻尾までついている。

「着替えればいいんですねっ。それじゃあ……」

貞流が両手を広げて、複雑に指を組む。『印を結ぶ』というやつだろうか。そして、最後に甲高い吠え声を上げる。直後、ぼんと小さな音と共に、貞流の体が煙に包まれる。煙が晴れた時、貞流の服装は紫がかった白いワンピースに変わっていた。

「すごい」

思わず、勇生は呟いていた。

「キツネ人として当然ですぅ！　ほら、これでいいですよねっ」

貞流はわくわくした様子だ。スキップするような仕草で出口に飛び出していこうとする。

「待ちなさい」
「ひゃい！？」
横をすり抜けようとする貞流の尻尾を、マシュマロが掴む。力の抜けた貞流はその場に崩れ落ちる。

「服替えたって尻尾生やしてちゃ意味ないじゃない」
「はうっ。で、でも、集中してないと尻尾はすぐに出てきちゃうんですぅ」
貞流がしゅんと下を向く。
「じゃあ、ちゃんと集中してなさい。人間界に居たいんなら、人間に迷惑かけちゃだめ。耳は帽子かぶせれば隠せるかな……」
マシュマロが頬に指を当てながら呟く。お姉さんぶった様子に、思わず勇生の頬が緩む。

「まあ、尻尾が出たって、最近はアクセサリーだと思われるかもしれないし。そんなにパニックになるほどじゃないよ。でも、できるかぎり集中してね？」
かがみ込んで、貞流に視線を合わせる。貞流はこくんと大きく頷いた。

結局、貞流には帽子をかぶらせ、あまり人目につかないようにすること、と言い聞かせ、三人は外出した。普通人から魔法の存在を秘匿する連盟の構成員として、マシュマロはもっと厳しく当たろうとしたのだが、勇生になだめられて渋々ながら納得した。
勇生が先ほどやられたようにガラの悪い連中に絡まれるとやっかいなので、大通りを選んで歩く。貞流は目につくものすべてが珍しいらしく、何かあるたびに感動していた。

曰く、

「みんな小さな箱を持ってますぅ。偉い人から配られるんですかぁ？」
彼女の知識は微妙に古い。テレビは知っているが、携帯電話は知らなかった。

曰く、
「うう、知らない文字が多くてくらくらしますぅ……」
アルファベットは読めないらしい。

曰く、
「変な色の頭ですぅ！　あれは病気ですかっ！？」
さすがに、その場から全力で逃げた。

そんなわけで、きゃあきゃあと騒ぐ貞流に疲れた二人は、
「あ、あそこがいいですぅ！　ミサ、ああいうのが食べてみたかったんですぅ！」
と貞流が指さしたハンバーガーショップに入ることに反対はしなかった。

「いただきます！」
紙に包まれたハンバーガーを前に、貞流が両手を合わせる。まだ夕食には早い時間だからだろう、店内の客の姿は多くない。
「勇生さん勇生さん、これ、どうやって食べるんですぅ？」
貞流が瞳を輝かせて勇生を見上げてくる。

「こうするんだよ」
答えて、包み紙を開く。バンズに包まれたチーズとレタス、そしてミートパティがあらわになり、マヨネーズの混じったソースの香りがどこか押しつけがましく香る。勇生はハンバーガーの下半分を

包み紙と一緒に両手で掴み、口に運んでみせた。食べ慣れた味が口の中に広がる。安っぽいが、だからこそ自分たちのために作られたんだ、なんてことを感じてしまう大量生産の味。うまい、なんて大声で叫んだりしないけど、また何日かしたら食べたくなる、そんな味だ。

「おおおー。分かりましたぁ！」

貞流の小さな手が、貴重な美術品を扱うように、そっとした手つきでハンバーガーの包み紙を開いていく。そのたび、貞流の頬がぴくぴくと震えて、何か言葉にしがたい感動を表現しようとしていた。

あーん、と大きく口を開き、貞流がハンバーガーの端にかじりつく。勇生の半分ほどの量を口に含んで、目を閉じて租借する。ソースを口の周りにべったりつけたまま、むぐむぐと口を動かした後、細い喉が動いてハンバーガーを飲み込む。

「おいしいですぅ！」

満面の笑みを浮かべて言ってみせる。勇生の目には隠しきれなくなった耳がまた現れて、帽子をぽこりと浮かせたのが分かったが、隅の席だし、店を出る前に言ってあげればいいだろう、と黙っておくことにした。

「ほら、口の周り拭いて」

使い捨てのテーブルナプキンで貞流の口をぬぐってやる。貞流は首を上向けて勇生がソースをぬぐい終わるのを待ってから、次の一口に取りかかった。

ふと、勇生はずっと黙っているマシュマロのことが気になって向かいの席に目を向けた。マシュマロはハンバーガーの上のバンズを開き、むき出しになったミートパティに向かって、なにやら黒いモノが詰まった小瓶を傾けている。

「な、何してるの？」

勇生が聞くと、マシュマロは小瓶の中身……なにやら、ぼそぼそ

した粉末のようだ……をミートパティの上に振りかけ、そこから目を離さずに答える。
「こういうの、わたしにはあんまり美味しくないから、味を調整しようと思って」
ばさばさとミートパティの表面を真っ黒にして、ようやくマシュマロは手を止めた。

「そ、そうなんだ。イギリスから送ってもらったの？」
「うん。トカゲの黒焼き」
マシュマロがバンズをかぶせ直しながら答える。しばらく、沈黙が降りた。その間に、勇生の鼻には何とも言い難い、苦いにおいが漂ってくるのが感じられた。

「お、おいしいの？」
「うん。味に深みが出るって言うか、手軽においしくするにはやっぱりこれかなって」
マシュマロがこくりと頷いて見せる。なんとも自然なその動作に、なんとなくそれ以上聞く気になれなかった。ぱく、とハンバーガーにかじりつくマシュマロは、満足げに鼻の奥を鳴らしてみせる。
「うん、やっぱりこの味よね」

どことなく安心したような表情でマシュマロが言う。漂ってくるにおいでなんとなく胸が苦しくなってきた勇生は、そっとハンバーガーを置いた。
「トカゲをかけると、もっと美味しくなるんですぅ？」
「全然違うわよ。貞流ちゃんも試してみる？」
マシュマロは上機嫌だ。貞流の鼻先に自分のハンバーガーを差し出した。くんくんと鼻を鳴らした貞流が、意を決した様子でぱくりとかみついた。

「ど……どう？」
勇生が問う。貞流は口を動かすうち、徐々に眉間にしわが寄り、
「ミサは、普通のほうがいいですぅ……」
がくりとうなだれて言った。勇生は自分の味覚が正常だったことを確かめて、ほっと胸をなで下ろした。

貞流はポテトやシェークにも大いに感動して店中の視線を集めた。さらにマシュマロが動物の血を精製して作ったとかいう赤い液体をケチャップ代わりにポテトにつけはじめ、店を出るころには勇生がへとへとに疲れていたことは言うまでもない。

○シーン４

ハンバーガーショップで休憩にならない休憩を終えた後、今度はゲームセンターに行きたいと言い出した貞流の意見を受けて、三人は比較的大通りに面した大型のゲームセンターに向かった。筐体のゲームは貞流にとっては難しかったらしく、すぐにさじを投げた。マシュマロが音楽ゲームに熱を上げている間、勇生は貞流の期待に応えて、クレーンゲームで景品を取るのに時間を費やした。
そんなわけで、三人がゲームセンターを出る頃には日はとっぷり暮れていた。
勇生とマシュマロの前を、貞流が鼻歌を歌いながら歩いている。腕には大きな座布団を抱えて、弾むような足取り。
「そんなもの、うれしいかなあ？」
あまりにもうれしげな様子を見て、勇生は首をかしげる。貞流は両手で座布団を抱え上げ、
「お揚げみたいで美味しそうですぅ」
輝く瞳で座布団を見つめてから、ぎゅー、っとまた抱きしめる。

「って、うれしいのはいいけど、また尻尾出てるってば！」
慌てた様子でマシュマロが貞流の背中を隠す。
「もう、連盟からちゃんと面倒見るように言われてるんだから、あんまりはしゃがれるとわたしたちまで困るのよ。たまたまここは人通りがないからいいけど……」

指を立てて言ううちに、ふとマシュマロが顔を上げる。勇生もつられて、周りを見回す撃ちに気づいた。
「人通りがない……って」
不意に背筋が冷たくなった。大通りに面したゲームセンターを出たばかりの道だ。花鳥風月に向かっていく途中、いきなり人通りが途絶えるような道はないはずだ。
「結界！　勇生、貞流ちゃん、気をつけて！」
マシュマロが胸のブローチから、錬金術の粋を集めた魔術兵器チャンバースタッフを取り出す。貞流がくんと鼻を上に上げた。

「奈落のにおいですっ！　近づいてきてますぅ！」
貞流の尻尾が二本そろってぴんと上を向く。勇生は二人の前に立ち、周りを見回した。結界は周囲から空間を孤立させる魔術的儀式だ。世界を歩とぼそうとする存在である奈落が勇生たち三人を結界で囲ったからには、彼らのシャードを狙っているのに違いない。シャードは豊潤なマナの結晶体であり、これを手に入れることができれば奈落はさらに力をつけることができるのである。
不意に、眼前の通りに黒い泡のようなものが沸き立った。その中から、十人以上の人影が現れる。胸の中程にぽっかりと黒い穴が空き、奈落の触手が体じゅうを這い回っている。まるで生気のない表情。濁った瞳が勇生たちを捉える。

「不完全奈落者

アビズマルディゾナンス
！」
マシュマロが叫ぶ。二人に目配せし、
「奈落に憑かれた人間よ。奈落者
スペクター
の手下みたいなもの。でも、似たようなタイプに比べて、強いマナを感じるわ。奈落者が強力な手下を生む力を持っているのかも」
マシュマロの頬を汗がゆっくりと伝う。

「どうすれば？」
勇気が問う。
「奈落のマナを除去できれば……」
「つまり、いつもと同じように戦えばいいってこと？」
マシュマロが頷いた。勇生は懐から魔法の短剣、セキュアダガーを取り出し、前に駆け出す。

「マシュマロ、援護を！　剣王、僕に力を！」
掲げた左手に、異界の門を通じて剣が生み出される。見た目よりもずっと軽いその剣こそ、異界の存在、剣の王が携えるという七十七の武器の一つ、『剣の騎士』と呼ばれる武器だ。勇生は二本の重さ以外は不揃いな武器を構え、エックス字に斬りかかる。胸元の穴めがけて斬りかかり、うごめく触手を斬り払う。それでも、マナすべてを取り除くにはいたらない。周囲の不完全奈落者がわっと勇生を取り囲む。
「勇生！」
不完全奈落者の腕がぼこぼこと不自然に膨らみ、大ぶりの拳が振り落とされる。勇生がすんでの所でその拳をかわすと、すさまじい音を立ててコンクリートの地面が凹んだ。
マシュマロがチャンバースタッフを手に、複雑な呪文を唱える。

詠唱だけでは間に合わないため、チャンバースタッフに収納された魔法弾からマナを補い、身振りによってマナの操作を補助する。強力な呪文を行うことができるのはいいが、時間がかかるのが欠点だ。だから、マシュマロにとっては勇生のように敵の動きを引きつけてくれる味方が必要なのだ。

「貞流ちゃん、下がってて！　わたしが魔法で倒すから」

「むっ！　そんな言い方ってないですぅ！　ミサだってクエスターなんですから！」

叫ぶと同時、貞流が両手を前に突き出した。いくつかの複雑な印を組んだ後、親指と人差し指で三角形を組む。

「烈火、猛火、炎！」

短い呪文に応え、うごめく炎が指の間から放たれる。炎は竜巻のようにうねったかと思うと、勇生に向けて腕を振り上げた不完全奈落者の体を焼いた。

威力はマシュマロの錬金術を駆使した呪文には及ばないが、素早い術の展開だ。見かけの年齢に比して、高度な呪文の制御である。

「今ですぅ！」

自分とは違う魔術の使い方に見とれそうになっているマシュマロを振り返り、貞流が指を突き出す。

「う……うん！」

慌てたマシュマロがチャンバースタッフを振り上げ、

「マナよ、炎の槍と化して我が敵らを焼き尽くせ！」

叫ぶ。振り上げたチャンバースタッフから、炎が飛び出し、無数に別れて不完全奈落者の元へ向かう。ほとんどはその炎に巻かれるが、わずか数体が、素早く身を逸らしたのにマシュマロは気づいた。

「くっ、逃し……っ？」

一瞬、目の前にかすみがかかったようにぼやける。次の瞬間には、

身を逸らしたはずの不完全奈落者が炎に巻かれていた。

「あ、れ、今……？」

勇生も思わず瞬きしている。くす、とマシュマロの後ろから小さな笑みが聞こえた。

「夢はうつつ、うつつは夢、ですぅ」

貞流の小さな指が、何かをたぐるように動いていた。彼女が何かをしたのだ、とマシュマロは気づいたが、今はそれを問う時間はない。不完全奈落者たちの間でふくれあがる炎に意識を集中する。

「我がシャードよ！　死者の女神の加護を与えよ！」

胸のシャードから赤い光が広がる。ばっと炎がいくつにも広がり、別れ、跳ね回って不完全奈落者たちの体を……いや、その体を包む奈落を焼き尽くした。

奈落から解き放たれ、憑かれていた人々がばたばたと倒れる。

「やった……ね。さっきの、貞流ちゃんがやったの？」

勇生が二つの剣を収めながら聞くと、貞流は座布団を拾い直しながら、二本の尻尾をふるふると上機嫌に振って見せた。

「因果の紐を解いて接ぎ直すのは、キツネ人の秘伝ですぅ。何でも思うようにできるわけじゃないですけど」

にっこり笑いながら答える。勇生がその頭を撫でてやると、

「むっ。同じクエスターとして一緒に戦った仲間の頭を撫でるのはおかしいですぅ！」

と言って、その手をかわした。

「そ、そっか。ごめん」

「にしても、どうしてこんな所に奈落が。また、奈落者がこのあたりに居るのかしら」

携帯電話で牡丹に連絡を取っていたマシュマロが呟く。
「分からないけど、僕たちを狙ってたみたいだ。調べなきゃ。こうして、被害に遭ってる人も居るんだし」
奈落に憑かれていた人々を見下ろし、呟く。彼らの処遇は連盟の処理班に任せるにしても、知らない場所で誰かがまた奈落の毒牙にかかっているかもしれないのだ。
「これが奈落なんですねっ。実物は初めて見たですぅ。ミサ、長老様から奈落についてちゃんと勉強するように言われたから、ミサも一緒に調べたいですぅ！」
片手で座布団を抱えたまま、貞流が片手を振り上げる。マシュマロは小さく頷き、
「もうちょっと、警戒心を持って欲しいけど。とりあえず今は花鳥風月に戻りましょ」
マシュマロが言う。奈落によって張られた結界が解け始め、人通りが戻り始めているのだ。
「うん。今晩はもう遅いし、調査は明日からだね。行こう、貞流ちゃん」
勇生は貞流の手を取り、牡丹の待つ花鳥風月へと歩き出した。

第3話「狂気の刃」ーその3

シーン5

長い授業が終わった。勇生とマシュマロは並んで魔法部の部室に向かう。部室の中に入るまでは、奈落だの魔法だのの話はしない。部室には弱い結界が張られており、中の様子が外に漏れにくくなっているのだ。マシュマロによると、部室の中の話が外に聞こえていてもなんとなく記憶には残らない、のだそうだ。

勇生が部室の戸を開く。脇に退いてマシュマロを先に入らせようとした（マシュマロはこういうマナーに結構うるさいのだ）とき、

「あ、ようやく来たですぅ！　もう、待ちくたびれましたよぅ」

中から声が聞こえてきた。

「貞流ちゃん！？　なんで魔法部に……って、なんて格好してるのよ！」

マシュマロが慌てた様子で駆け込んでいく。勇生を振り返り、

「は、はやくドア閉めて！」

勇生も後に続いて部室に足を踏み入れ、戸を閉める。部室の中に目を巡らせると、部室の隅にちょこんと座った女子生徒の姿を見つけた。栗毛がかった明るい髪を二つに分けて結い、青い瞳の上には、少し太めの眉が乗っかっている。つまり、それは小練マーシュ・マロウの姿だった。違うのは、黄色いキツネ耳と二本の尻尾がくっついていることだ。

「み、貞流ちゃん！？　なんでそんな格好……」

「だって、学校に入るなら生徒の格好しなきゃ駄目ですよぅ。ミサはお二人のことしか知らないですしぃ、勇生さんよりはマシュマロさんのほうがやりやすいですぅ」

マシュマロの姿をした貞流がにっこりと笑ってみせる。顔つきはマシュマロのものでも、どこか幼い表情は貞流のいつもの姿が重なって見えるようだ。

「だからって……あー、もう、まあいいわ。誰かに見つかってない？」

「はい！　見られたかも知れないですけど、目立つようなことはしてないですぅ」

「耳と尻尾は隠した？」

「はいっ！　それに、魔法の素質のない人に見られても、どうせ気づかないですよう」

貞流が自分の耳を押さえるようにしながら言う。

「え。……そうなんだ？」

「一応、マナをはっきり感じられる人じゃなければ、貞流の耳や尻尾は見えないと思うけど……でも、魔法の素質がある人って、何人かに一人は居るのよ？　ちゃんと、意識して隠しなさい」

両手を腰に当て、子供を叱るような仕草でマシュマロが言う。

「むー、ここは結界が張ってあるから大丈夫ですよぅ。それより、聞いてください」

貞流が胸の前で手を叩き、懐から布を取り出し、テーブルの上に広げてみせる。布には中央に白黒の太極図が描かれ、方位ごとに複雑な模様が描かれている。その上に書道用の半紙を重ねる。

「ふっふっふ。昨日の奈落について、ミサの占いで正体を探って見せるですぅ」

「占いって……そんなことで、何か分かるかなあ」

呟く勇生に、ちっちっち、とマシュマロが指を振って見せる。

「占いは魔法の力を使った、れっきとした技術よ。モノとモノの間

には縁があって、その縁をたどることで分からないことや、未来のことを調べることができるの。わたしは、あんまり得意じゃないけど……」
「ミサは、幽界でちゃんと修行を積んだんですからっ。調べ物もお任せあれですぅ！」
そう言って、貞流はにっこりと笑ってみせる。
「お二人は、大きな声を出したり、身振りをしないで見守っていて欲しいですう。ええっと、昨日襲われた街はこっちの方だから……」
貞流が方向を調整しながら言う。勇生は頷いて、マシュマロと一緒に壁際まで下がった。貞流はさらに懐から、筆と市販の容器に入った墨汁を机の上に置く。

「地脈よ、地脈。ぐるりと回って輪を描いて」
方位をそれぞれ、北から東、南から西を指でなぞる。そして、筆に墨汁をつけ、太極図に重ねた半紙に大きく円を描いた。

「N市を巡って獣の足跡、鳥の羽音、花の芳香を伝えたまえ、ですぅ」
目、耳、鼻を順番に指で触れる。大きく開かれた目は何かを探るように、半紙の上を……いや、その中に浮かんでいるのであろう、何かを見つめている。

「奈落のにおいですぅ。関わりのある因果の糸を手繰るですぅ」
貞流の指が半紙の上で滑る。十本の指がくねって何かに触れようとするかのように動く。やがて、

「奈落と関わりのある言葉が浮かんできたですぅ！　これは、たぶん人の名前……ですぅ！」
「本当！？　それは……？」
「いま、分かるですぅ！」

墨汁をつけた筆を、貞流が手に取る。半紙の上で手を離すと、その筆は誰にも握られていないのにひとりでに動き始める。筆が動きを止め、ぱたりと倒れたときには、半紙の中央に『木戸仁』と文字が書かれていた。

「……出たですぅ！　きっと、この人が奈落について何か知ってるですぅ！」

汗ばんだ額をぬぐいながら、マシュマロの姿で貞流の笑みを浮かべてみせる。

「すごい！　本当にそこまで分かるなんて……でも、いい加減その格好はやめてよ」

マシュマロが喜色を浮かべながらも、困ったように眉を下げる。

「でも、木戸仁、ってどこかで聞いたような……」

勇生が半紙に書かれた字を見つめて記憶を探っているとき。不意に部室の戸が開かれた。立っていたのは、マシュマロよりも少し小柄な少女。セミロングの髪のサイドをリボンで後ろにまとめている。なんとなく、絵画に描かれた聖母を思わせるような、柔和な笑みの似合う顔立ち。勇生やマシュマロの同級生、寿美地歩だ。

「勇生くん？　今日、なんだか急いでたみたいだから、差し入れと思って……」

と、のぞき込んだ地歩の表情が驚愕に染まる。

「こ、小練さんが二人？」

勇生はハッとした。慌てて貞流と地歩の間に割って入り、両手を広げて貞流を隠す。

「あ、か、彼女、マシュマロの双子の妹でさ！　こ、この学校のこと見学したいっていうから！」

「そ、そうそう！　言い出したら聞かない子で、いきなり制服まで

用意しちゃって！　困った子よね！」
　きょとんとした様子の地歩がそっと貞流に指を向ける。
「でも、その耳……」
「み、見えるんですかぁ！？」
　貞流が驚いてがたりと立ち上がる。
「見えるって……」
「こ、こういうアクセサリーが流行ってるのよ、イギリスでは！
イギリスのごく一部の地域では！」

　貞流の口を塞ぎながら、マシュマロが言う。
「ぼ、僕も最初会ったときはびっくりしたけど、見慣れたら案外かわいいっていうか！　そ、それより差し入れって？」
　勇生がずいと地歩の目の前に立つ。その背中で口と鼻をふさがれた貞流がばたばたと手足を振ってもがいていた。
「う、うん、飲み物だけど……な、なんだか大変そうだね。私、あんまり長居しないほうがいいかな」
　はにかむような笑みを浮かべる地歩。勇生は頭を掻きながら、

「そ、そんなことないけど……で、でも、彼女、マシュマロの妹さん、人見知りするから。そ、それに地歩も部活があるでしょ？　さ、差し入れありがとう！」
　勇生は地歩の背を半ば押し出すようにして部屋の外に出させる。
「う、うん……な、なんだか大変そうだし、私も部活に行くね。じゃ、じゃあね」
　地歩の表情からは『ここにいると迷惑がかかりそうだから』という字が読めるようだった。

　勇生は閉めたドアにもたれて、二人を振り返った。口を塞がれた貞流が抵抗をやめて、ぼんと煙を上げてキツネ耳の少女の姿に戻るところだった。

「け、結界があったんじゃないの？　それに、貞流ちゃんの耳だって地歩からは見えないはずじゃあ……」
「け、結界はちゃんと残ってるわよ。考えられるのは、牡丹さんの言ってた通り……寿美さんが、魔法の影響を受けにくい体質なのかも」
　マシュマロが眉を寄せて呟く。勇生は額に浮かんだ汗をぬぐいながら、
「うう、じゃあ、地歩には気をつけなきゃ駄目ってことか……」

「それより、問題はこっちですぅ」
　少女の姿に戻った貞流が、半紙に書かれた名前を示す。
「まったく、あなたが勝手にわたしの姿になったせいだっていうのに……でも、確かに奈落の対策はしなきゃいけないわね」
「そのことなんだけど、僕に心当たりがあるんだ。……今から調べに行くから、任せてくれないかな」
　勇生が二人に向けて言う。マシュマロは驚いて、貞流は不満げに勇生を見上げた。

「いいけど……どうするの？」
「ずるいですぅ。ミサも行きたいですぅ」
「その名前、聞いたことがあるんだ。ええっと……貞流ちゃんにはちょっと危ないから。マシュマロと一緒に、牡丹さんのところで待ってて」
　勇生は不満を漏らす貞流をなんとかなだめ、放課後のN市へとバスで降りていった。

○シーン6

　本町にやってきた勇生は、意を決してある人を捜した。勇生たち

とは違う高校の制服を見つけ、「彼」の居場所を聞いた。一見、気合いの入った風の高校生たちの反応は意外にもあっさりしたもので、「彼」の知り合いだと分かると、すぐに連絡先を教えてくれた。
本町の片隅にあるラーメン屋。胸がいっぱいになりそうな豚骨のにおいがぷーんと漂う店で待っていると、「彼」……枡田健が大型バイクに乗ってやってきた。駐車スペースにバイクを置いて、堂々たる様子で店の中に入ってくる赤い髪の少年。どうやら健は常連らしく、五十がらみの店の主人も他の客も、ちらりと見ただけで別段迷惑そうな様子は見せなかった。
「勇ちゃん、待たせたな。いやー、こっちも立て込んでてよ。でも、勇ちゃんが頼ってくれてうれしいぜ」
勇生の座る席に、どかどかと近づいてきた健が向かいあって座る。
「まだ食ってないのか？　それじゃあ親父、豚骨二つな。ここのはうまいんだよ。クドいけど、それがよくてさ。……なんだよ、にやにやして」
健が肘をテーブルに載せながら顔を近づけてくる。勇生は慌てて首を振った。
「な、なんでもない。健くん、変わってないなって思って」
「そうかぁ？　まあ、そうかもな」
健が肩をすくめて見せる。昔からそうだった。健は人に頼られるのが好きなのだ。勇生が困ったときにはお節介を焼いては助けてくれた。以来、勇生も健のことを頼るようになった。なんとなく、以前と同じように彼を頼るのはごく自然なことに思え、その感覚がやけに懐かしかった。
「で、どうしたんだ？　この前急いでたのと関係あるのか？」
健が狼のような鋭い目を向けて聞く。
「あると言えばあるんだけど。えーと、なんて言えばいいかな……」

考えこんでいる間に、二人前のラーメンが運ばれてきた。チャーシューとメンマ、ネギに海苔が添えられている。かなり強い豚骨のにおいが漂ってくる。インスタントのものは食べ慣れているが、こんなにも強烈なにおいははじめてだ。一瞬、食べるのがためらわれて、ちらと健の様子をうかがう。健は早速割り箸を割って、舌なめずりしながらラーメンに取りかかっていた。

「このにおいがいいんだよな。気持ち悪いとか言う女が多いが、これがなきゃ豚骨じゃねぇよな」

そう言って、丼ごと両手で持ち上げて、スープをすする。そのうれしそうな様子を見ると、さすがにいらない、とは言えない。勇生はレンゲでスープをすくって口元にふくんだ。一瞬で喉と鼻の裏側まで迫ってくるような濃厚な味とにおいがいっぱいに広がる。ごくりと喉を鳴らして飲み込んでも、熱と一緒に後を引く味が口の中に張り付くようだ。お冷やを口に含んでも流しきれないほどで、勇生は熱っぽく息を吐いた。

話をするのは置いておいて、麺をすする。硬めの麺がスープと一緒になると、口の中で麺を噛むたび、そこから豚骨のダシが染み出してくるようだった。さらに続けて、ずるずると音を立てて麺をすする。

「って、無言で食うほど気に入ってくれたのはうれしいけどよ。……話はどうした？」

「んぐ？」

健がその姿を眺めているのに気づいて、慌てて口から垂れた麺を飲み込む。もう一度お冷やを口に含んでから、

「ごめん、つい、おいしくて。ええっと、健くん、前に『木戸仁』って人のこと、言ってたでしょ？　その人について、教えて欲しくて」

その名前を出したとたん、健の表情が鋭くなる。ぴりっと空気ま

で緊張するようだ。
「あのヤローと関わりがあるのか？」
健が視線を向けてくる。静かな迫力。勇生は謝って逃げ出したい衝動に駆られたが、すぐにそれを打ち消した。
「その人が、大きな事に関わってるかもしれないんだ。おねがい、教えて」
まっすぐに視線を返す。健はその瞳の奥にあるものを察してか、ゆっくりとスープをすすってから、
「……事情はともかく、大事なことみたいだな。でも、アイツはヤバいからな。必要以上に深入りするなよ」
そう言った。勇生が頷くのを確かめ、健は麺をすすりながら話を始めた。
「木戸はここらのガラの悪いやつの頭みてえなやつだ。ケンカが強いのと、あとは……性格のせいだな」
「性格って？」
「あいつはなんつーか、キレてんだよ。他のやつがビビってやらないようなことも平然とやっちまう。弱いやつは徹底的にいたぶるし、強いやつには報復するまで恨みを忘れねえ」
奈落が好みそうな性格だ、と勇生は思った。
「そんなやつだから、周りがビビって誰もアイツの顔色をうかがって、気がついたら群れてお山の大将に収まったってわけだ。今じゃ、たちの悪い遊びを考えちゃ、周りのやつを巻き込んでるみたいだな」
「たちの悪い遊びって？」
「高速でレースさせて、遅かったやつには『罰ゲーム』をさせたりな」
罰ゲーム。さすがにその内容を聞くのはためらわれた。勇生が黙っているのを、おびえていると考えたのだろう。健は、手をひらひ

らさせて、

「悪いことは言わねえ。あんな立つと関わるのはやめて……」

そのとき、場違いにポップな音で、勇生の携帯電話が着信を伝えた。マシュマロからかかってきたときの着信音だ。

「わ！　ご、ごめん。ちょっと待ってて」

健に背中を向け、慌てて通話ボタンを押す。

「マシュマロ？　今話を聞いてるところだから、また後で……」

「それどころじゃないのよ！　気づいたら貞流ちゃんが、居なくなってたの！　置き手紙で、占いで木戸って人の居場所を見つけたから、自分ひとりで解決してみせるって！」

勇生の表情からさっと血の気が引く。

「そ、それで……？」

「これから、牡丹さんと一緒に貞流ちゃんの居場所を探ろうとしてるけど、でも、時間かかりそうで……」

「ち、ちょっと待って！」

携帯の通話口を押さえながら、健に向き直る。健はただならぬ様子を感じたのだろう。すでに立ち上がっている。

「け、健くん。木戸って人がどこにいるか、分かる？」

「心当たりはいくつかある。ヤバいことになったみたいだな？」

勇生は頷く。

「その心当たりの場所、教えて欲しい」

健は横に首を振った。

「そんな！　友達が危ないんだ」

「違うよ。歩いて回ったら時間が掛かるだろ。乗せてやるよ」

そう言って、キーを取り出してみせる。店の駐車場に止めた大型

バイクのキーだ。
「でも……」
「ダチが困ってるときに、力を貸すのは当然だろ。その代わり、ここは奢ってくれよ」
健が犬歯をむき出して笑ってみせる。勇生は頷いた。迷っている暇はない。

勇生は健のヘルメットを借りて、その背中につかまった。大きなエンジンの振動を体に感じながら、街へ飛び出していく。
時刻は、夜になり始めていた。

第3話「狂気の刃」ーその4

○シーン7

廃工場の中は、しんと静まり帰っている。本来ならば騒がしく動き回るための場所が動きを止め、この場所の主役であるはずの作業機械たちはここから消え去り、あるいは動きを止めている。壁は所々濡れて滴を垂らしているが、いつ降った雨がどのようにどこを伝ってあふれているのか、貞流には見当もつかなかった。

「怖くない、怖くない、ですぅ」

自分に言い聞かせるように呟きながら、貞流は奥へ進んでいく。普通人には見えない耳が、ぴくぴくと物音を探るように動いている。

「貞流は天孤さまの血筋を継ぐ、偉いキツネ人なんですぅ。キツネ人が奈落と戦うためには、貞流が奈落のことを勉強しなきゃいけないんですから。他の人に任せてちゃいけないんですぅ」

自分を勇気づけるように、指を擦り合わせながら言う。寒さに震えているような仕草だ。

「ほぉう。どんなクエスターかと思ったら、ずいぶんちっこいやつが来たな」

声。貞流が振り返った先、入り口を塞ぐように男が一人立っていた。乱雑に伸ばされた、乾いた髪。ブリーチのしすぎで茶色よりも白に近い。かなりの長身だが、体つきはぎらぎらと光るナイフのように細く、危なっかしい。シャツもジーンズもかなり手ひどいダメージファッションだ。指には一つ残らずシルバーアクセサリーが着けられて、だらりと一本の刀を提げていた。

「いつの間に後ろに。き、木戸仁ですぅ！？」

「オレの名前をどうやって調べた？　ふん、まあいい。お前のシャード、いただくぞ。それをこいつで斬ればオレはもっと強くなれるんだ」
仁がハッとするほど赤い舌で、手にした刀身を舐める。
「やれ！」

仁の声に反応するように、廃工場の薄い明かりの届かない物陰から、黒い姿が立ち上がる。昨晩襲いかかってきたのと同じ、不完全奈落者だ。
「お……同じ手は、食わないですぅ！」
貞流は余裕を取り戻して、やわらかい頬に笑みを浮かべた。見たことのある相手なら、戦うことができる。両手で印を結び、

「烈火、猛火、炎！」
印と呪文に応え、炎が噴き上がる。迫る不完全奈落者に炎が巻き付くように絡み、崩れさせる。
「奈落って言っても大したことないですぅ！　さあ、あなたもミサがちょちょいのちょいでやっつけてあげますぅ！」
ぐるりと大きな動作で手が円を描き、炎が宙に漂う。貞流なりの威嚇だ。しかし、仁は余裕の笑みのまま、ゆっくりと刀を振った。

「馬鹿が。誰が同じだなんて言ったよ？」
刀がぎらりと妖しい光を放つ。瞬間、崩れ落ちた不完全奈落者の体から、黒いものが飛び出す。
「う……っ！？」
貞流は突然飛びかかってくるものをかわすことができず、手足を振る。しかし、飛びかかってきたものは粘ついたゲル状のもので、貞流の体じゅうに張り付いていく。
「きゃう！？」

「奈落で作ったスライムだ。もがけばもがくほど、お前の生命力を奪って絡みつくぞ」
仁が刀を担ぎ、貞流を見下ろす。スライムはキツネ人の少女の服の下に潜り、その肌にべたりと張り付く。冷たいゲルが体の上を這い回る感触に、貞流の体がぞわぞわと震える。
「あ、う、こ、これえっ、力が……抜けて……ぇ」
背筋が冷たくなるのは、悪寒だけではない。貞流の生命力を、スライムが吸い上げているのだ。体温が奪われ、すぐに立っていられなくなった。崩れ落ちた貞流の前で、仁がゆっくり刀を構える。
「ついにだ。ついに、クエスターを斬ることができるぜ。安心しろよ、体は俺の手下として使ってやるからよ……！」
「いや、いやですぅ！　ミサ、奈落のことは知りたいけど、奈落になりたくなんかないですぅ！」
仁が振り上げた刀を両手で掴む。廃工場の中のわずかな明かりを受け、濡れたような刀身が、鈍く輝いた。

○シーン８

そのとき、爆音と共に光が仁の背を照らした。
「仁！　てめえ、そこまで腐ってやがったか！？」
廃工場に飛び込んだバイクを横向きに停車させ、健が怒りの声を上げる。
「健くん、あ……危ないから、下がってて！」
勇生は慣れない様子でバイクから降りる。セキュアダガーを懐から抜いて、
「貞流ちゃん、待ってて！　今助ける！」

「ゆ、勇生さん、危ないですぅ！」
貞流に駆け寄ろうとする勇生に向け、白刃が閃いた。勇生は咄嗟に前に飛び出して刃から逃れようとする。が、その背を切っ先がかする。勇生の背に、赤いものが広がった。
「逃したか。勘の良いやつだ」

奇怪なことに、仁は勇生に離れた場所に立っていた。その上、仁が立っているのは勇生の正面である。仁は前に立ちながら、勇生の背に斬りかかったのである。
「仁！　今のはてめぇがやったのか！？」
勇生に斬りかかった仁を健がにらみつける。仁は頬を引きつらせたような、危険な笑みを浮かべている。

勇生は貞流の元まで辿り着き、貞流の体を包むスライムにダガーを突き立てて引きはがそうとする。しかし、剣は抵抗なくスライムの体に飲み込まれ、まったく手応えがない。
「こいつ、剣が効かない……！　それなら！」
勇生は左腕を振り上げる。一瞬にして、異世界から『剣の騎士』が召喚される。
「シャードよ！　こいつを滅ぼせ！」
二つの剣をスライムの体に突き立てる。瞬間、刀身から真夏の空のような青い光が放たれ、スライムの身を焼いた。吹き飛ぶように、奈落の魔獣は体を失って消滅する。力の抜けた貞流の体を受け止め、その額に手を添える。うっすらと貞流が目を開いた。

「勇生……さん。ごめんなさい、ですぅ。ミサが勝手なことをしたばっかりに、勇生さんにけがさせてしまって……」
「これぐらい、大したことないよ。それより……ここは早く逃げよう。マシュマロと合流して、対策を考えなきゃ」
背に負った傷は深くはないが、焼きごてを押しつけられているか

のように熱く感じられた。額に大玉の汗を浮かべながらも、勇生は貞流を安心させるために笑う。
「で、でも、勇生さん。あの人……」
貞流が力の抜けた指で勇生の背後を示す。振り返った勇生が見たものは、刀を持った仁に、素手で殴りかかる健の姿だった。

「てめぇ！　俺のダチに何しやがった！」
健が振りかぶった拳を突きだし、仁の顔に殴りかかる。が、その拳が触れる直前、仁の体から黒いものが立ち上って、ゴムの塊のようにその拳を受け止める。
「健！　てめえは最後の楽しみに取っておいてやろうと思ったが、自分から飛び込んできたからには、ずたずたに切り刻んでやる！」

黒いもやが健の体を捕らえる。直後、仁の構えた刀がぐにゃりと歪んだ。その刀身がいくつにも別れ、樹のような形に変化する。ただし、一つ一つの枝が触れたものを切り裂く、この上なく危険な樹だ。
「くそ！　こいつ、どうなってやがる……！」
健がもやから逃れようともがく。しかし、黒いものに体を覆われ、動くことができない。
「や、やめろ！　健くん！」
振り返った勇生が健に向けて駆け寄ろうとする。しかし、振り下ろされる刃は止まらない。

「死ね、健！　お前ならいい奈落になるだろうよ！」
いくつもの刃が、健の体を引き裂く。薄い明かりの下、赤黒い血の花が咲く。
「健くん！」
勇生の瞳はその光景をはっきり捕らえていた。
「ひ、ひはは……ははは！　サイコーだ！　もっと、もっと斬っ

てやる……。さあ、次はてめえらの番だ！」
血を浴びて、赤くそまった刀を手に持ったまま、仁が向き直る。
「そんな……け、健くんが……僕が、巻き込んだから……」
勇生は愕然と立ち尽くしている。背中の傷よりも遥かに深い傷が胸の奥に刻まれたかのようだ。自分に対する嫌悪感がわき上がり、喉の奥が酸っぱくなる。
「ゆ、勇生さん、落ち着いてくださいっ！　あの刀で斬られた人は、不完全奈落者になるんですぅ！　だから、まだ助けることが……」
「ひははっ！　それは昨日までの話だろ」
「ど、どういうことですぅ！？」
仁は赤く染まった顔に、狂気の笑みを浮かべている。
「一人斬るたび、オレの力が強くなっているのが分かるんだよ。今なら、斬ったやつを不完全奈落者なんかじゃねえ、完全な奈落者に変えられる」
「そんな……！」
「そして、今度はこんなこともできるっ！」
仁が吼えた瞬間、手にした刀がさらに広がる。無数に枝分かれした刃が、空間をむちゃくちゃに切り裂いて、別の空間へ刀身を現す。勇生たちの正面からも、背後からも、横からも……そして頭上からも、赤い刀身が突き出した。
「きゃああっ！？　勇生さん、しっかりしてください、勇生さん！」
貞流がすがるように勇生の袖を引く。
「健くん……？」
不意に勇生は仁の背後に視線を向け、呟いた。
「馬鹿が。てめえのせいで健は奈落になったんだ。後悔しながら、死ね！」
仁が刀を突き出す。一瞬にして、無数の刃が全方位から勇生たち

に向けて迫る。
「待てよ」
背後に声。仁が振り返るよりも早く、その腹に拳が突き刺さっていた。
「っぐぅっ！？」
仁の体がくの字に曲がり、床に倒れる。無数の刃は、主の命令を失って、元の一本の刀の形に戻っていく。
健が、その姿を見下ろしていた。服を血で真っ赤に塗らしながら、しかしすでに傷はふさがっている。
「け、健！？　てめえなんで……」
「さあな。……だが、こいつが力をくれたらしい」
仁を殴り飛ばした拳を開く。指の隙間から太陽の日差しを思わせる橙色の光があふれ、長い柱のような直方体の結晶が現れた。
「あれって、シャードですぅ！」
「け、健くん！　よかった！」
「勇ちゃん。正直、何がどうなってるのか、俺にはさっぱり分からんのだが……」
「あ、後で説明するから！　とにかく、今はここから離れよう」
「お、おう」
勇生の表情に、時間がないと悟ったのだろう。健が頷き、エンジンを駆動させたまま止められているバイクに向き直る。
「さっきの女の子はどうした？」
健が振り返って聞いた。貞流は、バイクに乗る邪魔にならないよう、鈴のキーホルダーに変化して勇生の腰にぶら下がっているところだった。
「そ、それも後で説明する！」

「ひ、ひ、はは……！　そうか、そうだったのか！　お前もクエスターとしての素質があったってわけだ！　前からお前は普通のやつとは違うって思ってたぜ！　サイコーだ、サイコーだよ、健！」

がくがくと人形を揺さぶったように体を震わせながら、仁が体を起こす。バイクに跨がる健と勇生の背に向け、刀を振りかぶった。

「逃がすかよ！」

再び、仁の刀が空間を切り裂く。今度は刀身ではなく、空間を切り裂いた衝撃が三人とバイクに向けて迫ってくる。

「っく……！？」

刀身ならかわすこともできるが、衝撃を避けることなどできるはずもない。せめて健の前に立って攻撃を受けようと、勇生が振り返る。

が、彼らの前に炎が立ち上り、伝わってくる衝撃を受け止める。炎が衝撃を包み込み、あっという間にそれを燃やしてしまった。普通ならばあり得ない光景だが……

りん、と勇生の腰で鈴が鳴った。貞流が守ってくれたのだと、勇生には分かった。

「ありがとう」

小さく呟く。同時に健がエンジンを吹かして廃工場を飛び出したので、その声を聞くものは誰も居なかった。

第3話「狂気の刃」ーその5

○シーン9

二人と鈴に変身した貞流を乗せたバイクは、骨董屋「花鳥風月」の前で後輪を地面に激しく擦りつけながら停止する。勇生は健の身体を支えながら店の入り口に向かう。ダメージを受けた体で激しい運転をこなした健の体は汗だくだ。

のれんをめくった牡丹が、二人の様子を見て顔を青くする。

「どうしたの？　ひどい怪我だわ」

「貞流ちゃんが奈落を見つけたんです。戦ったんですけど、強くて……何とかここまで、逃げてきました」

荒く息を吐く健の身体を支えながらの説明。店の奥から、心配顔のマシュマロが顔を覗かせる。健の姿を見て、心配が困惑に変わる。

「知らない人が傷だらけになってるんだけど、この人は？　まさか、巻き込んだの！？」

「なんだよ。カラコンなんか入れやがって。勇ちゃんとどんな関係だ？」

マシュマロが声を荒げるのに反応して、健が睨みを返す。ガンを返すのはたしなみということか。

「この目は生まれつきよ！」

こうなってはマシュマロも後に引けない。慌てて、勇生は二人の間に割って入った。

「せ、説明するから！　マシュマロ、とにかく健くんを治療してあげて」

「マシュマロ？　マシュマロがどこに……」

「わたしの名前よ、小練マーシュ・マロウ！　ほら、傷口見せて！」
ぼろぼろの服を着た健を、椅子に座らせてマシュマロを見る。勇生の表情から必死さを感じたのだろう。マシュマロが先に引いて、両手を健の身体にかざす。

「なんだよ、強引な女だな。これくらいどってことねえって」
健はまだ火がくすぶっている様子で傷を隠そうとする。
「健くん、落ち着いて。あんなことがあって、気が立ってるのは分かるけど。彼女なりに健くんのことを心配してるんだよ」
「なんだよ、やけに肩を持つじゃねえか。勇ちゃんのこれか？」
健は小指を一本、立てて見せながらにやりと歯を見せた。

「ちちち、違うよ！」
「ちちち、違うわよ！」
二人がぴったり声を合わせ、ぶんぶんと首を振る。
「お、お二人はそういう関係だったのですかぁ！」
ぼん、っと音を立てて貞流が現れる。二人を見上げる瞳が異様にキラキラ光って、あこがれと驚きに染まっている。

「うお、いきなり出てきた！？」
「ちょっと、動かないでよ！」
大げさな（いや、けして大げさなわけではないはずなのだが）リアクションを取る健をマシュマロが押さえつける。どうやら健はマシュマロがあまり触れたことのないタイプの人間らしい。しかし、健のちょっとした言葉にも大きく反応していては、いつまでも話が進まない。
こほん、と勇生は咳をした。
「そ、そういう関係じゃないけど、ええと……仲間なんだ。健くん。とにかく、その宝石のこととか、説明するよ」

じ、っと健に目を向ける。健が吊り上げた口元をゆっくりと一文字に結ぶ。
「ああ。ちょけてる場合じゃあなさそうだな」
見返して、勇生がゆっくりと頷く。
「まず、この世界は……」

勇生は語った。この世界のことを。魔法のことを。奈落のことを。そして、シャードとクエスターの事を。

マーリンのようにうまく説明はできなかったが、健は一言も口を挟まず、じっと聞いていた。貞流が代わりに大げさな相づちを打ったり、驚いたりしたのだが、そのたびにマシュマロがたしなめていた。

話の間に、マシュマロの魔法で治療を受けた健が、具合を確かめるように腹を撫でる。
「なるほどな。にわかには信じられない話だが……」
「僕もそうだったから、信じられないのは分かるよ」
「でもでも、魔法も奈落も確かにあることなんですぅ！」
「いや、そこを疑ってるんじゃなくてな」

胸の前で拳を握って主張する貞流を手で制し、健がアゴに手を当てる。
「仁がその奈落ってのに憑かれてるってところだよ。確かにヤバいやつだったが、絶望したりするようなやつじゃねえはずなんだが……」
マシュマロが椅子に座る健を見下ろす格好で指を立てる。
「それが、奈落の恐ろしいところなの。人間のちょっとした絶望や

負の感情につけ込んで、それを何倍にも増幅させるのよ」
「負の感情、ですかぁ？」
貞流が同じポーズのまま、きょとん、とマシュマロに首をかしげる。
「そう。たとえば憤懣、恐怖、後悔、憎悪、劣等感、嫉妬……」
マシュマロが数えるのに合わせて、指が一本ずつ、さらに立てられていく。それを聞いて、ぽつりと健が漏らす。
「嫉妬……か」
「そういえば仁って人、健くんにこだわってたみたいだった。健くんを最後に斬るとか、健くんを特別だと思ってた、とか。そんなこと言ってたよね」
「自慢じゃねえが、仁はケンカでもなんでも、負けたことがねえんだ。俺以外にはな」
「自慢ですぅ」
悪意の欠片も感じさせないような声と表情で、貞流が呟いた。あまりにも素直なリアクションに困った様子で、マシュマロが太い眉を寄せる。
「余計なこと言わないの」
顎に指を当てたまま、健が考えこむように口を閉じる。胸が動くので、大きく呼吸したのがマシュマロには分かった。
「悪いな。どうも、俺のケンカに巻き込んじまったみたいだ。仁のやつとはいつかケリ着けなきゃあいけねえとは思ってたんだが……」
「冗談じゃないわ！」
マシュマロが健に指を突きつけ、床を踏みならす。頭から湯気が上っていてもおかしくないような怒りの表情だ。

「勝手にあなたのケンカってことにするつもり？　奈落が関わってるなら、これはクエスターの戦いで、わたしの戦いよ！」
「融通の利かない女だな。男には男の事情があるんだよ」
「融通が利かなくても結構。わたしにとっては、あなたと仁ってひとの因縁も、男のロマンも関係ないの。奈落から蒼き星を守るのが使命なのよ！」

再び、二人の間で火花が散る。勇生がまた二人の間に割って入り、いさめようとする。
「ちょっと、マシュマロ。そんな言い方はよくないよ。健くんだって、もう僕たちの仲間なんだから」
「いいんだよ、勇ちゃん。女は気が強い方がかわいいもんさ」
「なっ……！」
目元をかっと赤くするマシュマロが反論する前に、健が口を開く。

「勇ちゃん、それにみんな。俺を仲間だと思ってくれてるなら、頼みがある」
「う、いきなりまじめな顔になって……どうしたんですぅ？」
いぶかしげな貞流に、健は顎が胸に触れるような深い頷きを返す。

「まじめもまじめ、大まじめだ。俺はお前らみたいに魔法は使えねえ。ケンカは何回もやったが、あんな化け物に通用する武器も持ってねえ。あいつと、仁と戦う力が欲しいんだ」
「健くん……」
「確かに、この店にはいくつか武器があるけど」
声を聞いて、皆が振り向いた。話の行方を見守っていた牡丹が、ゆっくり首を振っている。。
「でも、危険だわ。目覚めたばかりなんだから、まずはシャードの力に慣れないと……」
「頼む」

健が椅子を降り、床に手をつく。額を床に当てるほど、深く頭を下げる。土下座だ。
「俺だけでカタぁつけるなんてことは言わねえ。そんなレベルの問題じゃなくなってるみたいだからな。だが、俺がケツ持たなきゃなんねえケンカを勇ちゃんたちに任せて、見てるだけなんてのは我慢できねえんだ」

その隣に、勇生が並ぶ。健のまねをするように、深く頭を下げた。
「牡丹さん。健くんが人に頭を下げてる所なんて、僕ははじめてみました。それだけ、健くんは本気なんです」

「み、ミサからもおねがいしますぅ！　この人、ミサと勇生さんのために奈落と戦ってくれたんですぅ。力があるからって、好き勝手に使うような、そんな人じゃないですぅ！」
さらにその隣に貞流が並ぶ。大きな瞳には、懇願の二文字が浮かんでいるかのようだ。

「でも……ねえ、小練さん。あなたなら分かるでしょう？」
困った様子の牡丹が、マシュマロに視線を向ける。しばらく下を向いていたマシュマロは、青い瞳をまっすぐに牡丹に向ける。
「牡丹さん。わたしの師匠が言ってました。クエスターを、人間を信じろって」
「小練さん？」

「ガイアがクエスターを目覚めさせるのは、人間が自分を助けてくれるって信じてるからです。シャードがクエスターに力を貸してくれるのだって、神様の欠片がクエスターを、人間を信じてるからです。だったら、同じ人間であるわたしたちが、枡田さんのこと、力を使いこなせるか分からないから駄目、なんて言うべきじゃないと思うんです」

言葉を切り、胸に手を当てる。青い瞳に、強い意志が表れていた。
「わたしは……今会ったばかりだけど、枡田さんのこと信じたいと思ってます。だから、牡丹さん。わたしのこと、信じてください」
マシュマロが三人と同じように頭を下げる。牡丹の小さな嘆息が漏れた。
「まったく……仕方ないわね。でも、一つだけよ。小練さんの言うとおり、本当にガイアの導きがあるなら、あなたにふさわしいものがきっと見つかるはずだわ」
その言葉を聞いて、健がカエルの玩具のような勢いで立ち上がる。
「ありがてえ！　どこにあるんだ！？」
「店の地下よ。ついてきて」

牡丹は奥の部屋に向かい、「夏炉冬扇」と書かれた掛け軸をめくった。その裏には隠し戸の取っ手。牡丹が戸を開けると、地下に降りる階段が姿を現した。健は口笛を漏らし、牡丹の後を追う。三人を振り返り、
「待っててくれよ、すぐに武器を見つけて帰ってくるからな！」
そう言って、地下の暗がりへと降りていった。

「意外ですぅ。マシュマロさん、反対すると思ってましたぁ」
二人の足音が遠ざかるのを聞きながら、貞流がぽつりと漏らす。
「うん。健くんのこと、嫌ってたみたいだったし」
「嫌いだなんて言ってないじゃない。それに、クエスターなら一緒に戦ってくれた方がいいでしょ。嫌いだからって、使命を達成するために必要な事を反対したりしないわ」
ふいと顔を横に向け、マシュマロが呟く。そのとき、突然貞流があっと声を上げた。

「あ、わかったですぅ！　マシュマロさん、勇生さんとのことをからかわれたから、照れてあんな態度を取ってたんですぅ！」
「えっ！？　そ……そうなの？」
勇生が満面に驚きを浮かべ、マシュマロの顔を見る。マシュマロは身体をひねるようにして、背中を向けた。
「そ……そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないわ！」
「ぜんぜん、ごまかせてないですぅ」
貞流がくすくすと笑いながら、マシュマロの肘をつつく。

「もう！　ほら、あなたたちも治療するから、傷を見せて！」
振り返ったマシュマロが叫ぶ。はたと貞流の顔に焦りの色が浮かぶ。
「そ、そうですぅ！　勇生さん、ミサのために背中に怪我したんですぅ！」
「い、いや、そんな大した傷じゃ……」

勇生は言うが、マシュマロが背中を向けさせる。刀傷は深く背中に刻まれている。すでにシャードの力で止血されているようだが、服はべったりと血で染まっていた。
「ひどい傷。クエスターじゃなかったら、命にかかわるわよ。……えっ？」
傷を確かめていたマシュマロが、驚きに声を上げる。
「ど、どうしたんですぅ！？」

「傷口に奈落の欠片が付着してる。傷口を広げたり、毒みたいな力はないみたいだけど……」
マシュマロが傷口に手をかざし、回復呪文を唱える。その魔力に押されて、ごく弱い奈落の欠片は傷口から剥がれ落ち、溶けて消える。
「ありがと。だいぶ楽になったよ」

熱く感じられた傷口が塞がれ、呼吸も楽になったように感じる。
「でも、あの奈落はなんだったんですぅ？」
貞流が首をかしげる。マシュマロは眉を寄せ、ううんとうなった。
「なんだか、魔力を発してたみたい。……まさか、居場所を親玉に伝えてる！？」
「気づくのが遅えよ」
声。同時に、店の入り口が吹き飛ばされた。
「ははは っ、逃げたつもりが追い込まれてやがるじゃねえか。だっせぇなぁ！」
刀を構えた仁が赤い舌を口から覗かせ、高く笑う。彼の周囲に貞流を襲ったのと同じスライムがごぼごぼとわき上がり、店の中になだれ込んでくる。
「こうなることを予測して、僕を攻撃するときに奈落の欠片をつけたのか……！？」
勇生は二人を庇うように前に立ち、セキュアダガーを抜く。きっと仁をにらみつけた。必死の表情を浮かべる勇生を嘲るように、仁がまた高く笑った。
「オレは念には念を押す主義なんだよ。気づかないお前も相当ニブいぜ？」
「ううっ、嫌らしい性格ですぅ」
「黙れ。健ともども、全員ここで殺してやるぜ！　……ん、健はどうした？」
仁は刀の切っ先を三人に向け、詰問するような口調だ。
「あ……あんたに教えてあげる義理はないわ！」
マシュマロが胸のブローチからチャンバースタッフを抜き放ち、

両手に構える。
「はん。まあいい、てめぇら全員斬ってオレの手下にするんだ。ずたずたに切り裂いた後で、健の居場所を聞いてやるよ！」
仁の刀が樹の形に枝分かれしていく。スライムたちが店の商品を巻き込みながら、三人に迫った。

○シーン１０

暗い階段を下りきった先は、どうやら店と同じくらい広い空間になっているらしい。足音の反響から、健はそう見当をつけた。
「おいおい、暗くて何も見えねえぞ？」
手探りで壁に手をつき、先に居るはずの牡丹に向かって言う。
「待って。今、明かりをつけるから」
しばしの衣擦れの音の後、ぱちん、と音が鳴り、周囲を電灯が照らした。そこは倉庫のようだ。数々の物品が所狭しと並べられている。雑然とした様子で、薬らしき瓶や、怪しい巻物、大きな箱や、中には人間と見分けがつかないような人形まで並べられている。
「こりゃすげえな。本当にどれか一つ、貰って良いのか？」
「ええ。クエスターの援助が私の仕事だから。いろいろと面倒なことになりそうだけど、後で考えるわ」
「あんた、さっきは反対してただろ。いいのか？」
問いかけに牡丹が口をつぐむ。ふっと下を向いたのが健には見えた。
「あんなに必死に頼まれたら、仕方ないじゃない？　それに、何もできないことの悔しさは、分かるつもりだから……」
「あんた……」
ぽつりと漏らす牡丹の瞳が、濡れているように見えた。健が声を

かけようとしたとき、上階から何かが吹き飛ばされるような物音と、叫ぶような声が聞こえてきた。

「来たわね」

階段の方を振り返り、牡丹が呟く。

「仁か。早く選ばねえとな」

仁の性格を考えれば、易々と逃がしてくれるとは思ってなかった。だが、それにしても早すぎる、と健は心の中で歯がみした。とにかく、手近なものを探す。機械的なパーツがいくつも取り付けられた長い筒状のものをつかみ、牡丹を振り返る。

「これは何に使うんだ？」

「全部説明してたら、朝になってしまうわよ？」

「ちっ、そんな時間はないか。こうなったら直感で選ぶしかねえってわけだ」

周囲を見回す。健は一度目を閉じ、足の赴くままに倉庫の中を歩いた。

「俺に仁と同じような武器があれば、やつを止められるかもしれねえんだ。武器が……武器……」

呟きながら、目を開く。目の前には棒状のものがいくつも立てかけられている。その中に、まさに健に向けて誘うように、一本の棒が突き出ていた。どうやら、何かの武器の柄らしい、と分かる。

健がその棒に手を伸ばすと、

「それは……駄目、危険すぎるわ！」

牡丹が慌てて叫んだ。

「ダチが命かけて、別のダチを救おうとしてんだ！　俺だけ危険を恐れてられるかよ！」

危険に構っていられなかった。それに、健は感じたのだ。

自分が武器を求めているのと同じくらい、この「何か」が使い手を求めていることを。

健がその棒に手を伸ばし、両手でぐっと掴む。瞬間、周囲の景色が色を失っていく。気づけば、健は見知らぬ灰色の空間に居た。

「なんだ……ここは？」

きょろきょろと周りを見回す健の耳に、不意に声が響いた。

「我の力を求めるか？」

「誰だ！？」

「我は貴様の掴んだ剣。貴様と話すため、我が精神世界に貴様を導いた。もう一度聞く、我の力を求めるか？」

迷う暇も惜しんで、健は頷いた。

「ああ！　ダチを助けるために力が必要なんだ。力を貸してくれ！」

「よかろう。だが、我は気高き“奈落喰らい”。ふさわしきものでなければ、我を使いこなすことはできん」

「なんだと？　ふさわしきものってのは、どうやって判断するんだよ？」

「これより、貴様に三つの試練を与える。見事、それを乗り越えれば貴様を我が使い手として認めてやろう」

その声が響いた直後、健の目の前の空間が歪む。渦巻く空間から、巨大な獣が生み出された。

「まずは第一の試練。その獣を見事、打ち破って見せよ」

「なん……だと……ぉ？」

健は、自分の喉がゴクリと鳴るのも不思議に思えるような気分で聞いていた。

第3話「狂気の刃」ーその6

○シーン11

「そいつらを捕まえろ！　動きを止めて、俺が殺しやすいようにな！」

仁の叫びに応え、スライムたちが一斉に三人に向かう。一部をくっつけあい、あるいはぶつかって弾き合い、不規則な動きで一斉に三人を取り囲んだ。

「気をつけてください！　肌に触れたら、力を吸われてしまいますぅ！」

飛びかかってくるスライムから身をかわしながら、貞流が叫ぶ。が、ついにスライムの一匹が、大きな尻尾に触れて貞流の力を吸い上げる。

「ひゃあっ！？」

へなへなとその場に膝を突く貞流の前に、スライムに服をべったりと濡らされたマシュマロが立った。

「これ以上、奈落にいいようにされて溜まるもんですか！　貞流ちゃん！」

そう言って、チャンバースタッフを振り上げる。貞流は力を振り絞って、ぴんっと片方の尻尾を立てた。

「は、はいっ！　マシュマロさんの魔力、もっと強くなれ、ですぅ！」

「わたしに触れたこと、後悔させてあげるわ！　マナよ、雷となって世界の敵を散らせ！」

貞流の尻尾に込められたマナが、チャンバースタッフの放つ魔力を増幅し、衝撃で魔法弾が音を立てて爆発する。その衝撃はマシュ

マロの呪文に応え、チャンバースタッフの先端で青白い雷がほとばしった。
「奈落に死を与えよ！」
貞流の尻尾に取り憑いたスライムに向け、チャンバースタッフを振り下ろす。雷は一瞬にしてスライム立ちの間を駆け巡った。目もくらむような閃光。晴れた時には、スライムは一匹残らず蒸発していた。

「俺の作り出した奈落どもが一撃だと！？　馬鹿な！」
「おあいにく様。わたしはこういうのが得意なの。伊達に魔術師、やってないわよ！」
チャンバースタッフをまっすぐに構え、仁を威嚇するようににらみつけながら言う。マシュマロの背中から飛び出した貞流がマネをするように両手を突き出した。

「貞流も続くですぅ！」
短い呪文と共に、貞流の掌から炎が飛び出す。うねりながら、仁の身体に蛇のように巻き付いた。
「ああ！　健くんには悪いけど、ここでこの人を止める！」
炎の後を追うように、勇生が両手に剣を構えて飛び出していく。片方の剣で払い、片方の剣で突く。炎と二つの刃が、仁の身体に迫った。

「かああぁっ！」
気合い一閃、仁の持つ刀が複雑に形を変えて、巻き付く炎を打ち払い、二つの剣を弾いた。枝を広げた刀は、うねりながらさらに長く伸びてゆく。
「ううっ！？　ミサと勇生さんの攻撃をいなしたですぅ！？」
「舐めんじゃねえぞ、ガキが！　こんなもんが、俺に効くかよ！」

「この刀、身を守る力があるのか！」
「あぁん？　守るだけじゃねえよ、忘れたのか？」
耳の奥まで響くような不快な音を立て、刀の枝が店中に広がる。スライムよりも速く、鋭く、勇生たちの前後左右、上下すらを一本の刀が取り囲む。
「一刀両断、いや、一刀樹寸断ってかぁ！？」
刃が無数のトゲと化して突き出る。全身を貫き、ボロ布のように切り刻む。一瞬にして、店の中に赤いものが飛び散った。

「うあああ！」
「知ってるぜ、クエスターども！　てめえらは一回殺しても死なねえんだろうが！　立て！　何度も何度も何度も何度も切り裂いてやる！」
狂気の笑みを浮かべた仁が腕を一振りすれば、刀は元の形を取り戻す。真っ赤に染まった刃に、身体を青く輝かせる勇生の姿が映る。

「なんて力だ、一撃で……！」
シャードのマナが流れ込んでくる。ブレイクだ。体じゅうが熱く火照り、いつもの何倍もの血が体内を駆け巡っているようだ。同時に、それは限界を必死に叫んでいるのと同じことでもある。
「まずはてめえからだ。死ね！」
仁が両腕を振り上げる。まるで訓練を受けた映画俳優のように……勇生はもちろん、本物の剣士など見たことはない……堂に入った型で、しかしそのなめらかさとは裏腹に、凶悪な輝きを放つ刀が振り下ろされる。

「くうっ……！」
勇生は目を閉じ、衝撃に備えた。固いモノがぶつかる音が響いた。
勇生は、痛みがいつまでもやってこないことよりも先に、自分が何かの影に入っていることに気づいた。おそるおそる、まぶたを開

く。

「危なかったな、勇ちゃん。大丈夫か？」

影を作っている男がにやりと笑う。

「健くん！」

勇生は思わず叫んだ。赤い髪のその男は、枡田健でなくて誰であろうか。

「悪いな、めんどくせえ試練に付き合ってたせいで遅くなっちまったぜ」

「試練？」

見れば、健の身体はところどころ破れ、表情にも疲労が浮かんでいる。

「ああ。この剣が、タダじゃ使わせてくれねえってんでな。時間がないのに、付き合わされたんだよ」

「ど……どんな？」

「ひとに言うようなことじゃねえよ」

健は両手で巨大な剣を構え、その剣で仁の刀を受け止めていた。真昼の日差しを思わせるような、橙がかった光を放つ大剣だ。勇生の持っている二つの剣を両方合わせたよりも重そうな、巨大な剣である。

「あの剣……魔器！？　マナの影響で特別な力を得た器物だわ！」

その剣の輝きを見て、マシュマロが目を丸くした。

「それって、すごいの？」

勇生は二人のつばぜり合いに視線を向けたまま、聞く。

「武器自体が強大なマナを含んでるわけだから、普通の武器よりずっと強力よ。ただ、力を使いこなすことができれば……の話だけど」

「健！　ようやくお出ましか、会いたかった……ぜっ！」

仁が力を込めて健の剣を弾き、一歩分の距離を取った。きっと鋭い視線が交差する。

「仁、もうやめろ！　そんな力に頼って強くなっても、何になるってんだ！」

「お前には分からないだろうよ！　何もしなくても強かったお前には！　努力しようが、卑怯な手を使おうが、決して負けなかったお前には！」

刀を振りかざし、獣のように声を張り上げる。異様な気配が刀から立ち上り、赤い刃がいくつも起き上がる。

「仁？　てめえ、本当に仁か！？」

「力だ！　もっとオレに力をよこせ！　こいつらを切り裂き、オレに血を浴びさせろ！」

「まさか！　奈落に憑かれてるのは、あの人じゃなくて……」

「なんだ、ちょうど良いのがあるじゃねえか！　てめえの力をオレによこせ！」

マシュマロの叫びに煽られるように、刀が形を変える。まずは柄。仁が両手で握る柄が刃へと代わり、両掌を貫いた。さらにいくつもの刃が現れ、仁の腕を、胴を、腿を、いくつもの刃が貫く。まるで、寄生樹が別の樹から栄養を奪うために根を張るように。

「なんてことを！　ぶ……武器は、人に使われるためにあるのに、その主人を餌にするなんて、狂ってるですぅ！」

貞流は背筋が凍り、尻尾が力をなくして垂れるのを感じた。ぶるる、っと身体をゆすって、必死に自分を奮い立たせる。

「知ったことか！　オレが人間を使うんだ、てめえらもすぐにオレの手下にしてやるぜ！」

生気を失った仁の口が叫ぶ。先ほどまでと同じ声だが、そこには何か異質な、尖ったものを額に向けられているような、そんな感覚

を受ける響きが含まれていた。

仁に向けられた刃を根として、真っ赤に染まった刃が枝を張る。勇生と健の身体に向け、枝が突き立てられていく。が、

「安心したぜ、仁！　てめえが心まで腐りきってるようなやつじゃないって分かってな！　待ってろ、このふざけた刀をぶち折って、すぐに助けてやる！」

健が頭上から逆さに構えた巨大な剣で勇生に迫る枝を防ぐ。自分に向かってきた刃に身体を貫かれたまま、だん、と床踏みならす。顔には、凄絶な笑みが浮かんでいた。

「俺を！　勇ちゃんや仲間を、そして仁を傷つけた痛み！　てめえが祖のみを持って思い知りやがれ！」

健の刀から、燃え上がる炎のように光が立ち上る。今更ながら、勇生はその柄に橙色のシャードが輝いていることに気づいた。

立ち上った光が、無数に伸びた枝を捕らえる。健の剣が、下から上に向けてまっすぐに振り上げられた。固い音を立て、無数の枝が一斉に断ち斬られ、あるいは根本から折り砕かれる。逆巻くマナが、仁の身体ごと刀を後退させた。

「馬鹿な！？　さっきとはまるで別人だぞ！」

「マシュマロ！」

剣を大上段に構え、健が振り向いた。

「えっ、な、何！？」

「お前のおかげだ、礼を言うぜ。お前が信じてくれたおかげで、俺にも力が手に入った。このクソ野郎をぶった切るための力がな！」

驚いたように背筋をぴんと伸ばしたマシュマロが、ぶんぶんと首を振る。

「別に……ど、どういたしまして。それより、早くこいつを！」

「ああ。……勇ちゃん、ありゃあ本当にいい女だな。勇ちゃんが惚れるのも分かるぜ」
声をひそめ、にやりと笑う。慌てた勇生は、
「け、健くん、こんな時に何言って……！」
「だから、良いとこ見せてやらなきゃな」
「う……うん！」

大きく頷いて、両手の剣を構える。勇生のシャードから伝わるマナは煌々と青く輝き、刀の発する赤を打ち払わんばかりだ。
「オレを前にして、のんきにおしゃべりか！　舐めてんじゃねぇぞ！」
叩き折られた刃が、勇生たちの背でゆらりと浮き上がった。刀樹ならぬ剣山のように、無数の破片が勇生と健の背中へ向けて迫る。
「そっちこそ！　わたしの見てる前で不意打ちなんて、できると思わないでよね」

マシュマロのかざした手に応え、空中に魔方陣が描かれる。勇生と健の背後で、魔方陣が破片を受け止め、激しく回転して吹き散らそうとする。
「この程度！　止められるか！」
仁の叫びに応えるよう、破片が赤く染まる。光を打ち消す闇がわき上がり、魔方陣に大きく日々が刻まれた。
「貞流、マネっこは得意ですぅ！　お昼はマシュマロさんに怒られましたけど、今度こそっ！」
貞流が両手を突き出し、二本の尻尾をぴんと立てる。マシュマロの魔方陣に重なるようにもう一つ、魔方陣が現れる。マシュマロの魔方陣で勢いを減じられていた破片は、貞流の力で吹き飛ばされた。
「馬鹿な！　オレの刀があんな魔法で……！」
仁が愕然とその光景を眺める。視界の端に影が動いたと思った時

には、背後から声が聞こえていた。
「よそ見してくれるのを待ってたよ」
よそ見、なんていうほどの隙があったわけではない。一瞬、気を逸らされただけだ。しかし、そのわずかな時間に勇生は仁の脇をすり抜け、背後を取ったのだ。

勇生は内心の驚きを押し殺して二本の剣を構えた。考えるよりも、動くよりも早く感覚が敵の隙を探っていた。仁の視線がわずかに逸れた、と思った時には、身体が動き出していたのだ。
勇生は剣を仁の背に突き立てた。が、その剣を赤い刃が阻む。
「忘れたのか！　オレの防御を崩せるかよ！」
先ほどと同じように剣が弾かれる。仁の身体を貫いた刃が、その全身を覆うようにびっしりと金属の根を張る。

「無駄なんだよ！　無駄無駄無駄！　てめえら人間は、自分の行動がどういう結果を起こすか考えるだけの脳がねえ！　俺たちを作ったのもそうだ！」
「な、何ですぅ？」
真っ赤に染まった仁が、狂気を孕んだ声を上げる。貞流はますます背筋が凍る思いだ。
「そもそも、動物ってのは必要なだけの武器を持ってるんだよ。牙や、爪や、体重や……そういうのは、必要だからあるんだ」
「こいつ、何を言って……！？」

追撃に備え、身構えた勇生は、突然声を張り上げる仁に驚いて目を見開く。仁は刃に貫かれた両腕を振り上げ、
「ところが人間はどうだ！　最初は弱かったか知らないが、武器を作り出しやがった！　弱いなら弱いなりに強い動物の残り物を漁ってりゃあよかったのによお！」
狂気がさらに増す。その声は、哄笑すら含んでいた。

「お前らが互いが互いを傷つけあうために使ううち、俺たちはどんどん強くなった！　だから俺がお前らを全員殺してやる！　自分たちが生み出した武器に殺されるんだ、本望だろうよ！」
「言いたいことはそれだけか？」
きっと勇生が仁を……仁の身体を操る奈落の刀をにらみつける。両手を横に振り、剣を左右に広げている。
「……あ？」

「確かに、人間は戦うために武器を作った！　確かに、お互いを傷つけあうためだったかも知れない！　だけど、傷つけあうだけじゃない！　手を取り合って、一緒に生きることだってできる！」
「そんなきれい事で、世界はできちゃいない！」
「そうだとしても、誰かがきれい事を言わなきゃ、本当に手を取り合う事なんてできないわよ！」
「そうですぅ！　人間とキツネ人だって一緒に協力することができるんですから、人間同士、手を取り合えるはずですぅ！」
マシュマロと貞流が叫ぶ。奈落の刀は苛立ち、全身の刃を剣山のように広げる。もうすぐ仁の身体は限界だろう。だが、クエスターたちのうちから誰かの身体を奪えばいいのだ。男のどちらかがいいだろう。女どもはスライムの栄養源にして、より強い手下を作ってやる。

怒りに身を震わせながら、刀は仁の身体で勇生に向き直る。
「馬鹿が！　手を取り合ったって、俺にこの場で全員殺されるんだ……っ？」
そのとき、刀は気づいた。勇生の構えた二つの刃が、うねりながら長く伸びている。二つの刃はいくつにも枝分かれして、刀の周りを取り囲んでいた。刀が何度もそうやって、クエスターたちを傷つけたように。

「だから、言ったですぅ。ミサ、マネっこは得意なんですぅ」
貞流の耳飾りに着けられたシャードが、紫色に輝いていた。
「ミサの前で何回も同じ技を使うからですぅ！　仕組みが分かれば、シャードのマナで同じことができるんですぅ！」
「何……っ？　馬鹿な、こんな……！」
「君はこれもきれい事だって笑うかも知れないけど、人間は学ぶことができるんだ」
勇生が両腕を振り上げた。伸びた刃が、ぐるりと刀に巻き付く。
「俺の力も使え、勇ちゃん！」
健が剣を両腕で振り下ろす。剣気となったマナが二つの刃に絡み、神話の力を当てた。
悪魔を、巨人を、神を殺す力だ。
「昔犯した過ちも、後から正すことができる！　今までの間違いを、今なら正せるかも知れない！　僕が駄目でも、僕の後から来る人たちが正せるかも知れない！」
いくつにも別れた刃が、仁の身体に突き立った刀の根を貫く。刀に無数のヒビが走り、根が、枝が、連鎖するように砕けていく。
「馬鹿なぁ！　馬鹿なぁああ！」
「だから、君の間違いをここで正す！　たとえ安っぽい正義でも、それが人間の力だっ！」
刀は仁の身体を借りた断末魔の代わりに、無数の砕ける音を鳴らして飛び散った。柄すらも刃と化していた刀は、跡形も残らず消え去ったのだった。

○シーン１２

仁の身体に手を触れ、マシュマロが様子を確かめる。
「出血は多いけど、致命傷は受けてない。これくらいなら……」
仁の服は血で赤く染まり、ダメージファッションどころではなくなってしまっている。もちろん本人も意識を失い、今は弱々しい呼吸を喘がせている。
「シャードよ、この人の命を救って」
マシュマロの胸のブローチから赤い輝きが広がり、仁の身体を照らす。その傷を塞ぎ、出血で失われたマナを補っていく。

「すごいな、魔法の力ってのは。こんなことまでできるのか」
健が店の奥の部屋に運び込まれた仁の傷が癒えていくのを、ぼんやりと眺めながら呟く。戦いの間地下に避難していた牡丹が、安心したように笑みをこぼした。
「あなたも、その神秘の一端に触れてるんだから。これからは、その力の使い方を身につけて貰うわよ」
「牡丹さん、でも……健くんはなりゆきで協力してくれてただけで、まだクエスターとして戦うかどうかは……」

勇生が困ったように頭を掻く。が、健は腕を組んで胸を張ってみせる。
「いや、俺はやるぜ」
「健くん？」
健は鞘に収めた大剣に手を触れ、
「この剣に約束したんだ。あいつら……奈落と戦うことをな。それに、奈落ってのはこの世界を滅ぼそうとしてるんだろ？」

「そ、そうだよ。だから、危険なんだよ。分かってるの？」
「言って見りゃ、俺たち全員にケンカ売ってるようなもんだろ。売られたケンカは買う！　殴られたら殴り返す！　それが俺のやり方

だ」
健が拳で自分の掌を叩き、ぱん、と音を鳴らす。
「ふふ……面白い子ね。いいんじゃないかしら、それでも」
口元に手を当てて笑みをこぼす牡丹に吊られたように、健が白い歯を見せる。

「女に見栄張るために戦ってるやつもいるんだ。理由なんてそんなもんで充分だろ」
「け、健くん！」
「ふふふ、ミサは素敵な理由だと思いますよぅ！」
「あら、なんの話？」
と、仁の傷の治療を終えたマシュマロが顔を覗かせた。

「ま、マシュマロ！　い、いや、あの……か、彼の様子は！？」
「もう大丈夫。あとは寿美さんの時みたいに記憶を除去させれば、元の生活に戻れるわ」
「そういうことなら、ミサにお任せですぅ！」
出番を待ちかねていたように、貞流が両手を上にあげる。一緒に二本の尻尾も、ぴんと上を向く。
「そっか、そういえば貞流ちゃんは記憶が操作できるんだったわね。そういうことなら、おねがい」
「はいぃ！」

貞流が飛び跳ねて身体ごと頷いて、仁に向かっていく。その背中を眺めながら、ぽつぽつと呟く。
「仁は、ヤバいやつだったけどな。上を目指す根性だけは大したもんだったよ。こんなやつでも、助けることができてほっとしてる」
「うん。健くんの友達だったんだよね」
「そんないいもんじゃないさ。……けど、誰かのために戦うとか、誰かを守るとか、そういうのも悪くないなって思ったよ」

健の肌は汗ばみ、表情にも疲労の色が濃い。試練とやらを乗り越えた上に、あんなに激しい戦いを乗り越えたのだ。無理もない。それでも、目元には爽やかなものが感じられた。

「ミサも、先輩たちのおかげで奈落のことがちょっぴり分かりましたぁ！　人間や奈落の勉強、もっともっとして、皆の役に立ちたいですぅ！」

貞流がぱたぱたと尻尾を振りながら振り返る。どうやら、記憶の操作はすぐに終わったらしい。

「せ、先輩？　いや、先輩だなんて……」

首を振る勇生。だが、その肩にぽんと白い手が置かれる。

「ううん、勇生が二人を導いたのよ。もっと誇って良いわ」

マシュマロが勇生の横顔をのぞき込み、そっと笑みを向けた。

「そ……そうかな」

「そうですぅ！　勇生さんのおかげですぅ！」

「ああ。それに、かっこよかったぜ」

頭を掻く勇生に、貞流が両手を挙げ、健が親指を立てて見せる。

「そ、そっか。頼りない先輩だけど、よろしくね、二人とも」

はにかんだ笑みを浮かべる勇生の背で、ぽんと小さな音が鳴った。

「ところで、店のことなんだけど……」

手を鳴らした牡丹が皆を見回す。スライムと奈落と、そしてクエスターが4人も暴れ回ったせいで、壁にも天井にも細かい傷が走り、商品はほとんどが再生不能だろう。

「あなたたちのせいだなんて言うつもりはないのよ。連盟の連絡員っていうのは、こういう危険も承知の上だもの。でも、結界を張って人目を避けなきゃいけないし、そしたら店の売り上げは落ちちゃうじゃない？」

「そ、そうですね……」
マシュマロがうなる。それを逃さないとばかりに牡丹が両手を肩に添える。にっこりと笑った笑顔から、静かな迫力が漏れ出していた。
「戦ったばかりで疲れてるとは思うんだけど、お片付けを手伝ってくれないかしら？」
「ぼ、牡丹さん、やっぱり怒ってるですぅ」
貞流の尻尾がまたくたりと垂れ下がる。
「お、俺は仁を病院に連れて行かないと……」
健がいそいそと立ち上がる。

「御子柴さんはこれからここに住むことになるんだし、枡田くんは私の指導を受けて貰うことになるのよ。……ちゃんと私のおねがい、聞いてくれますよね」
二人に笑顔を向ける。物言えぬまま、こくんと二つの首が縦に振られる。
「伝宝くんも、小練さんも。私は連盟に連絡を取りますから。片付けをおねがいしますね。顧問の言うこと聞けますね？」
さらに二つの首が頷いた。

骨董屋「花鳥風月」はその後数日間、店舗改装の名目で休業した。
勇生とマシュマロは魔法部の活動のため、毎日放課後には花鳥風月に向かって、牡丹の店の改修を手伝うことになったのであった。

第3話「狂気の刃」ーその6（後書き）

○アペンディクス
キャラクターデータ
・伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）
年齢：16歳　性別：男　種族：人間
身長：166cm　体重：55kg
クラス（レベル）：レジェンド（3）／ファイター（1）／スカウト（1）

・小練（こねり）マーシュ・マロウ
年齢：16歳　性別：女　種族：人間
身長：155cm　体重：46kg
クラス（レベル）：アルケミスト（1）／ブラックマジシャン（2）／ホワイトメイジ（2）

・枡田健（ますだ・けん）
年齢：18歳　性別：男　種族：人間
身長：181cm　体重：70kg
クラス（レベル）：ソードマスター（3）／ファイター（2）

・御子柴貞流（みこしば・みさる）
年齢：??歳　性別：女　種族：フォックステイル
身長：133cm　体重：30kg
クラス（レベル）：フォックステイル（3）／ブラックマジシャン（2）

番外編４「枡田健、腹をくくる」前編

○枡田健、改修の手伝いをする

枡田健（ますだ・けん）が、段ボール箱を、中に入った様々な器物を傷つけないように極力静かな動きで持ち上げた。

長身の、赤く染めた髪の少年だ。同じ作業のくり返しで、額には汗が浮かんでいた。

「よ……っと、勇ちゃん、ほらよ！」

彼は持ち上げた段ボールを手に、外に止まっているトラックに向かい、その荷台に居る少年に段ボールを渡す。

「わ、っとと……」

健よりも小柄な少年……伝宝勇生（でんぽう・ゆうき）は、重さにふらつきながら荷台の上に段ボールを重ねていく。

二人して、肉体労働の真っ最中だ。

骨董屋「花鳥風月」。

魔術師連盟の連絡員、来嶋牡丹（きじま・ぼたん）の経営するその店は、先日、奈落とクエスターたちの戦いに巻き込まれ、大きな損害を被っていた。

何を隠そう、健もその戦いに参加した一員なのだ。牡丹への弁償の代わりと、彼女からクエスターとしての戦い方を教えてもらう見返りに、こうして店の修理を手伝っているのだ。

思い切りのいい牡丹は、この機会に店全体を改修することにしたらしい。そこで一旦、店にあった魔法のアイテムの類を連盟の支部に保管してもらうために運び出しているところだ。

「でも……大丈夫なのかな、こんな形で運んじゃって」

勇生が新しい荷を受け取りながら呟いた。

低度の魔法結界で人の目を避けているとはいえ、この段ボールひ

とつひとつに魔法のアイテムや、貴重な物品が収められているのだ。魔法や奈落のことを知らない人々や、増してや奈落に見つからないとも限らない。
「まあ、大丈夫じゃないか？　運転手だって、その道のプロなんだろ？」

「そう……らしいけど、かなり高齢っていうか、歳が……」
「まあ、じいさんだったな」
２人は一緒に首をかしげる。
「大丈夫よ。むしろ、彼でもないと不安なぐらいだもの」
店の方から、ほっそりとした女性が顔を出した。当の牡丹だ。
その後ろには、太めの眉に栗色がかった髪の少女。同じくクエスターの小練（こねり）マーシュ・マロウが着いている。

「そっちは、もう終わったんですか？」
勇生の問いに、マーシュ・マロウ……マシュマロが頷いた。
「大変だったのよ。アイテムを全部リストアップして、それぞれ扱い方が違うから、細かい注意まで書き加えて……」
「ずるいよなあ、こっちは汗水垂らして働いてるってのに」
額の汗をぬぐって、健が漏らす。マシュマロはムッと太めの眉を吊り上げた。
「あなたたちはマジックアイテムの事なんて分からないんだから、仕方ないじゃない。役割分担よ、役割分担！」

子供を叱る母親のように腰に手を当てているマシュマロに、思わず健は肩をすくめる。
「で、俺達はあとどれぐらい知的じゃない労働を続ければいいんだ？」
健の皮肉っぽい言葉に、にっこりと牡丹が笑みを浮かべて答える。
「もう終わってもいいわよ」

「お、本当か！？」
声を弾ませる健。
「でも、まだ終わりじゃないですよね？」
勇生の言うとおり、まだ店の敷地には運び出さなければいけない物品がいくつもある。
「おお、そうだな。代わりに誰かがやってくれるのか？」

「いいえぇ。もう終わって良いのは、枡田くんだけよ」
変わらない笑顔で、牡丹が答える。
「って、僕は！？」
「伝宝くんは、そのまま終わるまで続けてね」
「なんでですか！」
さらに不満と驚きの入り交じった声を上げる勇生。その意見をほとんど無視して、牡丹は健の方に向き直った。

「枡田くん、あの剣を選んだでしょう？」
「ああ……そうだな」
健が呟いて答える。店に損害を与えた戦いにおいて、健は戦うための力を求めた。その結果、牡丹の店に保管されていた魔剣を手にするに至ったのである。
「あの剣は、いわく付きというか、いろいろ面倒な逸品なのよ。だから、専門家があなたと会って、話がしたい、って」
「専門家？」
オウム返しに聞く健。

愚痴を漏らす勇生に、マシュマロがはやし立てて作業を再開させようとしているのを見て見ぬふりしながら、牡丹が続ける。
「魔器に関しては、私よりもずっと詳しくて……それに、その剣とも関係がある人よ」
「そうか、ちょうど良かったぜ。この剣のこと、俺自体も全然分か

ってないからな。誰かに話を聞いてみたかったんだ」
にやりと笑う健の口元から、鋭い犬歯が覗く。

目を細めて、牡丹が頷いた。
「今は、この街の近くにある工房に来ているらしいから、すぐに会えるわ」
文句を言いながら座り込む勇生にマシュマロが飲み物を渡しているのを尻目に、牡丹はその誰かの連絡先と住所、地図が一緒に印刷された紙を差し出した。
「工房？　なあ、その専門家ってどんなやつなんだ？」
健が眉をひそめて問いかける。牡丹は、反応を面白がるように少し溜めてから答えた。
「十三代目・無道玄斎（むどう・げんさい）。魔器鍛冶師よ」

○枡田健、無道玄斎を訪ねる

健は二輪車にまたがり、牡丹から知らされた住所を目指して走っていた。
「本当にこっちで合ってるのかよ」
思わず、疑う言葉が漏れる。道はどんどん街から外れ、森林に囲まれたほうへ向かっている。
五月の日差しが作る木漏れ日を浴びながら、健は道の先に目をこらした。
道の先、木々の間に隠れるように、建物が見えてきたのだ。
速度を緩めて、その家の前にバイクを止める。２つの建物が並んで建っていた。片方は普通の平屋のようだが、もう一方は一見しただけで何らかの作業場と分かった。壁は頑丈で背も低く、煙突が生

えている。
「工房……か」
ぽつりと呟く。来てみれば、確かにその通りの外見だ。
「えー……と、玄斎って人に会わないとな」
十三代目・無道玄斎。
聞けば、玄斎は刀鍛冶だという。
「名前からして、いかにも、強面のオッサンって感じだよな……」
健のイメージは、玄斎についてすでにヒグマのような大男の像を結んでいた。
「だいたい、この時代に刀鍛冶って、なあ。よくそんな商売が成り立つもんだ……つっても、この剣を見ちまったら、そうとも言ってられないか」
魔法によって作られた空間に収納した刀を取り出す。こうして『魔法』なんてものに自分が触れているだけでも信じられないのだ。時空鞘の使い方も、牡丹にかなりの時間を割いて教えてもらったのだ。

いわく、
「あなたは魔法を使うには、伝宝くんよりももっと才能がないわね」
とのことだった。
健は別段それを悔しいとは思わなかった。むしろ、勇生に才能が多少なりともあることを喜んだぐらいだ。
とはいえ、牡丹はこうも言った。
「でも、シャードがあなたを選んだことにも、必ず意味があるはずよ。あなたにしかできないことがあるはずだわ」
と、慣れない環境で自信を取り戻すための回想に浸っているとき、背の低い方の工房の扉が開いた。
「う……っ！？」

現れたのは、女だった。
歳は２０かそこらと言った所だろう。ウェーブのかかった黒髪を、伸ばしすぎたとでも言うように後ろに適当に流している。
黒い着物をやはり適当に羽織り、赤らんだ肩を露わにしていた。その肩にも、額にも汗が浮かんでいる。
大男の登場を予期していた健は、思わず息をのんだ。

その女が、いきなり敷地内に現れた背の高い少年に対して、不審げな目を向ける。
「君は？」
落ち着いた、低い女のハスキーヴォイス。
「ま、枡田健だ。来嶋牡丹って人から、ここに来いって言われて……」
こんな時こそ、勢いを無くしてはいけない。健は背筋を伸して、女に目を向けた。

「ああ、君が……聞いているよ。魔器使い（ソードマスター）に覚醒したばかりだって？」
「ああ。それで、無道玄斎……先生に会いたいんだが」
尊称を少しためらってから付け足したが、あまりに慣れない言葉で、思わず歯が浮きそうだ。自分の肌にむずがゆいものが走るのを、健は必死に押しとどめた。
「うん？」
女は目を丸くした。そして、意味を計りかねるように首をかしげる。
「あん？」
健もまた、首をかしげる。まさか、訪ねる場所を間違えたのか？
いや、そんなハズはない。彼女は健の名を知っていたのだから。
「ああ」

と、女がぽんと手を打った。
「いや、すまない。私は普段、滅多に人に会わないからな。いちいち説明する機会があまり無いんだ」
「な、何の話だ？」
女がくすくすと笑うのに、健はあっけにとられた様子でまばたきしている。自分でも間抜け面だろうなあと考えながらの間抜け面だ。
「何、簡単なことだ。十三代目・無道玄斎というのは、私のことだ」
相変わらずの間抜け面で、健はぽかんとその顔を見つめてから、
「い、いいっ！？」
間抜けの極みの声をあげた。

○無道玄斎、何故を聞く

平屋の中。健は玄斎と向かい合い、座布団の上に座っていた。もちろん、正座なんて滅多にしないのでむずがゆかったので、あぐらである。
玄斎は締め切った工房で作業をしていたせいで火照った体を冷ますように窓際にもたれかかり、そのくせ熱い茶をすすっている。
「何時間も集中して作業をするからね。終わった後は熱い茶をすすると決めているんだ。刀と向かい合って研ぎ澄まされた心に冷たい水を注ぐと、陶器のようにひび割れてしまうからね」
「はあ」

健は向かい合いながら、妙な居心地の悪さを感じていた。それは玄斎が、健にとってもっとも頭が上がらないタイプの人間だからだ。
職人。自分だけのこだわりと決まりをもち、他の人間の考えになびかない。健がもと居た街を離れて中学に通っていた頃にも、そういう生徒が居た。自分のやりたい事をやり、他の生徒の言うことを滅多に聞かない。体は小さいが、決して腕っ節にものをいわせよう

としても従わない。健は彼があまり得意ではなかったが、不思議と嫌いではなかった。決して人の邪魔をせず、邪魔をさせない。一定の距離が自然に生まれていた。
　要するに、彼らは決して自分を譲らない。他人が自分よりも権力を持っているからといって意見を聞いたりはしないのだ。その態度に、健は憧れもするし、苦手にも思う。

「私から呼び出しておいて、驚かせてすまないね。牡丹がこんなに早く送ってくると思ってはいなかったから」
「いや、それはいいんだけど……何のために呼んだんだ？」
　眉をひそめて問う健。玄斎はふうっと息を吐きながら、彼の目を見た。
「君の持つその剣の由来を話しておこうと思ってね。みせてくれるかな？」
「あ……ああ」
　健は自分の前に剣を置いた。巨大な剣だ。それを玄斎は引き締まった腕で自分の方に引き寄せ、ゆっくりと鞘から抜いた。

「うむ……やはり。間違いない」
　ひとり、納得した様子で玄斎が呟く。取り残された気がして、健は彼女の気を損ねないように声をかける。
「やはりって、一体何が？」
「この剣はね、私の師が打ったものなのだ」
「師って……師匠ってことか？」
「ああ。十二代目の無道玄斎だ。彼は娘を亡くしていてね。他でもない、奈落の手によって」
　剣を鞘に収めながら、玄斎。あまりに率直な言葉だったので、一瞬、健はその言葉の意味を見過ごしそうになった。
「奈落の手によって……って、その人の娘が奈落に……殺されたっ

てことか？　そうか、それでそんな剣を」
「剣の声を聞いたのか？」
「それだけじゃない。妙な試練を受けさせられたよ。よく分からない場所で妙なやつと戦わされたりな」
「それは、大変だったね。剣にも気むずかしい奴が居てね、自分の方から使い手を選ぶんだ。こいつは師匠の奈落への恨みがたっぷりこもった剣だから、その恨みを晴らせる使い手を求めていた。残念ながら、そんな使い手は二十年以上も、現れなかったわけだが」
　玄斎の視線が健を見据える。健はその剣の意外な出自に驚きながらも、どこかで納得してもいた。

「それで、俺を呼んだ用ってのは？」
「ああ、そうだね。率直に言えば、私も君がどんな人物なのか知りたいのだよ。師匠の剣を預けるにふさわしい人間なのかどうかを」
「また試練かよ。俺はそういうの、苦手なんだよ。面接が嫌でバイトしてねえくらいなんだぜ」
「案外に繊細なんだな。悪くない」
「もう始まってんのかよ」
　げっそりした様子で言う健に、くっくっと玄斎が肩を揺らした。かと思うと、ふっと彼女が身に纏う気配が変わり、力の抜けた、しかし鋭い視線が健に向けられた。

「私が聞きたいのはひとつだけだ。君はなぜ奈落と戦うんだ？　何のためにその剣を使う？」
　短い問いかけ。それは健自身が自らに何度も問いかけ、しかし答えの出せなかったものでもある。
「それは……」
　健が答えに窮する様子を見て、玄斎は目を細めた。
「まあ、今すぐ答えなくてもいい。どうだ、手を動かしながら考えてみては。黙って座っているより、ずっと考えがまとまるものだぞ」

「俺に鍛冶の手伝いをしろっていうのか？」
「いやいや、鍛冶は繊細なものだからね。もっと簡単なものにしたよ」

玄斎は奥を示した。今話している和室の奥には、倉庫があった。なにやらものがごちゃごちゃと積まれている。鍛冶に使う道具やら、雑誌やら、服や何やが、雑然と並んでいた。
「あれは私の寝室だ」
「何ぃ！？」
やはりさらりと言ってみせる玄斎。彼女はあくびを漏らして、ごろりと横になった。
「すまないが、精神集中ついでに片付けておいてくれ。昨晩から寝ずに作業をしていたから、そろそろ私は限界だ。よろしく頼んだ」
そして、自分の腕を枕に寝息を立て始めた。なんとも豪快な女だ。

「だから嫌なんだ。こういうの…・・」
ぼつりと健は呟く。やれやれと思いながらも、その寝室だと主張している物置に向かい合った。
「これなら、花鳥風月で手伝いしてるほうが楽だったかもな……」

番外編４「枡田健、腹をくくる」後編

○枡田健、掃除をする

しばしの間、健は立ち尽くしていた。
ごちゃごちゃと積み上げられたがらくたの山に呆れていたのだが、やがていつまでもそうしているわけにもいかない、と思い直して、まずは手近の大物からはじめることにした。
「置物や飾り物は知り合いの職人から貰ったものなんだ。貴重なものもあるから、丁重に扱ってくれ」
向こうで横になっている玄斎があくび混じりに言った。なんて女だ、と心中で毒づく。
「あんたがすでに丁重に扱ってねえじゃねえか」
こっちは口に出して愚痴り、巨大な狸の置物と向かい合った。

これは外に置いておくものだろ、と思いながらも、気合いを入れて首をかしげた狸をまっすぐに抱きしめて持ち上げる。
「ぐおおおお……！」
場所を占有している土の焼き物を持ち上げて、壁際へ。それだけで肌の表面にじわっと汗が浮かぶ。
「疲れてるんだ。静かにしてくれないか？」
後ろから玄齋の声。ぴきぴきと健の額に怒りの兆しが現れる。
「魔剣の話が聞けるっていうから、来てやったのに、なんでこんなことを……」

ぶつぶつと呟き、それでも手を動かす。うずたかく積まれた箱の山を一度部屋から運び出す。
「おい、これはこのあたりに置いておくぞ？　俺にはどうして良いか分からないし……」

寝室（と玄斎が言い張っている場所）から顔を出し、声をかけようとしたとき、ふと玄斎がすでに寝息を立てていることに気づいた。
長い髪を床に広げっぱなしにして、肘で頭を支えている。汗がうっすらと浮かんだ肩が露わなままで、風邪をひかないか心配になるほどだ。
「……ったく、だから嫌なんだよ」
大きくため息を吐いて、部屋の中に戻る。

やがて、健の意識は愚痴や反感を追い出し、部屋を片付けるという目的に向かって集中しはじめた。もともと、打ち込むと夢中になる方だ。それに、あれこれ考えるよりも体を動かす方が性に合う。
明らかにゴミと分かるものもある。健は酒瓶が何本も出てくるんじゃないかと思っていたが、代わりにペットボトルや空き缶がいくつも出てきた。律儀なことに、酒は飲まないらしい。
使いさしの日焼け止めのボトルやアイマスクがいくつも出てきた。どうやら、玄斎はものをすぐになくすくせに、同じものを買うようだ。
「しかも、目ぇ隠してなくても寝られるんじゃねえか」

さすがの健も、なんとなく、玄斎がどんな人間なのか分かってきた。
赤く脱色した頭を掻きながらも、無心に打ち込んでいる。何も考えずに二輪を乗り回しているときにも似た集中。
「手を動かしながら考える、ね」
彼女の言いたいことがなんとなくわかり初めて来ていた。
漠然と、問いが目の前に浮かぶ。
なぜ、戦うのか。
問いかけが健の心の中をのぞき込んでくるようだった。

やがて。

健は部屋の中からゴミの類を運び出し、一応は分かる限り分別してゴミ袋に放り込んだ。
それが終わる頃には、もう日が暮れ始めていた。
「さて、と……」
ようやく、かろうじて寝室と呼べなくもない状態になってきた部屋から這い出すように客間に戻り、ぱしぱしと両手を叩く。
「答えは出たかな？」
玄斎は先ほどとまったく同じように座り、茶をすすっていた。涼しげな視線を向けられ、健はやれやれと肩をすくめた。
「まあ、なんとかな」

○枡田健、自らを語る

再び二人は向かい合っている。窓の外に遠く見えるそれは夕暮れに赤く染まり、どこか遠くからカラスの鳴き声が聞こえて、まるで童謡の風景だ。
郷愁にかられそうな思いと共に、健はどこか心に穴が空いたような感覚を覚えていた。思い出を振り返るのが、あまり得意ではないのだ。
「さて、答えを聞かせてもらおうか」
健の回答を楽しみにしているとでも言うように、目を細めて玄斎が問う。ゆっくりと健は頷いた。

「俺はな、昔からこんなだったんだ。体もでかいし、気も強いし、他の奴とつるむのは得意じゃねえけど、頼られることは多くてな」
あぐらを掻き、両手を膝に乗せ、土俵入りの力士のような面構えだ。
「だから、魔剣が頼るならそれに答えると言うことか？」
「そうじゃない。もうちょっと長い話になる」

そうか、と玄斎は短く答えて、湯飲みを手に取った。
健は自分の腿を両手で叩き、じっと前を見つめた。見つめる先には玄斎が居たが、その姿は別の何かにぼんやりと重なるようだった。
「子供の頃は、ここよりもずっと田舎の町に居たんだ。小学校はでかかったんだぜ。町の子供はみんなそこに居たからな。で、俺は六年生。自然な流れってやつで、誰がケンカしただなんだって話は俺のところに持ち込まれてくるんだ」
やれやれ、と健は赤い頭を掻いた。
滅多に、昔のことなんて話さないのだ。思い出そうとすると妙な気分になるし、今の方が昔よりも楽しい……と、常に考えて１８年、生きてきたのである。

「で、まあ、そのときも俺のところに、子分って言うか……まあ、そういうやつから、下級生のケンカが持ち込まれてきてさ。一回決着がついたはずなのに相手が諦めないっていうんで俺に何とかしてくれってさ」
玄斎はじっと黙って聞いている。意図を推し量るように、健を見つめていた。
「ケンカの原因は何だっけな……そいつの親父を、誰も見たことがなくてさ。父親が居ないから、根性なしだって、そんな風にからかってたら、そいつがキレてさ。で、下級生どもじゃ対処できないって。

「その相手と会ったんだ。１，２発殴って言うことを聞かせようと思ったんだよ。俺はそのときから面倒くさがりだったから。でも……」
健は目を閉じた。まぶたの裏に、そのときの光景が……いや、相手の顔が浮かぶようだった。
「やっかいだと思ったんだよ。こいつは絶対、言うことを聞かせら

れる相手じゃないってな。で、なんでそんなに怒ったのか、聞いてみたんだ。そしたらそいつ、『父親が居ないわけじゃない』って言ってさ」

あぐらをかいた膝をぎゅっと握っていたことに気づいて、力を緩める。玄斎に視線を戻した。

「そいつ、バカにされたから怒ってたんじゃなくて、間違ったことを言い続けてるやつを許せなかったらしい。まあ、そいつをからかってた下級生たちは子供だから、勝手にからかったりしてただけなんだけどさ」

はー、と息を大きく吐き出す。

「普通、そんな正義感でケンカしたりするかよ。自分が損してるわけでもなんでもないのにさ」

「それで、いつ剣の話になるんだ？」

「もうすぐだよ。それから、そいつとつるむって言うか……たまに一緒に遊んだりしてな。その後、俺は中学に上がるときにその町からは出て行ったんだけど……」

なんとなく気恥ずかしい気分になって、こほん、と咳払い。

「そいつの言ってたことが忘れられなくてな。だって、間違ってるからでケンカできるんだぜ。自分のためとか、誰かのためってんじゃない。良いとか、正しいとか、そう言うことを信じてるんだ」

大きく息を吸い込む。背中がじりじりと焼けるように熱かった。

「……俺も何か、信じられるもののために戦えるようになりたかったんだ。あの剣のためってんじゃねえぞ。奈落は俺にとって、許せないことをしてるからだ。あんなのがのさばってるのを見過ごすことはできない」

「それでいい」

玄斎はにやりと笑ってみせた。

「剣は武器だ。すなわち道具だよ。決して、目的や理由になってはいけない。だが、力にはなってくれるだろう。君が、信じるものを見いだすための」

「合格ってことか？」

「世間話さ。失格なんてものはないよ。私がこの剣を封印しても、剣は君の元に現れるだろう……あるいは、君が剣のもとに」

鋭い視線が向けられる。もし剣を取り上げられれば、自分はどうするだろうか？　……はっきり言って、納得して元の生活に戻れる自信はなかった。

「しかし、最初に見た時はかなり厳つい男が来たものだと思ったが、君は案外子供っぽいな。ヒーローに憧れているとは」

「だ、誰がっ。別に良いだろ！」

かっと顔を赤くなるのを感じた。玄斎はしかし、小さく肩を上下させるだけだ。

「何も、ダメだとは言っていないさ。若いな、と思っただけだ」

「あんたもそんなに歳食ってるわけじゃないだろ」

「おや、ありがとう」

「あのなあ……」

若いと言われて礼を言う玄斎に、健はまたがっくりと肩を落としそうになっていた。

「まあ、とにかく。君がどういう人かは、少し分かった気がするよ。用事はこれで終わりだ。一日中付き合わせて悪かったな」

「まったくだ」

掃除で疲労した上に、緊張感のある面談で凝った体を伸ばす。あくびが漏れるのを、隠すこともしなかった。

「この剣が力を求めているようなら、私の所に来てくれ。剣のことなら、多少は分かってやれるつもりだ」

きちんと鞘に収まった剣を、玄斎は床の上に差しだした。健は頷き、それを時空の中にある鞘に収める。

「それじゃあな。楽しくはなかったが、ま、悪い時間でもなかったぜ」

「ああ、そうだ。ひとつ聞いても良いかな？」

「なんだよ？」

立ち上がりかけたところに声をかけられて、健は振り返る。玄斎は座ったまま見送るつもりらしく、立ち上がるそぶりさえ見せない。

「君が憧れている、その少年はなんという名前なんだ？」

好奇心が目に浮かんでいるのが分かった。が、健は今度こそ、気恥ずかしさを抑えることはできなかった。

「野暮なこと、聞くもんじゃねえぜ」

「そうか」

そして、健は立ち上がる。その背中に、玄斎は茶目っ気たっぷりに言った。

「立ったついでに、茶を淹れてくれないか？」

「俺もひとつだけ、言わせてもらうぞ」

家の中に入ろうとする見知らぬ男を見つめる犬の視線を、健は向けた。

「自分でやれ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8917l/

アルシャードガイア　奇跡の日々

2011年6月23日08時55分発行